

# 戦時下の日本陸海軍とスポーツ

高 嶋 航

はじめに

1945年8月12日――

赤熱ノ日ハ照リ照リテ空ニ在リ。下界ノ全テハ暑サニ喘ギ、道ハ溶ケ、草木ハ葉ヲ垂レ、氣息奄々タリ。今ヤ酷熱ノ季ハ至レリ……午前ノ自選作業ハ、一班二班対抗ノ野球ヲヤル。一班振ハズ。

灼熱の太陽が照りつける運動場で、白球を追っていたのは、海軍経理学校予科の生徒たちである。つい2週間ほど前、やはり野球をしていたところ、敵機の来襲があり、校舎の正面の上に掲げていた菊の紋章の周囲に銃弾がふりそそいだ。もちろん野球は中止である<sup>1</sup>。このように、戦争の最末期まで、しかも軍の学校で、野球がおこなわれていたという事実と、現代の日本人が戦争や軍隊に対して持っているイメージとの間には、大きな隔たりがある。

しかしながら、戦争の経験者が多く存命していた時代には、軍隊でのスポーツ経験がさほど違和感なく受け取られていたのではないか。1979年に公開された映画『英霊たちの応援歌：最後の早慶戦』（岡本喜八監督）には、海軍航空隊に入隊した元野球部員たちがキャッチボールをするシーンがある。神山圭介（1929年生）による原作の方では、横須賀の第2海兵団で、土浦、出水、三沢の海軍航空隊で、そして特攻に飛び立つ前に鹿屋基地で、野球やキャッチボールをする場面が出てくる<sup>2</sup>。

その翌年、読売新聞社主催の第3回戦争展で戦没野球人コーナーが設けられた。展示の趣旨は、「戦争のために愛してやまない野球を捨て、ついにかえらなかつた野球

1 讀苦会五十周年記念事業実行委員会『檀原・昭和二十年：海軍経理学校予科生徒の記録』編者刊、1995年、264、287頁。

2 神山圭介『英霊たちの応援歌：最後の早慶戦』文藝春秋、1978年。

人たちの無念の声」を伝えることにあり、軍隊での野球が取り上げられたわけではない<sup>3</sup>。しかし、このコーナーを担当した岸本弘一（1928年生）が「バットやグラブを捨てて、出征した選手たちは、よけい野球に愛着があったやろうなあ。これまでも、軍隊へ行ってからも野球をやった、という話をよう聞いたけど、最後の最後まで忘れられなかったと思うねん<sup>4</sup>」と述べているように、当時はまだ軍隊での野球の記憶が残っていた。

それから10年後、吉林省敦化にあった陸軍病院の関係者が刊行した書物に次のような一節がある。

夏の時分には野球もやったが、走り巾飛び、棒高飛び等の運動もした。……今写真をみていると、そんなに悲惨な顔もしておらず、又逃亡とか自殺とかそうした暗い事件もなかったから、皆それぞれの智慧を働かして軍隊生活を切り抜けることに全力を尽くしていたに違いない<sup>5</sup>。

写真にうつる自分たちの楽しそうな様子を、まるで他人事のように眺めている。スポーツの記憶は写真によってようやく呼び起こされたものの、それはこのとき彼がもっていた戦争体験のイメージと大きくかけ離れていたのだ。辛い記憶が楽しい記憶を押しつぶしてしまったのである。

2008年に映画『ラストゲーム 最後の早慶戦』（神山征二郎監督）が公開された。『英霊たちの応援歌』は最後の早慶戦以後の軍隊生活に主眼を置いていたが、こちらは最後の早慶戦にいたる過程に焦点を当てている。そこで描かれる軍は、一方的にスポーツを弾圧する存在でしかない。

戦争を辛い経験として記憶するオーストラリア人捕虜たちも、スポーツの記憶を語ろうとしない。ローリー・リチャーズは日本軍の捕虜となり、「死の鉄道」として悪名高い泰緬鉄道の建設現場に送られた。1943年2月と3月の彼の日記には、同鉄道の起点となるタンビュザヤでテニスやサッカーをしたことが記されている。ところが、リチャーズが2005年に出版した戦争体験記は、この日記を参照して書かれたにもか

3 読売新聞大阪社会部編『戦没野球人：新聞記者が語りつぐ戦争9』読売新聞社、1980年、22頁。

4 読売新聞大阪社会部編『戦没野球人』249頁。

5 菊池五郎・菅波大十一編『砲台山の朝の風：敦化陸軍病院小史』敦化会、1988年、104頁。

かわらず、スポーツをしたことがまったく記されていない。これについてブラックバーンは「苦痛と我慢の物語にたやすく収まらなかったからだ」と述べている<sup>6</sup>。

ブラックバーンはオーストラリア人捕虜のスポーツ活動に焦点を当てることで、「苦痛と我慢の物語」に回収されない戦争の経験を明らかにした。捕虜生活にも楽しいことがあった——このような言明は、捕虜生活の辛さも知らない人間による歴史の歪曲として、道義的な非難にさらされる可能性があるだろう。辛苦と絶望のなかで死んでいった捕虜が数多くいたのは事実である。一方で、捕虜たちがスポーツを楽しんだことも「事実」である。これと同様のことは日本軍の兵士についても言えよう。彼らにもさまざまな娯楽があった。軍は日本国内で娯楽を敵視したが、戦っている兵士の娯楽まで奪い去ることはできなかった。しかし、米軍などと比べると、兵士の福利厚生に関する日本軍の対応はあまりにも皮相的であった。娯楽に対する日米両軍の態度の違いから、日本軍の特徴を明らかにすること、これは本研究の課題の一つである。本稿はその基礎作業であり、前稿「菊と星と五輪」で扱った1920年代以降の日本陸海軍におけるスポーツの実態を明らかにすることを第一の目的とする<sup>7</sup>。戦時中の日本軍のスポーツについては、これまでまったく研究がなされておらず、捕虜を「苦痛と我慢の物語」から解放したブラックバーンでさえ、次のように言っているからである。

日本軍は兵士たちに柔道や剣道、相撲のような武道をすることしか許していなかった。サッカーや野球、バスケットボールなどのスポーツは、日本人に人気があったものの、「敢闘」という点で、取るに足りない、時間の無駄だとひややかな目で見られていた<sup>8</sup>。

しかし、ブラックバーン自身、オーストラリア人捕虜と日本軍兵士との野球やサッカーの試合に言及しており、このような理解が正しくないことは明らかである。

本稿で取り組むもう一つの課題は、軍とスポーツ界の関係である。戦時下のスポーツに関する従来の著作は、基本的に「スポーツ受難史観」の呪縛から完全に脱してい

6 Kevin Blackburn, *The Sportsmen of Changi*, Sydney: New South Publishing, 2012, p. 4.

7 拙稿「菊と星と五輪：1920年代における日本陸海軍のスポーツ熱」『京都大学文学部研究紀要』52号、2013年3月。以下の「前稿」はこの論文を指す。

8 Kevin Blackburn, *The Sportsmen of Changi*, p. 167.

ない。『戦没野球人』はその典型であるし、2010年に刊行された山室寛之の『野球と戦争』も、副題を「日本野球受難小史」としており、やはり同じである。むろん、スポーツの愛好家に着目するか、スポーツの一流選手に着目するか、スポーツ界の指導者に着目するかによって、「受難」の程度やあり方はさまざまで、そこから描き出される戦時下のスポーツのイメージも大きく異なるはずである。いずれの場合でも、これまで受難の側面が強調されすぎてはこなかっただろうか。近年、著者の一連の研究も含めて、スポーツ界が軍の「弾圧」に一方的に服していたのではなく、むしろ積極的に戦争に協力した側面もあったことが明らかになりつつある<sup>9</sup>。しかしそれらの研究は「弾圧」をしたとされる軍そのものにあまり考慮を払ってこなかった。軍による「弾圧」なるものが、いったいいかなる意図でなされたのか、あるいはそもそも軍にはスポーツを「弾圧」する意図があったのか、こうした点はいまだ明らかにされていない。言うなれば、従来の研究はスポーツ界の側からみた戦時下のスポーツであった。軍の立場から戦時下のスポーツを見ることで、「スポーツ受難」の実態をより立体的に捉えることが可能となり、ひいては「スポーツ受難史」の枠組みを乗り越える道が拓かれるはずである。

本稿は以上の問題意識に基づき、さらに前稿で挙げた男性性と鍛錬／娯楽の問題に留意しつつ、以下の手順で考察を進める。第1章では海軍を論じる。第1節で国内の学校、航空隊、団隊・工廠、第2節で国外の戦場におけるスポーツの実態を明らかにする。そして第3節で海軍の体育がいかなる方針のもとでおこなわれていたかを検討する。第2章では陸軍を論じる。第1節で国外、主として中国大陸の戦場、第2節で国内の学校、航空隊、病院、工廠におけるスポーツの実態を明らかにする。第3節で民間スポーツ界との関係を、明治神宮大会、ホッケー、野球、ラグビーに絞って検討する。第4節では、以上で明らかにした陸軍とスポーツの関係を、陸軍のスポーツ観と体育の方針から見返してみたい。このほかの問題、たとえばアメリカ軍との比較、捕虜のスポーツなどは稿を改めて論じたい。なお、本稿で扱う「スポーツ」は、軍、とくに陸軍による「弾圧」の対象とされたスポーツに限定する。したがって、軍が奨

---

9 拙稿「戦争・国家・スポーツ：岡部平太の「転向」を通して」『史林』93巻1号、2010年1月。

励した武道、相撲、グライダー、馬術、スキーなどは考察の対象としない<sup>10</sup>。

## 第1章 海軍

### 第1節 国内

#### A. 海軍機関学校・海軍兵学校

1930年代以降も海軍ではスポーツが盛んであった。戦局の悪化により、民間スポーツ界との交流こそ減少したものの、冒頭に挙げた海軍経理学校にみられるように、スポーツは戦争の最末期まで続けられた。

海軍機関学校では、依然ラグビーが重視されていた。1939年の「訓育実施標準」によれば、ラグビーは1年で12回、2・4年で各25回実施されることになっていた。これは2・4年の場合、ほぼ毎日おこなわれる体操や剣道（年50回）には及ばないものの、遊泳術（年30回）に次ぎ、海軍が熱心だった相撲（年20回）、そして銃剣術（年15回）よりも多い数字である<sup>11</sup>。

民間チームとの対戦は1930年代を通じて続けられた。満洲事変前後の43期（1934年卒）の生徒は、相手は第三高等学校（学校名は初出のみ正式名称を用い、以下は略称とする）だけだったと証言するが、44期の生徒は、三高と神戸高等商船学校とは定期戦があり、京都帝国大学で冬合宿をしたさいには、京都帝大や立命館大学と練習試合をしたと記している。47期（1938年9月卒）の生徒は、三高、京都帝大OBの神稜クラブと定期戦をおこない、同志社大学、神戸高等商船学校、三重高等農林学校、明治大学と試合をした。海軍機関学校が苦戦を強いられた相手は、京都帝大と同志社大で、明大には0-76と大敗した。しかし、それ以外の学校にはたいてい勝利した。民間チームとの最後の対戦は、1941年5月18日の対三高戦で、18-12で海軍機関学

---

10 スキーは戦略的な価値のほか、軍隊によって導入されたこともあり、軍隊スキーに対する研究者の関心は高い。長内誠一『大湊海軍スキー発達史』著者刊、1971年、同『大湊海軍スキー史』著者刊、2008年、中浦皓至「大正時代における大湊要港部の海軍スキーについて」『日本スキー学会誌』16巻1号、2006年8月、同「第13師団による明治45年の第1回スキー講習会に関する文献的研究」『体育史研究』26号、2009年などを参照。

11 村田駿『海軍機関学校史：同窓の友とその遺族のために』アジア文化総合研究所出版会、2007年、304-305頁。

校が勝利している<sup>12</sup>。この試合を見学した海軍機関学校の生徒は「本日の見学中、感じた事は流石に三高、彼等の三高魂あるを認めたり、「セイビング」「タックル」は実に猛烈なり」と相手の攻撃精神を率直に認めた。三高、京都帝大との繋がりラグビーの試合だけではなく。三高魂を認めたこの生徒は、三高チームに中学時代の友人を見つけている。1944年に心理学担当武官として着任した苧阪良二によれば、「本館二階の第二文官室は京大の哲学、史学、文学各科卒業の新鋭の文官教官ばかりで占められていた」という。苧阪は戦後、京都大学の教授となるが、海軍機関学校時代はバレーボールばかりしていたと回想している<sup>13</sup>。

海軍機関学校の強さは、第一に体力であったが、技術の向上にも熱心に取り組んだ。前稿で指摘したように、白浜時代は慶應義塾大学にコーチを依頼したが、舞鶴に移ってからは京都帝大からコーチを受けた。1930年代の前半には、河口湖にあった慶大の合宿所で合宿をしたり、慶大から選手を招いたりして、慶大との関係が深かったが、1936年4月に明大の北島忠治監督にコーチを受けてからは、明大との関係が深まり、北島監督は1942年5月まで毎年選手を連れて指導に訪れた<sup>14</sup>。52期の阿部秀夫は北島の指導について次のように語っている。

北島流のランニングパスが一番苦しかった。バックラインを組んで100ヤードのランニングパスを全力疾走でやるわけだが少しでもミスすれば「ハイもう一回」とニコヤカにやり直しさせる。完全にパスが通るまで何度でも平気でやらせる。又帯同して来たバックローの現役選手はと見れば柔剣道合はせて十段を越えるような我々の猛者達を3人ぐらい腰の廻りにブラ下げて平気で全力疾走している。之だからタックルは膝から下にしなければダメなのですとニコヤカに云う北島監

12 阿部三郎「青春ラグビー」『機第四十三期級会々報』（舞鶴地方総監部所蔵）、「加藤静治」海軍機関学校第44期級会『我が青春の記録：海軍機関学校入校50周年記念会誌』編者刊、1982年、座光寺一好『海軍少佐 小林平八郎の生涯』画禅堂、1982年、45-46頁、斉田元春「海軍機関学校第53期生徒の生活記録」（舞鶴地方総監部所蔵）。

13 苧阪良二「教えざるの記」『五十六期々々報』13号、1984年3月31日。

14 北島〔忠治〕監督「機関学校生徒のラグビーをコーチして」平川正巳『第四十七期生の記録：海軍機関学校入校50周年記念』同誌編纂委員会、1985年、芹澤進『追憶：海軍機関学校五十四期ノ記録』海軍機関学校54期会、1976年、68-77頁。

督の言葉には説得力が伴う。我々の訓練は総合的に物凄いものだと云う自負が明治大学のラグビーを見たらテンデ問題にならない程甘いものだと云う事がよくわかった<sup>15</sup>。

それほど北島の指導は厳しかった。北島自身は、海軍機関学校のラグビーについて、技術的には上手くはないが、精神については大いに範とするに足ると賞賛している。

平素、わが明大チームが云々するラグビー精神即ち倒れてもなお止まざるの気魄を、機関学校のラガーに見せて貰ったような気がする。プレーに対する研究心の強いこと、自分のわからないことは率直に質問する、練習に出る際の支度の早いことは実に感心させられた。かかる点等は、大学選手の学ばなければならないことであろう。ラグビー技術に於ては、未だしと思う点が多々あるが、これは学校の性質上、時間的に余裕のないことであるから致し方ないと思うが、一年に三〇時間で四年間のプレーヤーとしては上手過ぎる位である。……機関学校のラグビーの行くべき道について、私の希望は現に機関学校に於て指導されているとおり、単に「上手な鮮かなプレーを行なわんとしてはいけない。飽くまでも頑強な、力強い、元気なプレーヤーを心懸けること」だ。そして、その間に体得した精神によって帝国海軍の向上に資せられんことを、国民の一人として希望する<sup>16</sup>。

北島はラグビーを通して帝国海軍の軍人らしさを感じとり、ラグビーがさらに帝国海軍の資質を向上させると信じていた。もちろん、大学のラグビー選手に求められる資質と、海軍機関学校の生徒に求められる資質には違いがあったが、海軍とラグビーの男らしさはけっして矛盾するものではなかったのだ。

1941年5月を最後に民間チームとの対戦はなくなったが、春秋2季のラグビーは続けられた。海軍機関学校の教頭は、山中朋二郎（海機21期、任期：1937年12月-1939年11月、1941年10月-1942年10月）や沢達（海機22期、任期：1939年11月-1941年10月）らラグビーにゆかりの深い人物が続いた。そして1943年10月に

---

15 阿部秀夫「生徒館生活のエピソード」海軍機関学校52期会『海機52期の記録と追憶』続編、ホンヤク出版社、1990年。

16 北島監督「機関学校生徒のラグビーをコーチして」。

はスポーツに熱心な柳原博光中將が就任した<sup>17</sup>。

1945年4月に入学した野木茂(海機58期)は、北野中学校時代にラグビーの選手だった。中学では動員や空襲でラグビーどころではなかったのに、舞鶴ではラグビーが堂々とおこなわれていることにまず驚き、1943年に改正された新ルール(後述)が適用されていることにさらに驚いた<sup>18</sup>。最後のラグビー試合は、1945年5月27日の海軍記念日におこなわれた部対抗闘球競技であった<sup>19</sup>。

海軍兵学校でもスポーツは続けられた。1930年代前半の状況については前稿で触れたので、ここでは最末期の状況、具体的には1945年3月に開校した針尾分校について触れておきたい。服部洋(海兵78期)は、母校熱田中学校で1943年以降球技ができなくなったのに、海軍兵学校では「野球・バレーボール・テニスの用具が豊富に揃えられており、積極的に活用するよう奨励された」ことに驚いた。もっとも、バレーボールのボールやテニスのラケットは佐賀県の女学校をまわって、野球の用具もまた校外から、やっとのことでかき集めたものであった。針尾分校には武道館とともに、バレーボール、テニス、バスケットボールのコートが設置されていた。これらのコートは学生自身が整地して作ったものである。7月に同校は防府に移転するが、連日の空襲にもかかわらず、教官の指揮のもとコートづくりが進められた。同校の教官にはオリンピック水泳の金メダリスト鶴田義行と遊佐正憲がいた。また、海軍体操生みの親のひとりで、落下傘部隊長としても有名な堀内豊秋教官は、「ストレッチ ユアアームズ トゥーザ サイド」という具合に、体操の号令を全て英語でおこなっていた。学生たちは昼食が終わるやいなや、野球の用具を確保するために部屋を飛び出して練習に励んだ。野球、バレーボール、バスケットボールは分隊対抗で試合がおこなわれたが、バレーボールは「アタックなどもなしで、とに角相手へ返してさえやれば、いずれ相手がミスをして当方に点が入る」というレベルだった。8月にはいると赤痢が広がったが、それでも同月7日には野球の試合がおこなわれている。翌8日にはB24の爆撃で生徒館が燃えた。そしてそのまま終戦を迎えた<sup>20</sup>。

17 柳原については拙稿「菊と星と五輪」を参照。

18 野木茂「機関学校ラグビー」『五十六期々会々報』23号、1989年5月15日。

19 「五十六期生徒生活」『五十六期々会々報』35号、1995年12月15日。

## B. 海軍航空隊

航空部門については前稿で触れなかったので、1920年代の状況から見ておきたい。1916年に設置された横須賀海軍航空隊は海軍で最初の航空隊であった。横須賀という土地柄、スポーツも盛んだったと思われる。1925年度体育計画によれば、全隊員を銃剣術、剣道、柔道、相撲、野球、庭球、籠球・排球、「トラックフィールド」、弓術のいずれかに振り分け、さらに体操、遊泳、駈歩、行軍、登山、綱引、蹴球については全員に課すと定めている<sup>21</sup>。飛行機の操作にスポーツの経験が役立つことは早くから認識されていた。

雪靴隊、自転車隊、或は飛行機隊等の如くスポーツを行ふ事と相関連して居る軍隊、即ち其の職務は特別な機械を用ふる事に存する特別隊に取つては彼等が個々の任務に就かしめられる程度に於て将校と雖も又兵卒と雖も一般にスポーツ的な練習を必要とするものであつて、前に述べたやうな規律的訓練に依る養成は必要な場合に於てのみ目的に叶つて居るのである<sup>22</sup>。

この文章の著者、出口林次郎は民間スポーツ人としての立場から、飛行機、自転車、スキーにはスポーツが有効であると認識していた。ただし、彼は軍隊一般には個人主義的なスポーツは向かないと考えていた。

横須賀航空隊は1930年より予科練教育を開始した。予科練第2期生のアルバムには、海上生活者が野球をやる？不思議に思ふ人もあらうが何うしてなか〜水兵さんの野球は上手なものだ。面も其<sup>ママ</sup>獷猛な打撃振りは素晴らしい。遠洋航海の時外国の港に入港し能く其の町の強チームと試合することもある。其の他籠球テニス、蹴球何んでも御座レで、軍艦の乗組員も、陸上部隊の海の子も、其れ〜球技は大いに奨励されるのである<sup>23</sup>。

20 第七十八期会期史編纂特別委員会編『針尾の島の若桜：海軍兵学校第七十八期生徒の記録』海軍兵学校第七十八期会、1993年、145、200、201、253、293、314、315頁。

21 球技のうち蹴球（サッカー）が別格の扱いを受けたのは、前稿で論じたように、蹴球が士官にふさわしいスポーツであると考えられていたからであろう

22 出口林次郎『運動哲学』文書堂、1927年、421頁。

23 『顧る三星霜 第二期予科練習生』横須賀海軍航空隊、1934年。

との文句があり、蹴球（ラグビー）だけでなく、さまざまなスポーツを実践していたことがわかる。実力もあった。同アルバムによれば、ラグビーは1933年度に横浜OB倶楽部、横浜高等工業学校、横浜商業専門学校、海軍砲術学校商船予備生徒を相手に7戦7勝の成績を収めている。

1922年に設置された霞ヶ浦海軍航空隊でもスポーツが盛んだった。1925年度体育実施計画によると、4月中旬に野球競技、5月上旬に庭球競技、10月上旬に蹴球競技が予定されていた<sup>24</sup>。当時、同隊副長兼教頭をしていたのが山本五十六だった。山本は長岡中学時代、野球の選手だった。霞ヶ浦航空隊チームは1927年4月29日に竜ヶ崎中学校野球部と対戦し、19A-10で勝利した<sup>25</sup>。1939年3月、横須賀航空隊から霞ヶ浦航空隊に予科練が移転してきた。水戸高等学校ラグビー部はさっそく予科練に勝負を挑んだものの、1939年5月14日の試合では「少年ラガー」を相手に0-24で完敗、翌年は6-47で大敗し、年下相手に苦戦を強いられた<sup>26</sup>。

霞ヶ浦の予科練が土浦に移転したのは1940年11月のことである。最高学年であった第10期乙種飛行予科練習生（1938年11月入隊）は強者揃いで、サッカーは「付近の旧制高等学校チームを軽く一蹴」した。ラグビーは強豪として知られる成蹊高等学校を撃破、立教大学にも善戦した。立大とは技倆と体軀の面で大きな格差があったが、気魄ではけっして負けず、立大の監督をして「このチームを三年借してもらつたら必ずや世界無敵のラグビー選手に仕上げてみせる」と感嘆させたほどだった<sup>27</sup>。

1941年に教官として土浦航空隊に赴任した片岡正一（海機42期）は、「機校出身であるということでラグビーの指導官を命ぜられた。予科練養成員数の急増加で甲種800名、乙種1600名が入校、級の重なりがあり6面のラグビー場を作り、講義も一週間40時間、午後3時からの体育時間は雨が降らない限りグラウンドに立ち走り回っ

24 JACAR（アジア歴史資料センター）：C08051421300（1、28、29画像目）。

25 創立百周年記念誌編集委員会編『星霜百年白幡台』茨城県立竜ヶ崎第一高等学校創立百周年記念事業実行委員会、2001年、199頁。

26 水戸高等学校同窓会水戸高等学校正史編纂委員会編『水戸高等学校史』水戸高等学校同窓会、1982年、447、574-575頁。

27 下平忠彦編『海の若鷺「予科練」の徹底研究』光人社、1990年、151頁、原田種寿『翼の蔭：予科練教官の記録』講談社、1944年、76-80頁。

た」と往事を回顧している<sup>28</sup>。片岡は1942年7月に土浦を離れるが、ちょうどこの頃、教官の堺和助が中心となって「闘球」が考案された。すでにラグビーは土浦航空隊の象徴になっていたが、修業年限の短縮や入隊者の急増で指導が行き届かず、ラグビーで訓練効果をあげるのが難しくなっていた。そこでルールを簡素化し、「ラグビー、送球、蹴球、籠球など渡来競技のもつ各特異性を巧に取り入れ、かつ競技場を接敵地帯、突撃地帯、陣翼、本陣に区分するなど実戦場を彷彿せしめ、殊に敵本陣突入を敵航空母艦の撃沈に比して弥が上にも敢闘精神を發揮せしむる如く仕組」んだものであった。闘球は、ラグビーにかわって土浦航空隊を象徴する存在になる<sup>29</sup>。

1942年から激増した予科練習生に対応するため、同年8月に三重海軍航空隊が開隊したのを皮切りに、鹿児島、松山など計18か所に海軍航空隊が設置された。三重航空隊では闘球が正課に採用されており、籠球や排球も「クラブ活動的によく行われた<sup>30</sup>」。同校で教官をつとめた泉川清によると、授業終了後夕食までの1時間は「別科時間」で、好きな運動をすることが許されており、柔道、剣道、野球、バレーボールなどがおこなわれていたが、「道場で裸になって、投げられたり、叩かれたりの武道は敬遠され、野球は一八人と人数が決まった上に走る事が多くて人気は無く、誰でも気軽に人数も多少の増減が出来るバレーボールが一番人気有って、殆どの者が之に集まっていた<sup>31</sup>」。同校が編纂した『体育指導参考書』は、球技について以下のよう述べている。

球技ハ航空戦ニ近似セル性格ヲ備ヘ比較的広域ニ於テ行フ闘球ト狭域ニ於テ行フ籠球トヲ採上ゲ、其ノ複雑化セル規則ヲ改正シ正々堂々敢闘ノ精神ヲ強調スルト共ニ要具、施設及指導ノ简单化ヲ計リ速ナル実効ヲ期スル如クス<sup>32</sup>。

海軍の他の部署とは違い、航空隊にとってスポーツは敢闘精神を養うだけでなく、実戦そのものを疑似体験するにも役立った。飛行機を操縦し、隊を組んで戦うにあつ

28 片岡正一「松岡茂兄に語る」菅原勲編『懐旧五十年：海軍機関学校入校50周年記念誌』機42期級会、1980年。

29 下平忠彦編『海の若鷺「予科練」の徹底研究』151-152頁、『東京朝日新聞』1942年11月21日。

30 梶山治・赤平弘編『世紀の予科練史：三重海軍航空隊の記録』博秀社、1986年、645頁。

31 泉川清『雲下雲無し』第3巻、著者刊、刊行年不明、41頁。

32 梶山治・赤平弘編『世紀の予科練史』624頁。

て、運動神経やチームワークは非常に重要であった。一般に、運動神経は軍人としての資質に挙げられることはないが、飛行機では別だった。それゆえ、スポーツに消極的だった陸軍でも、陸軍航空隊だけはスポーツに積極的価値を見いだしていた(後述)。

1944年9月、4万人を超える第14期海軍甲種飛行予科練習生の一部が三沢航空隊に移った。そこには学徒出陣組の姿も数多く見られた。

昭和十九年の秋、戦闘機訓練のため青森県の三沢航空隊に移動して間もないときのことだった。時間があいて、野球をやろうということになった。「希望者を募ると多すぎるんで、教官が、選手だったものに限っていうんだ。僕は手をあげました。いえ、徳島の田舎の小学校で、セカンドをやってて、対抗試合にも出たことがあるもんでね<sup>33</sup>」。

相手ピッチャーはプロ野球名古屋軍の投手石丸進一であった。石丸は日本大学の夜間部に籍を置いていたため、学徒出陣で召集されたのである。石丸は佐世保第2海兵団、土浦航空隊、出水航空隊を経て三沢にやってきた。土浦でも出水でも、石丸はボールを投げた。出水で石丸のボールを受けたのは早稲田大学野球部出身の近藤清だった。出水には台北帝国大学から学徒出陣した岡部平一(岡部平太の息子)もいた。岡部は7月9日の日記に「スポーツがやりたい」と記していたが、9月9日の条には「一昨日久しぶりに野球をやったので、体の節々が痛い」と記している<sup>34</sup>。このときも投手は石丸だったに違いない。『英霊たちの応援歌』は三沢の様子を次のように描く。

本格的な実戦機による訓練が始るまで、三沢では野外スポーツとして野球がおこなわれた。ほかにバレーボールやバスケットボールのチームが編成されたが、野球を希望する者が多かった。ふしぎに海軍航空隊は、どこでも球、グローブ、バットといった野球道具をまがりなりに備えているらしい<sup>35</sup>。

たしかに海軍航空隊はどこでもスポーツ用具を備えていたようである。1935年、呉海軍航空隊と佐伯海軍航空隊は三菱重工業株式会社などから竣工記念として野球用具

33 読売新聞大阪社会部編『戦没野球人』227頁。

34 台北帝国大学予科士林会編『雲と波の果てに:岡部平一・原田信一遺稿追悼文集』編者刊、1983年、41、48頁。

35 神山圭介『英霊たちの応援歌』77頁。

一式を贈られた<sup>36</sup>。前稿で指摘したように、同様のことは艦船の竣工にさいしてもおこなわれており、日中戦争前の海軍では広くみられた慣行だったに違いない。

石丸らより半年遅れで土浦航空隊に入隊した氏家昇が三沢航空隊に来たときには、もはや教育をおこなえる状況ではなく、「われわれには特別の命令はなかった。隊外の原野で兎狩りをやったり、模型飛行機づくりや、野球、果てはバレーボール、分隊対抗の綱引き大会などに興じて<sup>37</sup>」いた。このおよそ1か月後には予科練教育が凍結された。

石丸と本田は1944年11月に霞ヶ浦航空隊に移った。翌1945年5月10日、2人は鹿屋の野里国民学校にいた。翌日の出撃を控え、石丸は本田にキャッチボールをしようと呼びかけた。

「一さ、名残りに一丁、元気でいこうぜ」ミットを構えた本田〔耕一〕少尉に声をかけて、投球をはじめた。そして彼が一球投ずる毎に本田少尉の、「ストライク！」という声が青空を突きぬけるようにあたりにひびく。私はわれを忘れて球審の位置に立ってみたが、これほど野球が好きだったのかと思うと、残念ながら、眼がかすんで球はまるで見えなかった。たしか十本通して、ボールという声は一度も本田少尉の口から洩れず、「一ようし、これで思い残すことはない」躍りあがるように、ミットとグローブを校舎の中に投込んで、私に笑顔を向け、手を振りながら、飛行場へ馳け去った。むろん私もその後を追ってゆき、彼等の飛行機が蒼穹に吸い込まれてゆくまで帽子を振って立尽していたのだが、おそらく強制されて、やむなく特攻隊に加わったなどという陰はみじんもなかった<sup>38</sup>。

このエピソードは、当時海軍報道班員として鹿屋基地で取材していた山岡莊八の手によって伝えられ、広く知られるようになった。本田は法政大学野球部出身で、このキャッチボールの4日後に、特攻に参加し戦死した。特攻を前に最後のキャッチボールを楽しんだのは、石丸や本田だけではなかった。

【某基地にて松田報道班員十七日発】……敵の沖縄作戦は今や悲劇に終らんと

36 C05034317700 (1-6 画像目)、C05034318400 (4 画像目)。

37 氏家昇『湖辺の食卓：土浦海軍航空隊予科練麦めし日記』新風舎、2002年、144頁。

38 山岡莊八「庶民の中の士魂 (六)」『週刊時事』5巻20号、1963年5月18日。

してゐる、この機を逸せずわが零戦隊は全力を挙げて機敵を撃滅せよ。

〇〇司令長官からの指令がぐつと胸に迫る神機今ぞ来つた、だが神鷲の日課には何の変哲もない総攻撃発進寸前といふに今日も無邪気に野球に興じてゐるのだつた、私はそこに絶対の勝利を信ずるもののみが知る神の真の姿を見た……〔飛行長S少佐〕よく見て欲しいこの壮途を、何気ないこの搭乗員たちを、勇しくも悲壮な征途ではないか、全機還らざる翼なのだ、沖縄の敵機動部隊に全機命中するのだ、いま無邪気に遊んでゐるが、あの搭乗者達は戦闘機の特攻隊たるの幸福を身にしみて有難く感じてゐるのだ<sup>39</sup>。

報道班員の筆で美化された特攻隊員の姿、彼らが本当に「幸福」を感じていたかどうかは、まさに神のみぞ知る、である。

### C. 諸団隊・工廠

新兵教育機関である海兵団は1930年代を通じて、組織的にスポーツを実施していた。四等水兵が5か月の教育課程を終えた記念に作成したアルバムを見ると、1930年代のものにはたいていバレーボールやバスケットボールの写真が収められている。たとえば、1937年1月に海兵団第18分隊に入団した水兵の修業記念アルバムには、バレーボールの写真があり、「面白く愉快に知らず〜に熱中するのは籠排球である 守れ後衛打込め前衛 敵に渡すな投げ込め「ボール」 此処を先途と奮闘す かくして協同一致の精神と敏捷性が養はれるのだ」というキャプションがついている<sup>40</sup>。

1941年11月、新兵の急増に対処すべく、横須賀、呉、佐世保に第2海兵団が設置される（1944年1月に武山、大竹、相浦海兵団と改称）。1943年10月におこなわれた最後の早慶戦に出場した早大の笠原和夫、同マネージャーの相田暢一は、同年12月10日に横須賀第2海兵団に入隊した。笠原によれば、

海兵団の生活はそれほど厳しいものではなかった。いうなれば海兵団の生活は学生生活の延長の感じもあった。われわれの分隊は早稲田と立教の合同組になっていた。下の分隊は全員早稲田だ。横を向いても下を向いても知っている顔が実に

39 『読売新聞』1945年4月18日。

40 呉海兵団編『昭和十二年一月入団 四等水兵修業記念 呉海兵団第十八分隊』編者刊、1937年。

多い。またこの二カ月は軍事訓練主体だが、野球、相撲など、対抗戦が数多く組まれていた<sup>41</sup>。

笠原が「学生気分」をくつがえされたのは、翌年2月に土浦航空隊に移ってからであった。笠原と入れ替わりに横須賀第2海兵団に配属された学習院野球部の児玉大造も、分隊の対抗戦があったことを記録に残している<sup>42</sup>。児玉と同じ時期に同海兵団に入隊した京都帝大の藤森耕介は7月に海軍砲術学校へ移るが、それまでの間、さまざまなスポーツを楽しんだことを日記に記している。以下に抄録しておこう<sup>43</sup>。（相撲、武装駆足等は除く）

3月13日 第一限練兵場で体操の後球技。蹴球と排球に分かれてのびのび楽しむ。隔離以来意気消沈し運動不足に悩んできた我々にとり、生き返ったような二日間だった。

4月25日 午後ラグビー。

7月2日 午前体育は十二分隊対抗野球籠球試合。学校時代の選手もいて見ごたえがあった。

10月26日 一五〇〇課業終了、学生舎に戻り大掃除の日課だが、我が区隊は運動場でドッジボールの球技となり、久し振りの体育に喜々として興ずる。

11月23日 一四三〇 小運動場で球技（排球）。

戦前最後の夏の甲子園を2連覇した海草中学校の選手たち——嶋清一、真田重蔵、古角俊郎らは呉第2海兵団に入った。母校海草中学校の野球部はすでに1943年夏に解散していたが、呉第2海兵団では野球を楽しむことができた。真田は航空隊を志願したが、目が悪かったために失格し、横須賀の海軍通信学校に配属となった。同校には嶋がおり、その後2人はそろって紀伊防備隊に配属された。真田は「防備隊では、レーダー監視でしたから勤務は厳しくありませんでした。休憩時間になると、道ばたで昼寝したり野球もやりました。嶋さんが投げると全然打てなくてね、楽しかったで

41 笠原和夫・松尾俊治『学徒出陣 最後の早慶戦：還らざる球友に捧げる』恒文社、1980年、68頁。

42 山室寛之『戦争と野球』170-172頁。

43 藤森耕介『ある学徒出陣の記録：海軍兵科予備学生』日経事業出版社、1989年。

44 山本暢俊『嶋清一』彩流社、2007年、224頁。

す」と往事を振り返っている<sup>44</sup>。

最後の早慶戦に出場した慶大の選手11名のうち、阪井盛一主将ら6名が陸軍、大島信雄投手、別当薫外野手ら4名が海軍に入った（高松利夫は不明）。海軍の全員と陸軍に入った山県将泰が航空関係に所属した。学徒出陣組全体の陸軍と海軍の比率は不明であるが、蛭川壽恵の推計では大学で2対1、高専で3対1とするから、慶大野球部の海軍比率はかなり高い<sup>45</sup>。『英雄たちの応援歌』で神山は相田マネージャーに「あいつ、あのときは岐阜商から明治にいった加藤三郎が、仮卒業で、十三期の飛行予備学生に志願すると云うのを聞いて、のぼせてしまったんです。でも僕たちはみんな、先生の御令息もいらっしゃる海軍の飛行予備学生になって、航空隊で野球をやるうって話し合っています。海軍は陸軍とちがって、野球に対する考え方も寛容だと聞きましたから」と語らせている<sup>46</sup>。「あいつ」とは近藤清で、学徒出陣より早く海軍の飛行予備学生に志願しようとしたのを、「先生」、つまり早大野球部顧問の飛田穂洲に止められたことをめぐる会話である。飛田の息子忠英は東京帝大で野球をやっていたが、このときすでに海軍飛行予備学生になっていた（飛田忠英大尉はのちに大井航空隊で相田の分隊長となる）。また、加藤三郎は岐阜商業出身で、近藤清、大島信雄らとともに甲子園優勝を果し、明大に進んでいた。加藤は1945年4月6日に特攻で戦死する（岡部平一も同日に特攻で戦死）。戦後、加藤の弟は、兄三郎について「海軍に入ったのは、陸軍で一兵卒から苦勞するより、試験に受かればいきなり予備士官という海軍の方がいいと考えたのだと思います……おしゃれでね。短剣を差してスマートな海軍の方がいいと考えたに違いありません」と語っている<sup>47</sup>。海軍には「スマート」というイメージがあったし、陸軍より学生を優遇したのは確かである。そして福岡高等学校排球部員の「戦時下とはいえ、海軍は格納庫などで、ことあるごとに、バレーをやっているようでした。その様子がニュース映画にも出るのに、高等学校では廃止とは。しかし、昭和十八年は廃部後もときどきやりました」という証言からわかるように、海軍でスポーツができることはよく知られていた<sup>48</sup>。慶大サッカー部の石川重

45 蛭川壽恵『学徒出陣』吉川弘文館、1998年、66頁。

46 神山圭介『英霊たちの応援歌』19頁。

47 読売新聞大阪社会部編『戦没野球人』211-212頁。

義（1943年卒）は当時の心境について、「当時でも誰だって軍隊や戦争なんか行きたくはなかった。しかし何といても純真な若者である。心の一方では銃をとって立たねばならないという気持であった。同じ戦うなら海軍でという考えは多かれ少なかれ皆にあったのではないか。ましてスポーツマンである。サッカー部だけでなく、体育会の連中に海軍とくにその航空隊を志願した人たちが多かったのは当然である」と語る。しかし石川自身は迷った挙げ句に志願せず、結果的に陸軍に応召された<sup>49</sup>。これらの事情を考えれば、相田のセリフは当時の学生、とくに野球部員の気持ちをよく代弁したものと考えてよからう。

次に海軍工廠を見てみよう。広島県立第二中学校、早大出身で大日本排球協会の前田豊（戦後に日本バレーボール協会副会長、国際バレーボール連盟副会長）が1939年12月のある座談会で、「バレーボールを実業団で最も盛んにやつてゐるのは、呉の海軍工廠とかそれに次ぎまして佐世保の工廠、或は横須賀工廠といった方面でありますので、さういつた海軍工廠とかその他海軍団体の人達と結んで、出来れば海軍全体、或は全日本の軍隊にも是非ともこのスポーツを奨励して見たいと思つてゐます。今でも大体、呉にあります軍港では、軍艦の水兵さん達が必ず一つの艦船にチームを一つづつ作つてゐる状態でありますので出来ればこの海軍の大会といつたやうなことをして見たらどうか」と述べているように、海軍各工廠のスポーツ熱は民間でも広く知られていた<sup>50</sup>。

1940年12月の調査によれば、呉海軍工廠では「工員のスポーツ奨励に力を注いで、排球、野球、卓球、庭球等が盛んである。最近、常設球場が使用不可能となり、附近の山に登ることも制限されてゐるので、小学校の相撲場を一般に開放してゐる」た<sup>51</sup>。登山の制限は戦艦大和建造にともなう措置だろう。多少の不便はあったが、当時とし

48 楠浩一郎「朝日新聞への恨み」旧制福岡排球部五十周年記念事業会編『白鰯：旧制福岡高等学校排球部五十年史』編者刊、1980年。

49 石川重義「クマさん追悼を中心に」三田サッカー倶楽部編『風呼んで翔ける荒鷺よ：慶応義塾体育会サッカー部50年』編者刊、1978年。

50 「興亜スポーツの黎明 皇紀二千六百年を迎へる 日本各競技界を語る」『アサヒスポーツ』18巻1号、1940年1月。

51 朝日新聞中央調査会編『地方娯楽調査資料』編者刊、1941年、123頁。

ては恵まれた環境であったことは確かである。広島高等学校排球部が呉水雷チームと対戦したとき、「我々はまともな運動靴が無く、炎天下裸足の者が多く、足に水をかけて冷やしながらか戦った。然るに水雷チームは軍需工場のチームだけに、皆立派な運動靴をはいていた<sup>52)</sup>」からである。実力も一流であった。呉海軍工廠チームは1940年の明治神宮大会で準優勝、1942年の明治神宮大会で通算3度目の優勝を飾っている。このほか豊川海軍工廠でもバレーボールがおこなわれていたことが確認できる<sup>53)</sup>。

海軍工廠のスポーツ奨励が、軍縮にともなう職工の大量解雇によって悪化した労使関係を好転させるための思想善導の役割を持っていたことは前稿で指摘した。さらにここでは、労働強化にともなう労働者の不満の増大を軽減する役割があった可能性を指摘しておきたい。1924年から1928年まで呉海軍工廠長をつとめた伍堂卓雄は、工廠に科学的管理法を持ち込み、能率増進を達成したことで知られる。裴富吉は、当時の科学的管理法推進者は一般に労務管理や労働問題に関心が薄く、伍堂も例外ではなかったが、労働者の目立った反対もなく科学的管理法が制度化されたと論じている<sup>54)</sup>。その理由の一つとしてスポーツを挙げられるのではないか。実際、伍堂はスポーツの普及に熱心で、1929年に南満洲鉄道株式会社理事となるや、工廠での経験を同社に移植し、全社員にバレーボールを奨励した<sup>55)</sup>。さらに同社はバレーボールを簡略にした体育ボールという競技を編みだしたが、海軍はこれが甲板上でおこなうのに適したゲームだとして採用普及を企てたという<sup>56)</sup>。伍堂は戦時中、商工大臣、日本能率協会会長、軍需省顧問として日本産業界の軍需工場化を推進し、戦争遂行を支えた。

最後に、海軍省を挙げておこう。1938年7月3日の第2回関東実業団排球選手権大会で海軍省（職員のチームか？）は準優勝した。同年10月に関東実業団排球連盟

52 広高排球部史刊行委員会編『広島高等学校排球部史：われらの青春皆実が原』編者刊、1988年、42頁。

53 桜ヶ丘ミュージアム編『豊川海軍工廠資料集』編者刊、2005年、93頁に「機銃部庁舎女子バレー部優勝記念」の写りが掲載されている。ただし、詳細は不明。

54 裴富吉『伍堂卓雄海軍造兵中將：日本産業能率史における軍人能率指導者の経営思想』三恵社、2007年、60頁。

55 『満洲日報』1929年11月13日。

56 岡部平太「体育とスポーツの一致 体育ボール時代出現の趨向（下）」『満洲日報』1930年8月23日。

が結成され、海軍省も加盟した。1941年8月末の第1回東京府実業団排球大会では海軍省は準優勝の成績を取めている。同大会には海軍水路部も参加し、2回戦まで進んだ。初日1回戦はチームの勤務の都合で午後7時からおこなわれたが、バレーボールのナイターははじめての試みで、物珍しさもあり満員に近い盛況ぶりを示した<sup>57</sup>。

海軍がいかに広範にスポーツを実践していたかについては、戦後に作成された軍需品目録からもうかがうことができる。たとえば武山海兵団の砲術科倉庫には、

一塁用ミット	2	庭球用ネット	4	…	
野球用マスク	2	ラケット	19	柔道用具	500
プロテクター	3	蹴球外袋	4	剣道用具	250
野球用ネット	3	排球外袋	9	水泳帽	23500
ベース	8	排球用ネット	21	銃剣術防具	7000
		籠球外袋	7		

といった道具が保管されていた<sup>58</sup>。学徒出陣組がさまざまなスポーツを楽しむことができたのもうなづける。海軍経理学校でも、スキー用具が50セット、野球用具が50セット、テニス用具が100セット、フットボールが10個など数多くのスポーツ用品が残されていた。さらに地方の施設、たとえば焼山送信所、徳山警備隊などのほか、海外の諸施設、たとえば上海海軍特別陸戦隊、高雄警備府などにもさまざまなスポーツ用品が備えられていた<sup>59</sup>。

## 第2節 国外

日中戦争がはじまり、海軍が中国や太平洋に展開するのにもとない、海軍の軍人軍

57 『東京朝日新聞』1938年7月4日、10月12日、1941年8月31日、9月1日、日本バレーボール協会五十年史編集委員会『日本バレーボール協会五十年史：バレーボールの普及と発展の歩み』日本バレーボール協会、1982年、204頁。

58 C08011046800 (1-4 画像目)。

59 C08011257500 (2 画像目)、C08011474700 (3 画像目)、C08010828500 (4-5 画像目)、C08010577900 (2-3 画像目)。

属たちは行く先々でスポーツを楽しんだ。

1938年10月27日に武漢攻略に成功した日本軍は、11月11日に湖南省岳陽を占領した。戦闘が一段落を告げるなか、早くもスポーツの便りが届く。

皇軍が岳陽に入場したころ満々と水を湛へてみた洞庭湖は次第に水涸れ、碧水三丈余の第一鉄橋下もこのごろは騎兵部隊の馬場になつて洞庭、赤砂、青草の三湖が完全に分離、露出したその湖岸には細い青草さへ見える、湘江の真ん中に碇泊してある海軍部隊〇〇乗組員たちはお手のもののランチを飛ばして、初冬の午後太陽を浴び芝草の上にバレーに興じてみた、溯江の小型船には“日章旗”がなびき大陸の奥地とは思へない<sup>60</sup>。

この年、慶大のテニス選手山岸二郎は夏のデビス杯で敢闘し、秋の全日本大会ではシングルスで4度目の優勝、ダブルスでも優勝を果たした。1939年のデビス杯での活躍が期待されていた山岸だが、5月に海軍経理学校入学が決まったことから、日本はデビス杯への参加そのものを断念することになった。1940年12月に山岸は武漢にいて、同地のテニス界で活躍する様子を、前田豊が伝えている<sup>61</sup>。山岸にとって海軍入りはテニスのトップ選手としての経歴の終りを意味したが、テニスの終りを意味したわけではなかった。山岸のように現地の日本人スポーツ界のイベントに海軍軍人が参加する光景はしばしば見られた。1939年8月6日に上海で開かれた上海日本人水泳選手権大会に海軍陸戦隊が参加した。自由型200mと400mは早大出身でベルリン・オリンピック代表にも選ばれた永見達明と陸戦隊の夏目との一騎打ちとなった。夏目は僅差で敗れはしたものの、「軍人らしい戦闘意識と執拗なる頑張りによつて終始永見を脅かし」た<sup>62</sup>。上海の海軍は表忠塔外苑競技場の敷地を提供するなど、現地スポーツ界に協力的であった<sup>63</sup>。

1940年秋の北部仏印進駐からしばらくして、同地でのバレーボールの様子が報道された。

60 『大阪毎日新聞』1938年12月10日。

61 『東京朝日新聞』1940年12月12日。

62 『大陸新報』1939年8月7日。

63 『大陸新報』1941年8月26日。

一度舞ひ上れば百発百中、狙つたらあてずにはおかぬ爆撃の荒武者連も地上を跳ね廻るのは大分勝手が違ふらしい、しかし勝負は早い、まことに速戦即決振りである“二十二対十七ツ！！”一段高い審判台に坐つた審判の声も号令さながらで、ゲームがすむとサイダーの賞品が出る“皆のめツ”審判員いとも儼然と宣うたまではよかつたが“まづ審判員に敬意を表してのませろツ<sup>64</sup>。”

太平洋戦争が始まると、海軍スポーツはさらに広がっていった。ニューギニア西部ファクファクに駐屯した第25特別根拠地隊では、午後の自由時間に体力の維持と増強を図るため、午後4時からの1時間、バレーボールとバスケットボールをすることになった。ボールはどこからかドッジボール用のボールが調達され、コートはオランダ副理事官らが使っていたらしいテニス用のコートを使用した。バレーボールのネットはテニス用のもので代用し、バスケットボールのゴールは大工や漁師出身の応召兵がこしらえた。ただバスケットボールは熱帯での運動としては過激すぎるということで、ほどなく中止となった。応召兵のほとんどはバレーボールの経験がなく、横須賀防備隊時代にバレーボールを覚えた福室信四郎ら数名が指導にあたった<sup>65</sup>。

1943年初めにマーシャル諸島のケゼリン島に着任した高島清（東京帝大ラグビー部出身）によれば、当時は「まだ空襲もなく、何することもなく、毎日野球、テニスをやっていた」。石橋湛山の次男、石橋和彦海軍主計少尉もメンバーのひとりだった。高島は同年末に離島するが、その後しばらくしてケゼリン島は米軍の攻撃を受け、日本軍は全滅した。戦死者のなかには、石橋和彦のほか、海軍兵学校でスポーツに万能ぶりを発揮した音羽正彦（もと朝香宮正彦）が含まれていた<sup>66</sup>。

ゴルフが趣味だった軍医の堀慶介は、ニューブリテン島に上陸すると、さっそくクラブを持って飛行場にゴルフの練習に出かけ、「久しぶりにグリーンの上でカ一杯クラブを振り心持ちよい汗を流して悦に入った」。1942年2月に訪れたラバウルの状況を堀は次のように記す。

64 『大阪朝日新聞』1941年1月29日。

65 福室信四郎『海軍勤務回想録：一兵士の太平洋戦争』改訂版、東京：福室信四郎、2000年、403頁。

66 回想の東大ラグビー編集委員会編『回想の東大ラグビー：昭和13・14年前後』東大ラグビー「キヨセ・ボールの会」、1979年、102頁。

市街地の庭と言う庭は白い花の花盛りだ。近よってよくよく見れば、ゴルフのボールだ。何れもダンロップとかスポルディングの超一流品で、それならクラブも残ってはいないかと捜して見たが全然見当らない。ボールがあってクラブが無いとは不思議に思って居たら、やっとその原因が分った。陸さんが自動車に将官、佐官、尉官を標示する為に使って居る。本当に奴等は野蛮人だ。しかもクラブのヘッドをブッタ切って、シャフトだけを使って居るのだからヤリキレない<sup>67</sup>。

陸軍と海軍のスポーツに対する態度を反映しているようで興味深い。米軍来攻前の南洋では、「故国の香りを満載した輸送船の入来、排球、相撲、水泳、野球、魚釣、映画、演芸会等々」が「将兵達の大きな慰安」となっていた<sup>68</sup>。

### 第3節 体育方針

1940年の夏以降、スポーツの新体制が叫ばれ、外来スポーツに対する圧力が強まりつつあったなかで、海軍砲術学校体育科長の鬼束鉄夫中佐（海兵47期）は、「武道を穿き違へて居ながら、一様に外来スポーツを排撃するは当らぬ……体育理念さへ明確となれば、外来スポーツであれ、国防スポーツであれ、棄捨する理由はない」とスポーツを擁護していた<sup>69</sup>。

鬼束は堀内豊秋らとともに海軍にデンマーク体操を導入した功労者であり、1935年から2年間、神戸高等商船学校教授として、軍事学教練、技業の課目を担当した。1940年2月の第10回明治神宮大会冬季大会にはスキー部の軍隊委員として参加し、同年夏の第11回明治神宮大会夏季大会には海洋競技などの委員として参加、以後、1943年11月の第14回大会まで明治神宮大会に関わった。こうした民間の体育・スポーツ界との交流の経験を踏まえて、鬼束は高度国防国家建設という時代の要請に即した体育論を構築していった。鬼束以前の海軍体育は、堀内が『海軍体操教範』について「陸軍体操教範ノ丸写シトモ称ス可ク基本体操ハ瑞典体操ノ形骸ノミヲ採リ全ク不自然ニシテ如何ニモ形式的ニシテ運動ハ無味乾燥ナリ」と酷評したように、陸軍に大きく依

67 堀慶介『軍医のお笑い従軍記：帝国海軍で一番駄目な男の話』新興医学出版社、1975年、32、71頁。

68 藤田義光『東太平洋征空隊』研文書院、1943年、206頁。

69 鬼束鉄夫「新体制下の体育理念」『野球界』30巻20号、1940年10月15日。

存していた。鬼東の登場によってはじめて海軍独自の体育が形成され、彼のもとで新しい『海軍体操教範』（1942年）が編纂されることになる<sup>70</sup>。以下、鬼東の体育論を、彼の著作「錬成の真髓」、『体働教育に就いて』、海軍省教育局編『艦船部隊における体育主任参考資料 体育概説』（以下、『体育概説』）に基づいて紹介する。『体育概説』の編者は磐手砲術長の棚田次雄だが、その内容はおおむね鬼東に依拠しており、ここでは鬼東の体育論として扱う。

鬼東にとって体育とは、身体の修練であるだけでなく、精神の修練でもあった<sup>71</sup>。体育は、個人のためにするのではなく、民族国家のためにするものであり、それは国民の義務でもあった。そして身体と精神の修練を究極にまで高めたのが武道である。武道とは要するに生きるか死ぬかであり、それを決めるのが「仕合」である。「仕合」こそ実技であり、戦争が必要とするものであって、人を殺さない「試合」は仮技であり、第二義的なものである。「戦闘、即ち最後の仕合の場、それは武技に相当する、この仕合の圏に於てこれに馴れるように、身体をつくつて行く」ことこそ体育の目的にはかならない。

かくて武道は人の「体働」（身体の働き）の局限に位置することになる。鬼東によれば、同心円状をなす「体働」の中心に生活体育圏があり、ついで体操体育圏、体技体育圏、武技体育圏と広がる（図1）。日常生活を通して形成された体働を体操体育圏へと押しひろげる、鬼東の言葉でいえば「プーツと空気を膨らますもの」が体操である。体操は身体各部を均斉に発達させて身体の基本をつくる。こうして鍛えられた身体を基礎にして、体技や武技をおこなうことになる。体技や武技は身体・精神をさらに発達させるが、それには方向性がある、体操のように全面的ではない（図1のR1、R2。非戦時には武技（R1）は体働の限界＝仕合の直前までしか行かない）。多種多様な体技、武技を通じて、体働の範囲を真円に近づけていくこと、それこそが鬼

70 堀内豊秋「海軍体操ニ関スル所見」堀内豊秋追想録刊行会編『堀内豊秋追想録』編者刊、1988年、海軍砲術史刊行会編『海軍砲術史』編者刊、1975年、601-602頁。なお、堀内は体操至上主義で、鬼東ほどスポーツを評価していなかった。

71 海軍省教育局編『艦船部隊における体育主任参考資料 体育概説』編者刊、1943年、鬼東鉄夫「錬成の真髓」『体育日本』21巻2号、1943年2月、鬼東鉄夫『体働教育に就いて』鳴海研究所社会事業部清明会、1943年。

東の理想とする体育であった。

体操、体技、武技という体系は、『体育概説』に「即我海軍ニ於ケル体育ハ之ヲ要約セバ体操ヲ以テ身体ノ育成強化ヲ図リ武技ニ依リ主トシテ精神力ヲ養ヒ体技ニ依リテ更ニ之ヲ補充強化シ以テ完全ナル体育効果ヲ心身両面ニ亘リ取メント期スルニアリ」と示されるように、1920年代以来海軍でおこなわれてきた

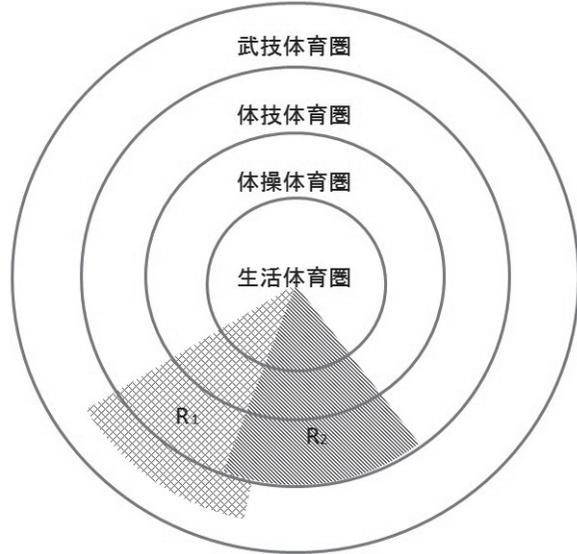


図1 鬼東鉄夫の五輪図

体育そのものである。欧米の体育と日本古来の武道の長所をとってつくられた鬼東の「体育五輪の説」は、武道を頂点に既存の海軍体育を統一するものでもあった。そこでは「武術ト体育ト決シテ個々ニ対立スベキモノニアラズ……彼ノ競技体動（「スポーツ」）ノ如キモ武道体育ノ一手段タルコトニ想到セバ有意義ナル体育ナルコトハ言フ俟タズ」ということになる。スポーツは「一般ニ団体的對抗運動多ク体育ニ依リテ得ラザル諸徳性ヲ涵養シ得ルノミナラズ体育錬成上モ極メテ有効」であって、「競技ニ当リテ要求セラルル遵法ノ精神従順公正誠実ノ美德更ニ又相手ヲ制セントシテ要求セラルル創意工夫、果敢、敢闘、犠牲、献身、協同、堅忍持久等ノ諸要素ヲ涵養」することができた。だからこそ、イギリスがスポーツを通して「大国民的態度」を養い、ドイツでは「健全ナルスポーツハ国防力ノ根基ナリ」と唱えられているのだ。弊害の根源としてしばしば糾弾の対象となった選手制も否定されない。「体育本来ノ立場ヨリ言ハバ選手ハ出ヅベキモノニシテ造ルベキモノニアラズ」であり、ドイツがベルリン・オリンピックで第一位の栄冠を占めたのも、体育の結果なのである。問題は、「享楽又ハ興行ヲ主トスル米國式体育」を模倣した点にあり、適切に実施しさえすればスポーツは大きな効果を期待できるのだ。野球についても、今日種々の弊害が見られるが、興味深く、広く普及し、体育的にも教育的にも価値があると基本的にその価値を肯定する。この文章が刊行されたのは1943年1月、ちょうど民間では野球禁止の烽

火があがった時期である（後述）。鬼東の体育論の意義は、こうした時代背景を考慮すれば、よりいっそう明瞭となろう。大学で野球をやっていた多くの学生が海軍をめざしたのも当然であった。当時プロ野球では用語の日本語化に頭を悩ませていたが、大川内伝七少将は「そんなことを気にすることはない。野球はわれわれにも非常に参考になる競技だ。杭州湾の上陸作戦にも、野球のスライズ・プレーからヒントを得たものを取り入れているくらいだ。野球は大いにやりなさい」と励ましてさえいる<sup>72</sup>。また彼は早大野球部の合宿所が徴用されそうになったとき、「野球部の合宿所は必要なものだ」と口添えしたとも言われる。大川内は1938年4月から1940年9月まで海軍砲術学校長をつとめ、鬼東の上司でもあった。

野球以外について見てみよう。バスケットボールは航空体育としての価値を認められていたが、鬼東は水泳の飛込みやスキーのジャンプにも同じような価値を認めていた<sup>73</sup>。蹴球はラ式、ア式ともに錬成にふさわしいが、より戦闘的であるという点でラ式が推奨された。興味深いのはバレーボールである。

排球ハ競技規則簡単ニシテ相当ノ人数ヲ擁シ容易ニ実施シ得ル利点アリ劇烈ナル運動ニアラザルモ球ノ所在並ニ方向ニ常ニ注意ヲ集注スルヲ要シ又前衛中衛ノ一部ハ相当活躍ヲ要求セラルル等体育的並ニ教育的効果少カラザルモノアリ排球ハ其性質上一般ニ女子ニ最好適セル運動ナリトセラル<sup>74</sup>。

海軍はバレーボールを女子に適したスポーツとみなしながら、それを盛んに奨励していたのである。海軍はスポーツに男らしさが求められる鍛錬としての価値だけでなく、必ずしも男らしさが求められない娯楽としての側面も認めていた。また、実際的な理由として、海軍は、長期の艦上生活で衰えた体力を回復する手段として、身体への負担がさほど重くない運動を必要としていた。この点について、長石一治（海機46期）はバレーボールが「戦地から着任した者の運動としては最適だったことであろう」と推測している<sup>75</sup>。

72 鈴木龍二『鈴木龍二回顧録』ベースボール・マガジン社、1980年、136頁。

73 鬼東鉄夫「新体制下の体育理念」。

74 海軍省教育局編『艦船部隊における体育主任参考資料 体育概説』32頁。

75 長石一治「海軍工機学校高等科学生（前期）の思い出」海軍機関学校第四十六期級会編『海機四十六期生の記録』編者刊、1982年。

とはいえ、『体育概説』に「体育ハ錬成ノ面ト娯楽ノ面トヲ有セリ軍隊ニ於ケル体育否我国ノ体育ハ錬成ノ面ニ絶対重点ヲ置カレザルベカラズ」とあるとおり、軍隊で実施するスポーツに、より鍛錬的なものが求められたことは言うまでもなからう。その一つの典型が闘球であった。

〔陸軍の〕兎玉〔久蔵〕大佐が「土浦航空隊で闘球といふものをつくつた。あゝいふものがいゝのぢやないか」といはれるのは、今までのラグビーといふものは国際的の一つのルールがついてゐて、それは本当の実戦的（仕合的）ではない。軍隊の要求はこれを仕合に適するやうにしたもの、さういふ球技があるんぢやないか、さうするにはこのルールをもう少し何とかしなければいかんのではないか。それが「闘球」ではないか、といふやうに解せられます。

海軍は既存のスポーツをそのまま活用してきたが、闘球は数少ない例外であった。海軍が独自の体育を構築しつつあった時期に闘球が発明されたのは、けっして偶然ではなからう。もっとも、鬼東の体育論からすれば、闘球もまた方向性を持ち、体技体育圏の一部分をカバーするものでしかない。陸軍がスポーツの種類を絞り込み、最終的にはスポーツそのものを排除しようとしたのに比べると、その違いは明らかである。

『体育概説』の問題意識の根柢には、もともと優秀な体力を持っていた壮丁が猛訓練でかえって体力を損なうという経験があり、また国民一般の体位が低下しその影響が壮丁にあらわれつつあるという深刻な現実認識があった。後者に関して、鬼東は体錬圏、回健体育圏、治療圏体育という3つの圏を設定して、こう説明する。体錬圏には最低限の健康を維持している人びとが属し、治療圏には医師による治療が必要な人びとが属する。その間にあるのが回健体育圏で、病気ではないものの体位が徴兵の基準に達しない人びとがこのカテゴリーに入る。従来軍や民間の体育・スポーツが対象としてきたのは体錬圏の人びとであり、回健体育圏はまったく顧みられてこなかった。国民の体位低下を食い止めるには、回健体育（陸軍の健兵対策に相当しよう）を重視する必要がある。ただし、鬼東は回健体育の具体像を提示する前に戦死してしまった。

鬼東の体育論は一見りべらるな印象を受ける。身体面で全方位的な発達を重視した鬼東だが、精神面ではそうではなかった。鬼東は宮本武蔵の弟子寺尾求馬助の事例を挙げて、修錬の到達点の姿を「今切腹しろ、ハイ畏まりました。といふところまでゆ

けばいゝ。…所謂絶対服従。命のまにゝである」として描き、「今度のハワイ海戦あたりでも、あゝいふ風にスポンゝ若い人々が自爆をし、或は潜水艦で飛び込んで」いったことを賞賛した<sup>76</sup>。特攻隊員の最後のキャッチボールがこの延長上にあることは、もはや言うまでもなからう。鬼東の体育論はあくまでよき皇軍兵士を養成するためのものであり、よりよく死ぬための体育であった。

## 第2章 陸軍

### 第1節 日中戦争以前

1920年代、陸軍ではスポーツが盛んにおこなわれたが、一方でスポーツに対する反感が高まっていた。1930年代に入ると、スポーツに対する反感が表面化し、陸軍からスポーツが消えていく。その兆候は1920年代後半から見られた。1928年に改正された『歩兵操典』では、「第一次世界大戦後に現れた無謀な攻撃主義への疑問、戦闘法則への企図心などの合理主義は全く影を潜め、軍の歴史に淵源するという「必勝の信念」が前面に躍り出た<sup>77</sup>」。陸軍は物質的なハンディを克服するため、精神主義に傾いていく。

社会ノ組織又ハ軍隊生活、乃至人類共存ノ目的ヲ達スル為メニハ互ニ法律、規定、条約等ヲ忠実ニ履行シ秩序ヲ維持シテ行クコトカ必要テアル<sup>78</sup>。

これは海軍の『運動競技提要』の一節であるが、陸軍でも事情は同じで、スポーツの奨励とはこのような合理的協調的な世界観を背景に、人格の尊重や自覚的な服従が強調された結果でもあった。前稿で論じたように、陸軍はそうすることで、「デモクラシー」の潮流のなかで喪失した男性性を取り戻そうとしたのだ。

満洲事変は陸軍をめぐる状況を大きく転換させた。厳しい批判にさらされてきた陸軍は、一転して世論に支持される存在となり、軍人の地位も高まった。これまで社会の空気を取り込み、社会に合わせようと努めてきた陸軍は、逆に軍隊の空気を社会に

76 鬼東鉄夫「錬成の真髓」。

77 荒川章二「兵士たちの男性史」阿部恒久・大日方純夫・天野正子編『モダニズムから総力戦へ』日本経済評論社、2006年。

78 海軍兵学校編『運動競技提要』編者刊、1925年、37頁。

押しつけようとしはじめる<sup>79</sup>。こうした変化のなかで、軍隊内におけるスポーツの意義は大きく後退してしまうのである。

1934年の『軍隊内務書』改正はこの変化を如実に示している。改正理由書に「時流迎合ノ嫌アルカ如キ字句条項ヲ修正又ハ削除セリ。歐洲大戰後滔々トシテ風靡セル誤レル「デモクラシー」的思想ハ軍紀ヲ振作シ軍ノ団結ヲ完ウスル所以ニアラサルノミナラス特ニ皇軍意識ノ徹底ヲ害スルモノアルヲ以テ旧軍隊内務書ノ記述中之ニ関シ動モスレハ誤解ヲ招クカ如キ字句条項ハ之ヲ修正又ハ削除セリ」とあるように、今回の改正は第一次世界大戦後の教訓をリセットするものであった。大戦直後、その教訓を活かすべく改正された1921年の軍隊内務書で強調された自覚的な服従、軍隊内務の緩和は、新しい軍隊内務書で否定された。これらは1920年代に軍隊スポーツを意義づけ、正当化する根拠であった。それが失われたことにより、軍隊スポーツは、存在そのものに疑問符をつきつけられる。

満洲事変後の陸軍はもはやスポーツの男性性を必要としなかった。陸軍はみずからの男性性をより日本的なものに求めた。軍刀の変化はその一例である。1912年以来、将校が持つ軍刀は洋刀だったが、1934年の陸軍服制改正で日本刀に変わった。このころから「皇軍」という呼称が使われるようになるのも、こうした日本の軍隊の変化をよく示している。軍隊の男性性の変化は、社会全体の男性性にも影響を及ぼした。中川雄介・加藤千香子は爆弾三勇士を契機として、モダン・ボーイから日本男児へと男性性が変化したことを指摘している<sup>80</sup>。

かくて陸軍は、民間スポーツ界から教を乞う従来の姿勢を改め、逆に民間スポーツ界を指導しようとするようになる。1934年の極東選手権競技大会（以下、極東大会）への満洲国参加問題は、陸軍の変化を示す最も早い事例の一つといえよう<sup>81</sup>。このとき、陸軍、とくに関東軍は同大会への満洲国の参加を強く支持し、満洲国体育協会と

79 1925年のいわゆる学校教練の導入は例外にあたる。とはいえ、当時の陸軍はきわめて慎重な姿勢を取らざるをえなかった。学校教練と男性性の関係については、拙稿「軍隊と社会のはざままで：日本・朝鮮・中国・フィリピンの学校における軍事訓練」（近刊）を参照。

80 吉田裕・森茂樹『アジア・太平洋戦争』吉川弘文館、2007年、68頁、中川雄介・加藤千香子「『爆弾三勇士』と男性性：＜モダン・ボーイ＞から＜日本男児＞へ」『モダン・マスキュリニティーズ 2003』2004年。

協力して、満洲国参加を断念した大日本体育協会（以下、体協）に圧力をかけた。日本国内でも陸軍体育の総本山である陸軍戸山学校の教官たちが立ち上がった。4月21日に体操科長小野原誠一ら同校の教官が緊急会議を開き、「軍人の立場をはなれ同じ日本民族のスポーツマンとして徹底的に反省を促すこと」を決定した。25日には深沢友彦校長から「スポーツマンとしての立場から戸山学校体操科が憤起するのには異存がない、重大なる国策を離れてスポーツなし」との了解も得て、翌日に次のような声明を発表した<sup>82</sup>。

わが国の体育は皇国の大国是に基き、皇道精神の涵養を第一義として実施せらるべきものなり。陸軍戸山学校はこの大方針に基き国民体育を一層健全ならしむるため寄与するところあるを期す。

当初、小野原らは体協や文部省の幹部に直接会って「日満両国の親善を害し靖国社頭に眠る英霊十二万の鮮血を無視してまで極東大会に参加の必要があるか」と詰問するつもりであった<sup>83</sup>。さすがにそこまではしなかったようだが、陸軍戸山学校の一連の行動は体協にとって十分な圧力になったであろう。小野原はもともとスポーツ界と関係が深い人物だった。彼はスポーツ全盛時代の陸軍戸山学校でホッケーの選手として活躍した。1925年3月のスポーツ関係者との協議会でホッケーを極東大会の種目として採用するよう希望したこともある<sup>84</sup>。また同年4月から体協の理事をつとめ、1930年に東京で開催された極東大会で公開競技に採用されたホッケーの役員をつとめてもいる。しかし、1932年には「スポーツ国、又体力の最も旺盛な国として自負して居る彼の英国が、戦後時の宰相ロイドジョージをして、体力訓練上に欠陥があつたと絶叫せしめて居る<sup>85</sup>」と、間接的な表現ではあるが、国民体育の手段としてのスポーツの価値に疑問を呈するようになっていた。陸軍戸山学校の一連の行動は、軍ではなく「スポーツマンとしての立場」からなされ、結果的に要求を貫徹させることは

81 この問題については、拙稿「『満洲国』の誕生と極東スポーツ界の再編」、拙著『帝国日本とスポーツ』を参照。

82 『東京日日新聞』1934年4月22、26、27日。

83 『東京日日新聞』1934年4月22日。

84 大日本体育協会編『大日本体育協会史』上、編者刊、1936年、77-78頁。

85 小野原誠一「軍隊体育」文部省編『現代体育の施設と管理』目黒書店、1932年。

できなかったが、国策の名のもとに民間スポーツ界に干渉する先例となった。

このような状況を考えると、陸軍からスポーツが徐々に消えていったことは不思議ではない。スポーツ全盛時代の陸軍士官学校を経験した岩永宝(陸士37期、1925年卒)は、1930年代初めに教官として同校に戻ってきたときの様子をこう語る。

私らの陸士時代は第一次大戦後の澎湃たるデモクラシー思想時代で、運動時間には、野球、テニス、ホッケーなどを自由に楽しむことが出来、私もホッケーのセンターで度々戸山学校に練習試合に行かされた時代であった。そんな感じで本科の区隊長になって、打って変わった反動復古の状態に先ず驚かされたが、生徒は一向に苦にする様子もないのに感心もし安心もした<sup>86</sup>。

わずか7年ほどの間に、陸軍士官学校は大きく様変わりしていた。とはいえ、陸軍からスポーツが完全に消えてしまったわけではない。

1933年に陸軍戸山学校は『小競技』と題する小冊子を刊行した。同冊子は「遊戯及競技(団体競技をも含む)中より軍隊練成の為若くは青少年訓練等に於て利用し有効なるもの」を収録したもので、「厳正確實を主とする軍隊教育に於ては、不軍紀に流れ不適當なりと謂ふものあるも、そは指導者の不明の致す所にして決して小競技の罪にあらざるなり」と、小競技を弁護している。同冊子には多数の競技が収録されているが、そのなかに「少々複雑なる小競技」として、球渡(キャプテンボール)、攻城球(ドッチボール)、簡易籠球(センターボール)、簡易野球(キックボール)、投球戦(ハンドボール)、籠球(バスケットボール)が含まれている。これらの競技は『体操教範』を大きく逸脱するものではない。当時、陸軍戸山学校教官をつとめていた温品博水ぬくしなひろみによれば、『小競技』は彼が教育用として独自に編纂したもので、「軍隊教育と教範には無いが、体操教育に当って、気分転換や機敏性を養成する補助的な遊戯に類するものを蒐録し」たもので、従来学生が入ってくるたびに教材を謄写版で刷っていたが、煩わしいので近くの本屋に印刷してもらってできたものであった<sup>87</sup>。

86 岩永宝「第四十四期生と私」陸士第四十四期生会編『回想録：五十年の歩み』編者刊、1982年。陸士44期は1932年卒である。

87 温品博水「我が体育歴考」(防衛省防衛研究所所蔵)。温品は1929年12月から1934年3月まで陸軍戸山学校教官をつとめた。

1930年代前半は陸軍戸山学校のホッケーもなお健在であった。温品も代表選手に選ばれ、日本選手権にも出場している。温品はホッケーについて、「ホッケーの球は野球の球よりも硬く、時折顔面にあたり、又足の向脛に当って、度々外傷を生ずることもあり、多少危険もあるが勇壮な競技であり、試合中外傷等にて欠員が生じてもそのまゝ競技を続行するルールになって居り、軍隊向の競技であったと思う」と高く評価している。スポーツを通じた民間スポーツ界との交流も続いていた。横浜の在日外人クラブとは毎年ホッケーの定期戦をしていた。日本女子体育専門学校とは、同校の二階堂トクヨ校長が「大の戸山びいき」だったこともあり、陸軍戸山学校の学生たちは必ず一度は同校に招かれ、バスケットボールの試合をすることもあった。陸軍戸山学校はたんにスポーツを実践するだけでなく、その研究も続けていた。これについて温品は次のように証言する。

体操教範の一部に団体競技の要領が示され利用する様に示されているが、入隊する兵員が毎年一〇〇名内外（中隊単位）のものに対し、団体競技を実施するとして全員に行わたるには相当の時間を要し実際問題として訓練に不向の感じが無いでもない。勿論体育訓練に馴れた指導者であれば一度に同じ訓練を行わずして、他の訓練課目を混ぜて代る代る或団体競技を実施する様時間のやり繰りを考えるが、多くは一種訓練を課して他は休憩しながら見ている様な形の指導が多い様に思われる。そこで団体競技の訓練が同時に多人数で出来る様に仕組めないものかと、例えば蹴球でゴールを互に二個づゝ作り多人数従来のルールを利用したまゝで出来ないものかと、考えて見たりバレーボールを人数を倍にして実施したりして見たが、遂に適確なる成案は得られなかった。

1929年の『体操教範』は軍隊教育で実施すべき団体競技として、籠球、投球戦、球戦に限定していた。したがって、バレーボールの活用を図った陸軍戸山学校の取り組みは、陸軍にスポーツを再導入しようとするものだった。結局、陸軍戸山学校は訓練に適さないというきわめて現実的な理由で、スポーツの再導入を断念した。スポーツは男性性の点からも、実際の効果の点からも、陸軍にそぐわないものになった。

1930年代の陸軍とスポーツの関係で、以下の事例はきわめて特殊なものである。筆者の所蔵する1936年の第九回全国軟式野球大会の参加章（図2）には「陸軍大將

尾野実信牌」という文字が刻まれている。尾野はすでに現役軍人ではなかったが、陸軍でスポーツが勃興した1920年代初に教育総監部本部長や陸軍次官をつとめた経歴を持つ。また第2代大日本相撲協会会長としても知られる。尾野大将がいついかなる経緯で牌を寄贈するにいたったかはわからない。そもそも戦前の軟式野球はわからないことが多く、この大会についても徽章に記される「昭和十一年十一月於堺大浜球場」という情報以外、詳しいことはわからない。いずれにせよ、陸軍全体のイメージを揺るがすような影響力を持つような大会でなかったことは確かである。

## 第2節 国外

### A. 華北

1937年7月7日に日中戦争が勃発、北支那方面軍は9月24日に保定、10月10日に石家荘を占領、10月下旬までにはほぼ華北の主要地域を制圧した。1938年4月には徐州作戦が実施され、北支那方面軍の一部がこれに参加した。このため華北の防備が手薄となり、その間隙を突いて共産軍を主体とするゲリラ活動が活発化した。北支那方面軍は6月までにゲリラ勢力の排除を完了する予定であったが、結局敗戦まで弾圧と懐柔（宣撫）を織り交ぜた対ゲリラ戦を強いられることになる<sup>88</sup>。中国大陸の陸軍からスポーツの便りが届くのは、ちょうど対ゲリラ戦がはじまる直前の時期であった。

ソレ打つた、遊撃ゴロ、ゴロ、アツ！アウト！アウト！… 神宮野球の早慶戦の最高潮時によく見られる投手の一投球、打手の一打撃の動き毎に息づまる様な重圧、其緊張の度には、たゞ「ワツ！！」と云ふ敵も味方もない破れる様な喚声、この興奮が今この太原の元師範学校の校庭から只ちつとしてみても汗ばんで来さうな春の日を破つて陽炎と共にもつれあがつてくる、今この山西戦線の陣中に迎へたひと時、住吉部隊諸勇士の喜びをもつて将校对下士の敵前五十メートル突撃の興奮に似た大熱戦が行はれてゐるのだ<sup>89</sup>。

支那軍の執拗な長期抗戦に対応して、わが皇軍前線勇士はいづれも長期膺懲の決

88 山本昌弘「華北の対ゲリラ戦、1939-1945：失敗の解析」波多野澄雄・戸部良一編『日中戦争の軍事的展開』慶應義塾大学出版会、2006年。

89 『東京朝日新聞』1938年4月17日。

心を固めてゐるが、こゝ石家荘に展開された長期膺懲風景二つ一（一）石家荘の〇〇部隊では「長期応戦は体力から」とばかり、将校兵士間にスポーツ熱が非常に旺盛である、たとへば〇〇部



図2 尾野実信牌（著者所蔵）

隊では、真崎隊長の音頭取りで、毎日勤務の暇を見て二時間づゝ各自好みの運動に熱中してゐる、運動は国技相撲や撃剣から、最近はグラウンドを造つて棒高跳、走幅跳、ランニング、テニスと近代スポーツに及んでゐる、重い軍隊靴でドタ〜と幅跳の助走をするのなどはちよつとほゝゑましい風景だ、テニスのラケットは支那の鉄道局が残して行つたのに、足りないのを北京から取寄せたものさうだが、兵隊さんは相かはらず靴ばきのみゝで、前衛が後衛に「うまくサーブしてくれ」といふところを「班長殿、よく照準して下さい」と、どこまでも軍隊式である<sup>90</sup>。

徐州作戦が終ると、1940年夏の百団大戦まで、華北では大きな戦闘は生じなかった。この小康状態のなかで、スポーツがふたたび活発化する。華北にいた松村甚之助（慶大野球部出身）は、当時の軍隊内でのスポーツの状況を次のように伝える。

昨秋〔1938年秋〕は戦地に於ても不撓不屈の精神を作興し体位向上の意味でスポーツが大いに奨励され忽ち各部隊や民団に野球チームが組織せられ対抗ゲームが各所に行はれたが我チームは八戦八捷目下当地最強のチームと折紙をつけられた。母国を離れる時戦場で野球がエンジョイ出来ようとは夢にも思はなかつたが昨今では野球をやる余裕も生じたといふ<sup>91</sup>。

前早大野球部監督八戸市出身の天下常吉伍長は病気のため北支〇〇病院で加療中だったが全快し再び第一線に向つたが不幸再び痔病再発〇〇病院に入院した旨八

90 『大阪毎日新聞』1938年4月20日。

91 『東京朝日新聞』1939年1月12日。

戸市の友人に二十七日便りあつたが野球だけは忘れられぬと見え手紙の中に左の如く織込んであつた。……北支ではスポーツによる宣撫工作が第一であるともいはれ石家荘では野球、テニスの試合がもう五回もあり僕も投球をしたり審判をしたりしました<sup>92</sup>。

そんな彼らにとって悩みの種だったのがスポーツ用具の問題である。梶原英夫（東京帝大野球部出身）は、「北支は寒くはありますが霜解けなどはありません、グラウンドは何処にもあります、惜むらくは道具が都々の有りで、徒らに腕を撫して居ります、近く佐伯〔喜三郎〕中尉と小生の連名で母校に古品の用具の慰問袋の無心をしようと思つて居ります」と、個人的に解決を図った。佐伯は元早大野球部主将で、1939年8月1日に戦死する。山西省にいた浜野春夫（明大野球部出身）は「最近当部隊内にては野球熱盛んで退屈凌ぎと保健の為野球の試合を致して居ります用具は後方より購入或は手製で第一線での野球も乙なものです」と、別の手段で用具を確保した<sup>93</sup>。このように用具に事欠く中で、しかも真冬の華北で、兵士たちは白球を追っていたのだ。1940年に入ると、スポーツ用具の入った慰問袋が山西省の奥地にも届くようになる。山西省沁県で警備についていた尾坂雅人によれば、

ある時、慰問品としてテニスのラケット、ネット等が届いた。私達は早速広い河原にコート之急造して、久方振りにラケットを握った。ワイワイ騒ぎながらテニスを楽しんでいる最中、対岸から小銃を撃ち込まれて慌てたこともあった<sup>94</sup>。

もちろん、誰もがスポーツを楽しめたわけではない。巨人軍のエース沢村栄治は従軍中に野球をする機会に恵まれなかった。沢村は1938年1月に歩兵第33連隊に入隊、4月に中国に渡り、徐州会戦に参加、大別山で左手を負傷し、野戦病院に送られた。1940年4月に満期除隊した沢村は軍隊で野球をしたかという質問に対して、戦闘につぐ戦闘で「全然余暇はない」「全然野球のことは考えなかった」と答えている<sup>95</sup>。

92 『東京朝日新聞』1938年12月29日。

93 『東京朝日新聞』1939年1月15日。

94 尾坂雅人『戦塵の足跡』著者刊、1978年、131頁。

95 沢村栄治・笹崎横「帰還二勇士戦争とスポーツを語る」文藝春秋編『「文藝春秋」にみるスポーツの昭和史』第1巻、文藝春秋、1988年。

しかし『読売新聞』には、野戦病院の庭でボール投げをする沢村の写真が掲載されており、まったくボールを触れなかったわけではない<sup>96</sup>。このとき沢村の対談相手で、広東から戻った笹崎横（プロボクサー）は、掃討戦が終わって警備に入ると余裕が出てトレーニングをしたと語っている<sup>97</sup>。陸軍はけっして組織的にスポーツを導入したわけではないが、戦況と部隊長にさえ恵まれればスポーツをすることが可能であった。

沢村静男は1942年夏、大日本学徒体育振興会が主催したいわゆる幻の甲子園に広島商業の投手として出場し、準決勝まで勝ち進んだ。卒業後、1944年11月に北支那派遣軍通信隊員として北京で現地入隊した。北京では、軍隊のなかで野球のうまい者を集めて、日本人の民間チームとの試合や、中隊対抗の野球大会が催された。そこで活躍した沢村は、班長から優遇されるようになったという<sup>98</sup>。

都市部では民間のスポーツ大会に軍隊チームが参加するという光景も目にすることができた。たとえば、1939年10月に張家口で開催された第2回全蒙疆野球大会では、軍隊のチームが二つまでも代表権を得て出場し、異彩を添へ軍官民一体の前線スポーツにふさはしい成果を挙げると共に試合においてそのユニフォームの如く将校も軍属もさりと一色に溶け込みスポーツの持つ明朗さのみが躍動する様は勝敗など全く度外視された快さだつた、兵団の投手後藤中尉はかつて静岡高校の名三塁手だつたとかで軟球を握るのははじめてで会心の投球が出来なかつたといふがその強肩を利しての剛球は堂々たる大投手であつた<sup>99</sup>。

同地では1941年6月に約20チームが参加して張家口野球協会が結成されたが、そのなかには「皇軍将兵チーム」も数多く含まれていた<sup>100</sup>。このほか、同年9月に大同で開かれた慶祝施政躍進化体育選抜大会卓球比賽には明治神宮大会に出場した経験があるという久保田という兵士が参加しているし、1942年8月27日の張家口入城五周年記念聖地巡拝駅伝競走では響5331部隊が優勝している<sup>101</sup>。現地の軍当局はさまざま

96 『読売新聞』1939年1月5日。

97 沢村栄治・笹崎横「帰還二勇士戦争とスポーツを語る」。

98 早坂隆『昭和十七年の夏 幻の甲子園：戦時下の球児たち』文藝春秋、2010年、288-289頁。

99 『大阪朝日新聞』北支版、1939年10月21日。

100 『大阪朝日新聞』北支版、1941年6月25日。

101 『蒙疆新報』1941年9月4日、『大阪朝日新聞』北支版、1942年9月2日。

まな形でスポーツを支援した。1939年9月に満洲国の新京で開かれた日滿華交驩競技会に際して、興亜院は5000円を助成した<sup>102</sup>。1940年7月に天津では日本軍と米海兵隊の野球試合が挙行され、第27師団（もと支那駐屯兵团）の師団長本間雅晴中将与参謀長太田公秀大佐が出席し、米軍士官とともに観戦した<sup>103</sup>。1940年8月に開催された中日交驩陸上競技大会では「北京陸軍特務機関」が後援者として名を連ね、9月に太原で開催された第2回華北都市交驩体育大会では山西省陸軍特務機関副長が出席している<sup>104</sup>。

## B. 華中

華中では南京攻略戦前の1937年11月、上海大場鎮の吉川部隊が野球をしている様子が『読売新聞』に掲載された<sup>105</sup>。その直後に南京攻略戦がはじまり、南京陥落後も徐州作戦、漢口作戦と大規模な戦闘が続いた。前線が遠ざかるにつれ、上海の日本軍の間でスポーツが盛んになった。作家、火野葦平は1938年5月に中支派遣軍報道部に配属されたが、小倉中学時代に捕手として活躍した経験を買われ、特務部との野球試合では、報道部チームの投手をつとめた<sup>106</sup>。特務部は宣撫工作の一環として、中国人のスポーツ活動を支援していた。1938年に新中国体育学会（のち新中国体育協会）が創設されたさい、特務部総務科主任の田中邦彦が全面的に協力し、田中は同学会秘書長として実質的な運営に携わった。特務部長で新中国体育学会名誉顧問の原田熊吉少将と相談のうえ企画されたサッカーの維新杯は、「聯絡中日情感、実現親善提携」を趣旨としていた<sup>107</sup>。上海では日本人のスポーツ活動も盛んで、陸軍の兵士も競技会に参加した。1941年11月の第1回中支陸上競技選手権大会では、10000m走で陸軍牧野部隊の奥山一等兵が4位に入賞した<sup>108</sup>。1943年5月の天長節奉祝体育

102 拙稿「戦時下の平和の祭典」。

103 『オリンピック80年』毎日新聞社、1976年、100-101頁。なお本間とスポーツの関係については、拙稿「菊と星と五輪」を参照。

104 『大阪朝日新聞』北支版、1940年8月15、18、22日、9月13日。

105 『読売新聞』1937年11月5日。

106 火野葦平「戦線スポーツ漫談」『アサヒスポーツ』18巻1号、1940年1月。

107 『南京新報』1938年9月28日、『新申報』1938年11月4日。

108 『大陸新報』1941年12月1日。

錬成大会では、陸軍チームが軟式野球に参加している<sup>109</sup>。上海には運動具の工場が日本側3工場、中国側4工場あり、豊富な皮革を利用して、大量の運動具を生産し、上海だけでなく中国の諸都市に供給しており、用具の点では日本より恵まれていた<sup>110</sup>。

地方都市でも野球が盛んだった。1939年2月ころ、九江の某グラウンドでは、バッターボックスに立った白髪の松井部隊長が「よいかッこんどはレフト・オーバーで廬山までカッ飛ばすぞ」と元気のいい声を上げていた<sup>111</sup>。同年4月から10月にかけて九江に駐屯した近衛輜重隊の松本小隊長は「めっぽう野球上手だし好きだった。九江居留民団と大塚隊の対抗試合となり、非番員全員応援のもと大合戦となった」。九江駐在の間、3、4回は試合したのではないかと東海林善吉は回想している<sup>112</sup>。

1942年の浙贛作戦で日本軍は浙江省金華県を占領し、第22師団が同地で警備の任についた。同師団隷下の歩兵第85連隊大竹清照によれば、1943年に入ると金華では治安も回復し、師団はこれまでの戦闘で減退した戦力増加のため、健兵教育対策に取り組み、銃剣術大会、射撃大会などを催した<sup>113</sup>。肥塚喜一は1943年7月の金華の状況について、こう記す。

平穏な日々が続くと師団本部ではいろいろ考える。若者の集団だから、どうやってエネルギーを発散させるか、師団会報で各部隊対抗野球試合を実施することになる。各部隊によくも野球の道具があるものだなと思った。後方の兵站基地ならともかく前線の部隊。さすが帝国陸軍。遊び道具をこんな所まで持って来ているとは。千曲部隊にもくたびれたグローブはあったが、選手交代の時はそのグローブを渡して使用していた。勤務が終わってから練習を始める。出場選手は補欠合わせて十名としても練習の時は十八名は必要なので隊長ドノまで――。試合は小学校の校庭を借りて実施した。師団長以下観戦だ。応援の兵隊が遠くで声を

109 『大陸新報』1943年5月3日。

110 『大陸新報』1942年5月31日。

111 『読売新聞』1939年2月5日。

112 東海林善吉『東海林善吉：雑草のたわごと 自叙伝』著者刊、1988年、182頁。

113 大竹清照「歩兵第八十五連隊南支作戦」平和記念事業特別基金編『軍人軍属短期在職者が語り継ぐ労苦（兵士編）』第3巻、編者刊、1993年。

張り上げ熱戦が続く。千曲部隊は人数が少ないので、野球のうまい兵隊が少ない。一回戦で善戦空しく敗退した。それからしばらく野球熱。休みの日には班対抗の野球が――<sup>114</sup>。

次に内陸の都市、武漢に目を移してみよう。1938年10月に陥落した武漢でスポーツが見られるようになるのは、1939年に入ってからである。慶大蹴球部OBの山下耕也中尉は1939年2月13日付の手紙で武漢の状況を次のように報告している。

待望のフットボール漸く四日前に支給になり、喜んで毎夕食後漢陽商業(?)の校庭で蹴つてゐます。此処にはホッケー、バスケットの設備と四百のトラックもあります。兵隊さんは勇ましく足を蹴るので軍靴をやめて地下足袋でやらしてゐますが、皆夢中です。平素オトナシイ初年兵が、我を忘れて伍長さんをブーンと振りとばしたりして大騒ぎ、審判も笛がなくて、慰問の紙笛でやつても感じが出なく、片手に撞木、片手にドラをさげて駆け廻り球が出るとボワンとたゝく始末、コーナーにはフラッグがはりに残飯貰ひの子供がアグラをかいてゐるといふ訳です。ゴール前の混戦には、私の命令一下『突撃』つていふと、忽ちにして物凄い格闘が演ぜられ、隊長の私も遂にウメボシを蹴り上げられて名誉の戦傷をしました。で三十分ゲームで流石の大別山越の勇士もフラ〜です。負けた方はズラリと一列横隊に並んで土下座をします。もう少ししたら支那の中学生あたりとゲームをやり度いと思つてゐます。支那の子供達にはドロツプを賞品に競走をやらせてゐますが、リレーはテンデ興味がないらしく直ぐ止めます。こゝにも国民性が見られて可笑しいです。自分が勝つても次の者が負けるのがつまらないのでせう<sup>115</sup>。

漢口作戦に参加し、武漢西北郊の孝感県に駐屯していた第16師団輜重兵第16連隊でも、ちょうどこのころにスポーツがはじまった。同連隊第4中隊の医務室に勤務していた小原孝太郎は、1939年1月8日の日記に「二小隊へいったら、小隊本部前の広場で野球をやってゐたのには驚いた。ボールやグラブを小包で送ってもらったくゝ見える」と記している<sup>116</sup>。2月4日には「経理室から自家製のミットとボールをかり

114 肥塚喜一『江南春秋：従軍記』まいほ一む編集部、1990年、242-243頁。

115 「戦線から」『蹴球』7巻1号、1939年4月。

て来てキャクツ>チボールをした。何んと戦争に来てこんな事をやるなんて一予想もしてゐなかつた所で一、とても一愉快だった。羽子つきも面白かつた」と記す。2月13日は休養日だったが、小原はボールづくりに励んだ。すでに仲間の一人はグラブを、もう一人はミットをつくっていた。孝感県から京山県へ移って後の4月23日の日記には「表では経理室がキャッチボールをやってゐる。スポンヂとグラブも、吉岡君が昨日内地から送って来たのださうな。明日は外出日だから聯隊本部と試合をするのだといふので、猛練習をしてゐる」とあり、連隊内部で対抗試合がおこなわれていたことがわかる<sup>117</sup>。武漢南郊の五里界に駐屯していた野戦重砲第13連隊では、1939年秋頃から庭球、野球、卓球がおこなわれるようになる。11月3日の明治節には、班対抗リレー、剣道、庭球、卓球などの試合がおこなわれた。各中隊でもそれぞれ競技がおこなわれ、一中隊はマラソン、二中隊は競技大会、三中隊は庭球大会、段列は相撲大会であった。同連隊の波多野皖三が「中隊毎に幹部の好みが見えて面白い」と記すように、幹部の趣味でその部隊の娯楽が決まる傾向があつた<sup>118</sup>。

1944年4月、武漢の兵站が軟式野球の大会を挙行し、28チーム、300名の兵士が参加した。決勝は第11軍司令部と海上輸卒隊油隊との間でおこなわれた。当時、日本内地ではストライクとかセーフ等の敵性語は使用禁止となつていたが、「ストライクとか、ボールとかいわなければ、気分が出ない」ということで、前線ではおおっぴらに英語の用語を使つた<sup>119</sup>。この頃、漢口では兵站主催で2月に剣道大会、3月に武装駅伝競走と立て続けに催し物が実施されていた。この点に関して、油隊の記録『九師二水記』は、当時「一号作戦」の準備が進行中で、漢口には色々な兵団マークをつけた部隊が集まつており、これらの催し物が作戦のカモフラージュに利用されたのではないかと推測している<sup>120</sup>。

116 江口圭一・芝原拓自編『日中戦争従軍日記：一輻重兵の戦場体験』法律文化社、1989年、343頁。

117 江口圭一・芝原拓自編『日中戦争従軍日記』353-354、357-358、413頁。

118 波多野皖三『続・特務兵日記：一九三七～四〇華中戦線にて』第1巻、葦書房、1998年、456頁。

119 山田清吉『武漢兵站』図書出版社、1978年、177-179頁。

120 九師二水会編『九師二水記：油隊・無線兵の追想』九師二水会、1989年、43頁。

### C. 華南

華南での戦闘は1938年10月の広東作戦ではじまった。仏山近郊の大鎮に駐屯していた小林康正は1939年1月17日に、三五会慰問品を利用し、経理班、兵器班、獣医班の3チームが野球の試合をしたことを日記に記している<sup>121</sup>。

中支派遣軍報道部の火野葦平は1939年5月に南支那派遣軍報道部に配属された。火野はここでも野球チームを結成した。報道部チームが勝った時だけ記事になったことから、火野は「軍報道部チームは、ジャーナリズムの上に不敗の歴史を確立した」と自嘲気味に語る。実力はともかく、ユニフォームまで揃えていたというから、相当な熱の入れようである。スポーツは戦後の復興にも役立った。火野はある青年知識人から、「自分は広東から逃げてゐたのであるが、最近、広東市内で棒球（支那ではさういふ）が行はれてゐるといふことを聞き、安心して帰つて来たのです」という話を聞かされたことを紹介し、野球のおかげで「戦後復興の速度がどれくらゐ早められたか知れない」と述べている<sup>122</sup>。もちろん、火野は個人的な楽しみだけのために野球をしたのではない。火野は広東で居留民に「兵隊クラブ」をつくれと提唱していた。元体協理事で国家主義スポーツのイデオログでもあった李相佰は、ちょうどこのころ在外特別研究員として北京に滞在していた。「興亜建設と厚生運動」と題する記事のなかで、李は前線の厚生娯楽問題に対する銃後の奉仕の問題を取り上げ、火野の「兵隊クラブ」が中国各地で「比較的に反響を呼び起したやうに見受けられ」、北京でも新聞紙で火野と同じ意見が主張されたものの、居留民の貧弱な財政では実現させることができなかつたと論じている<sup>123</sup>。戦争が長期化するなかで士気の維持は重要な問題となりつつあった。

1941年3月9日、広東で往年の早慶野球選手が集まり、早慶戦を挙行政した。始球式では佐久間報道部長がマウンドに立った。選手たちは「軍袴に地下足袋、戦闘帽といういでたちで真摯敢闘し、結局2-2の引分け」に終わった。この試合の様子は『日

121 小林康正『戦争と知性：大学生の前線手記』教育図書、1941年、70頁。

122 火野葦平「戦線スポーツ漫談」。

123 李想白「興亜建設と厚生運動（下）」『東京日日新聞』1939年12月18日。

本ニュース』第42号として日本でも放映された<sup>124</sup>。

#### D. 用具の供給

ここまで中国大陸で広くスポーツがおこなわれていた様子を見てきた。このほか、フィリピンなどでもスポーツはおこなわれていた<sup>125</sup>。野球をはじめスポーツには用具が欠かせない。前掲の資料からは、自分でつくる、中国側の用具を使う、日本から送ってもらう（慰問品を含む）、購入する、陸軍から支給されるなど、さまざまな方法で用具が確保されたことがわかる。ここでは慰問品と陸軍による支給についてくわしく検討してみたい。

戦争の長期化にともない、皮革や金属製品に制限が加わり、日本国内においてさえスポーツ用具を入手することは困難になりつつあった。1938年10月、YMCA 体育主事柳田亨は、YMCA の第5回皇軍慰問班の一員として中国に赴くにあたり、次のような所感を発表した。第一次世界大戦のさい、アメリカでさえ戦争中に厚生運動をやることには反対があった。しかし実際にボールを持って行くと兵士にたいへん喜ばれ、戦闘力が増加し、ホームシックで意気消沈していた連中が元気を取り戻した。これをそのまま日本に当てはめるつもりはないが、第2回皇軍慰問班で大阪 YMCA の松葉徳三郎体育主事がスポンジボールを持っていったところ、非常に歓迎された。ボールはすぐに破損したが、犬の皮で手製のボールを作ってキャッチボールをした。そこで今回、スポンジボールやフットボールをできるだけ多く持って行き、同時に種々のスポーツの指導をしようと計画している。スポーツは健全な娯楽となるばかりでなく、宣撫工作にも適しており、スポーツや遊戯を通して占領地の中国人と融和を図り、文化工作の実を挙げるができる、と<sup>126</sup>。日本 YMCA は日露戦争、第一次世界大戦、シベリア出兵にさいして軍隊慰問事業を実施し、シベリア出兵のさいにはスポーツも事業の一環として取り上げていた<sup>127</sup>。日中戦争が勃発すると、日本 YMCA 同盟内

124 『大阪朝日新聞』1941年3月11日。

125 拙著『帝国日本とスポーツ』242-248頁。

126 『読売新聞』1938年10月20日。

127 拙稿「菊と星と五輪」。

に時局特別事業部を設置して、軍隊慰問事業をはじめさまざまな事業を展開した<sup>128</sup>。スポーツと同じく外来の産物である YMCA は戦時日本で不安定な立場に置かれていた。そのため彼らは積極的に国策に協力する姿勢を見せる必要があったのだ。

中国大陸の日本軍兵士がスポーツ用具を強く要望していたことは、1940年に満洲を訪れた日本陸上競技連盟会長、平沼亮三も言及している。

ソ満国境に駐屯してゐる我が将兵は、……慰安方法は至つて少ない。……だから兵士達はたまの休日には野球の真似事をやつたり、或は所によつて籠球、排球、蹴球などやつて居るのもあつたけれど、それとてもネット一つある訳でなく僅に縄を張つて排球を試み竿を立て、蹴球をやるといふ程度のものであり……それで注文もあつてスポンヂボールやミットなどを帰つてから多少送つたが、慰問品に運動具類を入れることは守備地に在る将士をどんなにか慰めることになるか判らぬと思つた<sup>129</sup>。

1939年1月ころ、南支那派遣軍では「支那人を宣撫する一助として、又皇軍将兵慰安のため」娯楽品を仕入れるべく報道部星野二郎伍長を日本に派遣した。星野が各方面と折衝した結果、陸軍省恤兵部よりラジオ150台、蓄音機600台、レコード1万2千枚、碁将棋1800組、軟式野球具100組、相撲の締込み500組、フットボール、バスケットボール等の支給を受けることになった<sup>130</sup>。じつは南支那派遣軍への娯楽品支給は、陸軍によるより大規模な娯楽品支給の一部にすぎなかった。このとき恤兵部は戦線に送るべく、大量のスポーツ用品を発注していた。その内訳は、軟式野球、テニス用品が各1700チーム分、フットボール1万5千個、ピンポン用具8千台、アイススケート用具2千足等であった。陸軍当局はボールの製造禁止や金具の制限を考慮して、代用品でもかまわないという意向であった。

戦線でスポーツが将兵の体力鍛錬精神慰安の目的のために大規模に採用されたのは、ヨーロッパ大戦当時西部戦線でアメリカ兵が野球に興じイギリス兵がフットボールに戦闘精神を練つた前例はあるものゝ、わが国の戦史には全く未曾有のことでそこ

128 奈良常五郎『日本YMCA史』日本YMCA同盟、1959年、332-336頁。

129 平沼亮三「満洲皇軍慰問の旅」『体育日本』18巻10号、1940年10月。

130 『東京朝日新聞』1939年2月7日。

に軍当局が長期戦対応の覚悟の深さも語られる……<sup>131</sup>。

陸軍省恤兵部の『恤兵金品月報』によれば、1939年4月分として、卓球具4000組、バスケットボール75組、庭球用具1700組、同年7月分として、野球具1700組、同年8月分として、フットボール15000個、同年9月に野球具と庭球具が各50組と記録されており、大規模なスポーツ用具購入が確かに実施されたことがわかる<sup>132</sup>。恤兵部によるスポーツ用具購入は1942年8月（『恤兵金品月報』は同年10月まで見ることができた）まで、毎月ではないものの続けられた。1942年を見ておくと、1月に「野球ネット用マニラ麻 外」が1406キログラム、2月に軟式野球用ボールが5000ダース、3月に軟式庭球用ボールが5000ダース、5月に卓球用ボールが15000ダース、7月は内訳は不明ながら、野球、フットボール、スケート等の購入に約8万円が計上されている<sup>133</sup>。スポーツ用品の支給は、戦場でのスポーツを刺激した。

野球、相撲は大流行で各隊に対し恤兵品として野球道具が配給されてゐる、各隊対抗の試合も盛にやつてゐる、手榴弾投げの練習にもなるわけで将兵はとても明朗で一等兵の名投手のカーブに悩まされて隊長殿が三振してゐる図なんかやはり戦場ならではのみられぬ微笑しい風景である<sup>134</sup>。

しかしながら、平沼の証言にもあるように、陸軍省からの現物支給では、とうてい現地の需要を満たせなかった。1939年12月になっても、江西省の下川部隊は「野球をしたくとも道具がない」ために苦勞していた。バットは木でつくったものの、ボールがない。ようやくある都市でボールを見つけたが、1個が2円80銭もした。そこでボールをなくしたり、こわしたりしたらボール代を弁償するというルールのもとで野球をやらねばならなかった。そのため「両軍とも胸のすくほど打ちたいことは打つて見たいが下手にフライでもかつ飛ばすとボールが行方不明となり忽ち二円八十銭也といふ

131 『読売新聞』1939年2月4日。

132 JACAR: C07091155700 (6画像目)、C07091260300 (7画像目)、C07091289000 (7画像目)、C07091341200 (6画像目)。ちょうどこのとき、一時的にゴムの配当が緩和されたという事情もある（『東京朝日新聞』1939年2月11日）。

133 JACAR: C06030017700 (11画像目)、C06030052200 (8画像目)、C06030066700 (8画像目)、C06030102000 (8画像目)、C06030155200 (9-10画像目)。陸軍によるスポーツ用品購入の新聞報道は1939年2月以降は見られない。

134 「続従軍夜話③」『大阪朝日新聞』1940年9月26日。

わけで」思い切って楽しむことができなかつた<sup>135</sup>。

野球やサッカー、テニスなどに比べると、バスケットボールをする機会は非常に限られていた。池上虎太郎(慶大籠球部出身)は、「応召してから〇年と〇ヶ月、其間ボールは一度も持たなかつたが満月がボールに見えたりゴールを見て走つたり矢張り籠球的良心があるんだと自負してある」という「バスケットの虫」であつた。そんな池上が詠んだ俳句が

名月やボール懐し露営かな

であつた<sup>136</sup>。といつても、ないのはボールだけであつて、安永弘(日大水泳部出身)が「広い南支も相当歩いてみましたが未だプールらしいのに見当りません、その代りどんな辺鄙な片田舎に行つてもバスケット・ボールの設備を見受けます。極東大会当時の支那のバスケット・ボールが強かつた訳です」と述べているように、ゴールはどこにでもあつた<sup>137</sup>。陸軍が支給したのは、野球、テニス、サッカー、卓球の用具であり、バスケットボールの用具はほとんど含まれていなかつた。陸軍は『体操教範』でバスケットボールを採用していたにもかかわらず、である。陸軍は明らかに前線のスポーツを「娯楽」と考えていたのだ。

中国大陸の部隊にスポーツ用具やその資金を支給することは、じつは日中戦争以前からおこなわれていた。1936年6月、歩兵第24連隊留守隊は「満洲派遣上村部隊支給娯楽器トシテ」卓球とサッカーボールを購入した。関東軍隷下の第1独立守備隊は1936年10月に野球用具と庭球用具に加え、野球場と庭球場の維持費の支出を報告した。野球用具の内訳は、ミット2個、グローブ15個、バット10本、ボール4ダース、マスク2個、ユニホーム15着、ベース1組、スパイク15足、計265円50銭であつた。なかなか本格的である。より大規模な例としては、1937年4月、支那駐屯軍経理部が提出した恤兵金使用計画書に、庭球のボール25ダース、ラケット100個、軟式野球のボール20ダース、グローブ80個、ミット40個、卓球のボール35ダース、バット〔ラケット?〕140個が計上されているのを挙げられる<sup>138</sup>。陸軍省恤兵部には多数

135 『大阪毎日新聞』1939年12月15日。

136 『東京朝日新聞』1939年1月4日。

137 『東京朝日新聞』1939年1月25日。

138 JACAR: C04012349200 (7画像目)、C04012421300 (7-9画像目)、C04012513800 (4画像目)。

のスポーツ用具が寄贈されていた。1936年11月分の報告によれば、この月の内訳は、野球具236組、庭球具247組、卓球具269組、角力用褌190本、「スケート」228足、「フットボール」103個であった<sup>139</sup>。

恤兵金でスポーツ用具を購入するという手段もあった。1938年5月に関東軍司令部が提出した恤兵金使用計画には、各部隊における恤兵金の用途が記されている。映画、蓄音機、レコード、写真機、雑誌、碁盤、将棋盤、映写機、草花種子などに混じって各種スポーツ用具が列挙されているが、興味深いことに、部隊によって総額と内容に大きな違いがある。300円の映写機と125円のラジオを購入した阿部部隊は総額が510円と最多であるが、スポーツ関係の用具は購入していない。内藤部隊本部はサッカーボール2個（計10円）、小島部隊本部は卓球具1組（計5円）を購入した。岩松部隊は200円近くをつぎ込んで、野球、庭球、相撲の用具を購入し、相撲場や運動場の整備費用まで計上しており、スポーツに非常に熱心だった<sup>140</sup>。部隊長の嗜好で部隊の娯楽が決まったと考えられる。

### 第3節 国内

日本国内に目を転じると、陸軍内部でスポーツがおこなわれていた形跡を見いだすことはきわめて難しい。1933年の夏の甲子園準決勝で中京商業学校と延長25回の死闘を演じた明石中学校の中田武雄投手は1942年2月1日に戦車第6連隊補充隊に入隊した。このとき中田と同じ部隊にいた横尾英三は「入隊直後に、野球の試合がありましてな。みんなグローブはめとんのに一人だけ、素手でやっとなのがおる。……中田やった。ゆるい球を投げてくれてね、楽しそうやった」と、一度だけではあるが野球の試合があったことを証言している<sup>141</sup>。1942年夏の幻の甲子園で優勝した徳島県立商業学校の選手妹尾和治は、卒業後に徳島の歩兵第43連隊に入った。そこでは連隊同士による野球の対抗戦がおこなわれていた。妹尾の先輩で、明大野球部の投手として活躍していた林義一がいたおかげで、歩兵第43連隊は「減法、強かった<sup>142</sup>」。

139 JACAR: C04012539600 (11 画像目)。

140 JACAR: C04012628100 (4-8 画像目)。

141 読売新聞大阪社会部編『戦没野球人』108頁。

142 早坂隆『昭和十七年の夏 幻の甲子園』322頁。

この事例は、1920年代のような連隊単位の野球が実施されていたことを示唆する。他の連隊でもこのようなケースがあったかもしれないが、当時の新聞雑誌で報道されることはなかった。むしろ次のような事実が、スポーツの不在を物語っている。1944年10月のことである。

東部第四部隊（近衛騎兵連隊）の機関銃中隊に見習士官として入隊した。一ヵ月ほどして夕食後に兵隊に訓話しろと上官に命ぜられ、私は即座に「こんな素晴らしい緑の練習場で戦争の練習は当然必要だが、自分はここでラグビーをやればよいと思う」と前置きして、ラグビーの格闘の姿勢、精神は軍人精神に通ずることを説いた。あとで直ちに中隊付将校室に呼ばれ「貴官の言うことは日本陸軍の兵隊にはムリだ。気持ちはわかるが・・・」とやんわり叱られた。その時初めて知ったのはその人は先に慶応ラグビー部を出た下村少尉だった<sup>143</sup>。

以下に見る諸例は、日本国内の陸軍でもスポーツが継続的におこなわれていたことが確認できる例外的な事例である。

#### A. 陸軍幼年学校

1937年版『輝く陸軍将校生徒』は、陸軍幼年学校の遊戯について「随意運動の時間が五十分あつて、テニスもやれば野球もやる。蹴球もやる。自転車にも乗る。とても楽しい時間だ」と紹介する。また陸軍予科士官学校の随意運動の時間については、「競技は球戦が盛んだ。蹴球も籠球もやるが、試合規則は独特のもので、その猛烈なことも他に見られない位だ」と紹介し、籠球は写真まで掲載する<sup>144</sup>。球戦、籠球は『体操教範』に挙げられた種目で、いわば陸軍公認のスポーツである。これが1940年版になると、陸軍幼年学校の随意運動は「駈歩をする者、ボールを追ふ者、或は鉄棒上で得意の大車輪をやる者、逆立もやる。蹴球もやる。自転車にも乗る。とても楽しい時間だ」と書き換えられ、「野球」「テニス」が削除された。陸軍予科士官学校のほうでも、蹴球や籠球の記述が削除され、籠球の写真もなくなった<sup>145</sup>。さらに1943年の

143 伊藤健一郎「戦争末期のラグビー部」回想の東大ラグビー編集委員会編『回想の東大ラグビー』。

144 陸軍将校生徒試験常置委員編『輝く陸軍将校生徒』大日本雄弁会講談社、1937年、21、110、121頁。

145 陸軍将校生徒試験常置委員編『輝く陸軍将校生徒』大日本雄弁会講談社、1940年、20頁。

『陸軍幼年学校の生活』では「戦友と道場で武技を練る者、鉄棒で思ふ存分身体を錬磨する者もある。駈足をして学校の周囲をめぐつてゐる者、ボールを追ふ者、或は逆立に神技を発揮して自慢してゐる者、若人の身体は軽い。白い運動服は、縦横に運動場をかけめぐると、武技が加わり、楽しさよりも鍛錬を強調するようになった<sup>146</sup>。これらの本は陸軍の各学校を受験しようと考えている子どもたちを対象としたものであり、その記述を追うことで、陸軍の自己イメージの変化をうかがうことができる。

1940年以降、「野球」「テニス」という言葉はなくなったものの、「ボールを追ふ者」という記述が最後まで残ったことからわかるように、スポーツはけっして消滅したわけではなかった。1944年3月2日のある生徒の日記には「随意運動時、同寢室ノ者ト籠球ヲ為ス」と記されている<sup>147</sup>。1944年4月に大阪の陸軍幼年学校に入学した沢田実は、入学早々物置で野球用具一式を見つけた。中学生気分が抜けていなかった沢田たちは、休日ごとに野球の練習をし、他のクラスと試合をしたが、あるとき三年生から「貴様等は、将校生徒としての自覚はあるのか」「決戦下の日本の現状をなんと心得とるか」と叱られてしまう。沢田は内心、「使つていけないものならどうして置いてあったんだ」と思いつつ、やはり悪いことをしたと反省し、以後野球を止めた。沢田は、その後、先輩、同期生とも野球をしているのを見なかったと記している<sup>148</sup>。しかし、1945年4月に同校に入学した前田祐吉は、日々野球を楽しみ、「学校で禁止された野球が、まさか幼年学校で許されるとは……正直言ってびっくりでした」と後に回想している<sup>149</sup>。戦争の最末期まで陸軍幼年学校ではスポーツを楽しむことができたのである。

## B. 陸軍航空隊

陸軍幼年学校がスポーツをいわば黙認していたのに対して、陸軍航空隊では積極的にスポーツが実施された。のちに軍神と称される加藤建夫は、飛行第2大隊第1中隊

146 今村文英『陸軍幼年学校の生活』越後屋書房、1943年、59頁。

147 東幼史編集委員会編『わが武寮：東京陸軍幼年学校史』東幼会、1982年、283頁。同書は『輝く陸軍将校生徒』の1937年版と1940年版の違いについても言及している。

148 大阪幼年学校史編纂委員編『大阪陸軍幼年学校史』阪幼会、1975年、348-349頁。

149 山室寛之『野球と戦争』173-174頁。

長として日中戦争に参加した。1937年の冬、石家荘にいた加藤隊長は気分転換と体力づくりを兼ねて、しばしばスケートや野球の機会を設けた。加藤の日記には、12月3日に「愈々寒さ烈し。午前は野球大会。午後はピンポン。スケート場検分す。運動せる為心地よし」、1月2日に「午前九時より野球大会、稍寒きも一同愉快に実施す。午後は余等も曹長以上にて一チームを編成し力闘す」と記されている。戦時中に刊行された加藤の伝記は、日記を引用しつつ、スポーツマンとしての側面を描写している。

「戦闘は気力である。気力は強壯な体力から生れる」といふ持論の加藤隊長は、また、部下の体力を鍛へる目的で、部隊長に願ひ出て野球道具を揃へ、中庭にはピンポン台を据ゑつけてゐた。野球は陸士予科時代、水野ヶ原でユニフォーム姿の府立中学チームを相手に、軍靴巻脚絆といふいでたちで対抗した区隊チームの主将として投手盤に立つた腕前である。野球大会も、かういふ和やかな機会を通じて、一兵に至るまで、部下全員と親しまうといふ心遣ひの現れであつた<sup>150</sup>。

とくにスケートは「戦闘機乗りに必要な運動神経と柔軟強靱な体を練り上げるのに最も適当だ」ということで、作戦のあいまに隊員総出でスケート場をつくるなどして、スケートを奨励した。加藤の部下であつた檜與平によれば、華北から転じて広東にいたとき、加藤は「チームワーク」「体力増強」「危機のときも自信を持つ」ことを戦技訓練の基礎としていた。「チームワーク」を重視する加藤は、撃墜数の多寡を論じる隊員に対して、「撃墜ができたのは、僚機の援助と他の人たちの上空援護の成果である。また、飛行機が戦闘能力を十分に発揮できるよう整備してくれた整備の将兵の努力のたまものであり、けっして個人の功績と思つてはならない」と訓示する。檜はこの訓示を、「バレーボールの試合でスパイクを決めるのも、セッターがよいトスを上げてこそ成功する。空中戦闘もこれと同じである」と、加藤が日ごろから強調していたスポーツ精神と結びつけて理解した<sup>151</sup>。

陸軍の航空部門が他と違うのは、スポーツを娯楽としてだけでなく、訓練の一環として取り入れ、学校で組織的に実施していた点である。その理由は、「航空兵業ハ他ノ兵業ニ比シ空中勤務ニ於ケル加速度及気圧ニ依ル血液偏在ノ均衡保持、平衡器官ノ

150 朝日新聞社編『軍神加藤少将正伝』編者刊、1943年、117頁。

151 檜與平『隼戦闘隊長加藤建夫：誇り高き一軍人の生涯』光人社、1987年、32、65頁。

能力保持及諸筋ノ協同動作能力竝ニ窮迫姿勢ニ対応スル動作等異ナル所」が多いからであった<sup>152</sup>。陸軍熊谷飛行学校教官平岡寛は「一般に学生は運動体育で錬成され、操縦に必要な神経系統も発達している。習得が実に早く、現在のように短期に大量の人を空へ送るときに有利である。ことに野球をやっているものは断然優秀であり、操縦者として欠くべからざる注意力は、野球で自然にできてくる」と野球を高く評価した<sup>153</sup>。東京陸軍航空学校が編纂した『体操教育之参考』では応用体操のなかに球技運動の項目が設けられ、投避球、球送、籠球、排球が挙げられている。うち籠球は「籠球ハ大ナル全身運動ニシテ巧緻性ニ富ミ且一瞬ノ判断及協同動作ノ敏速ヲ要スル点ニ於テ興味深キ競技ニシテ価値極メテ大ナリ」、排球は「排球ハ同時ニ多数ノ人員ヲ以テ為シ得ル適良ナル全身運動ニシテ微妙ナル協同動作ヲ要スル特性アリ特ニ中年以上ノ年齢層ニ適ス」と評価されている<sup>154</sup>。陸軍『体操教範』では、団体競技は附録として扱われており、航空部門との違いは明らかである。

陸軍の航空関係の学校や部隊でスポーツをしたとする記述は少なくない。東京陸軍航空学校で学んでいた陸軍少年飛行兵第12期生の1941年4月16日の日記には、「体操でシュウ球をやった。久しぶりでやったのでとても面白かった」という一節がある<sup>155</sup>。同14期生の反省日誌の1942年4月30日の条には「「バレー」ヲ練習、大キナ音許リセシモ球アガラズ。……女ガヤルコトト思ッテ居タ「バレー」モ、ヤリ出セバ興味湧キヌ」、11月9日の条には球技に対して「相互ノ連携ヲハカレ。球ヲ見捨テルナ」という注意を受け、これは球技だけでなく、なに事にも通じる言葉だと記されている<sup>156</sup>。館林集成教育隊でも兵舎前の広場で野球がおこなわれていた。「192隊長内藤中尉を「アンパイヤー」と英語で呼び「ストライク」「アウト」とやっていた。当時民間では「英語」は「敵性語」で排斥されていたのに、特攻隊では平気で使用して一寸世間に申し訳無い」と同隊の堀山久生は記す<sup>157</sup>。詩人竹内浩三は1943年9月

152 陸軍航空総監部編『体操教育之参考』編者刊、1943年、2頁。

153 植村陸朗「スポーツ談義」『アサヒスポーツ』20巻17号、1942年9月、『読売新聞』1943年7月20日。

154 陸軍航空総監部編『体操教育之参考』176、178頁。

155 少飛十二期会編『誰に叫ばん』編者刊、1983年、61頁。

156 少飛第十四期生会事務局編『少飛第十四期生のあゆみ』編者刊、1998年、71、97頁

に筑波の滑空部隊へ配属され、訓練に明け暮れていた。竹内は1944年3月24日から26日まで、「ヒルカラハ、野球デアッタ。カクベツ面白イワケデモナカッタガ、イヤイヤッテイタワケデモナカッタ」、「朝ハ体操デアッタ。枯草ノ上デ、 Denguri返ッタリ、トンダリハネタリシテイタ。蹴球ヲシタ。面白カッタガ、体ガエラカッタ」、「ヒルカラ、飛行場ノ枯草ノ上デ蹴球ヲシタ。裸デアッタ。ボールヲ小脇ニ抱エテ、トット、トットト走ッテイタ」と3日連続で野球や蹴球をしたことを日記に記している<sup>158</sup>。

陸海軍でも航空関係の方から最近庭球部会への申込が相次いで居るのは面白い例へば立川陸軍航空研究所とか海軍の方では土浦海軍航空隊とか土浦海軍航空廠等でその申込要旨は軍事的見地より体育作業極めて旺にして緊急なる処今般庭球コート二面新設せられ候云々と云つたものである。慶応の山川恵三郎君が卒業後土浦に入隊し有名な闘球の選手に選ばれて活躍した等は庭球が決して他の運動に劣るものでない一証左である<sup>159</sup>。

上記は1943年夏の『日本庭球』に掲載された記事である。『日本庭球』は1942年11月に「庭球が婦女子の行ふ可き競技でありとされ、真に男子の行ふ可きものではない」という観念を正し、「新に日本特種の庭球を樹立」することをめざして刊行された雑誌で、庭球が高度国防国家の建設、そして戦争に役立つことを必死でアピールしていた<sup>160</sup>。陸海軍の航空部門の庭球熱はテニス界を大いに元気づけたことであろう。しかしながら、それは陸軍全体のスポーツ観を変えるまでにはいたらなかった。

### C. 陸軍病院・工廠

1938年8月21日、陸軍戸山学校のグラウンドで、臨時東京第一陸軍病院の傷痕軍人による野球試合がおこなわれた。

白衣勇士の職業戦線への雄飛が相踵いで伝へられる折柄東京第一陸軍病院の鉄脚チームと神経チームとの野球試合が廿一日午前陸軍戸山学校グラウンドで行はれ

157 堀山久生編『館林の空：第30 戦闘飛行集団館林集成教育隊』著者刊、2002年、72頁。

158 小林察編『竹内浩三全集』2巻、新評論、1984年、70-71頁。

159 「陸海軍の庭球熱」『日本庭球』2巻8号、1943年8月。

160 針重敬喜「日本庭球の新発足」『日本庭球』創刊号、1942年11月。

た。何れも北、中支の野に名誉の戦傷を負った勇士許りだが不自由な義肢を蹴つてグラウンドの勇士振りを遺憾なく発揮、精神創傷治療の目的は見事に果された。院長三木中将以下各病棟から出動した白衣勇士が芝生スタンドを埋めて熱心に観戦、試合は鉄脚軍（義肢チーム）の先攻で開始、市本上等兵が金属製の作業義肢を引摺つてボックスに立てばスタンドの鉄脚軍応援団から爆弾のような声援だ、劈頭の大飛球を神経軍（軟部盲管銃創による神経麻痺チーム）の足立左翼手転びながら素手で捕へるの美技、軍医も応援団も涙ぐむフライン・プレーが続出する<sup>161</sup>。結果は8対0で神経軍が大勝した。野球の試合で敗れた鉄脚軍だが、軍医の話によると「初めは杖をついて歩いても危かしかつた連中だが、義肢を着けて僅か二ヶ月、今ではランニングでもバスケット・ボールでも銃剣術でも自由にやつてゐます、何でも出来るという自信、その張切る精神力は恐ろしい位です、さうした自信を増させるには野球のやうな全身運動が一番いいのです」と、精神面でのリハビリに大きな成功を収めていた。もちろん彼らは軍人として戦場に戻ることはできなかったが、職業戦線で新たな戦いをはじめるとあたり、スポーツは彼らに大きな自信を与えたのだ。言い換えるなら、彼らはスポーツによって男らしさを（完全ではないものの）取り戻すことができたのである。

彼らの「活躍」を喜ばない人もいた。早大競走部の田中弘によれば、

昭和14年ぽかぽか暖くなりはじめた春、グラウンドの隣、東京第一陸軍病院の裏の鉄条網を倒し、境界の溝に板をわたして白衣の傷病兵達がグラウンドに入り込むようになった。はじめは散歩がてら練習風景を見ている状況であったが、俺達も機能回復にと、野球をあちらこちらではじめ、走路にテニスコートを2面も作った<sup>162</sup>。

こうして傷痕軍人はグラウンドを「侵略」してしまったのだ。その後、田中が投げた円盤が傷痕軍人を慰問にきた女性に当たるといふ事件が起き、それがもとで陸軍省が傷痕軍人の運動場への出入りを禁止し、一件落ち着いた。

161 『東京朝日新聞』1938年8月22日。

162 田中弘「侵略されたグラウンド」早稲田アスレチック倶楽部編『早稲田大学競走部七十年史』編者刊、1984年。

傷痍軍人によるスポーツの競技会はたびたび開かれた。1939年の陸軍記念日には学習院の生徒340名が臨時東京第一陸軍病院を訪れ、六年生の「学習院チーム」と「十七外科チーム」の野球試合がおこなわれた。学習院チームには、野球好きの賀陽宮恒憲王の息子、治憲王がいた<sup>163</sup>。3月19日には陸軍戸山学校で将兵慰問体育大会が開かれ、臨時東京第一陸軍病院からも多くの選手が出場することになっていた<sup>164</sup>。1941年4月に開かれた同院の野球大会には13チームが参加して熱戦を繰りひろげた<sup>165</sup>。

中国大陸の陸軍病院でも傷痍軍人は野球を楽しんだ。関東軍奉天病院の五竜背分院には農業部、野球部、園芸部があった。1944年7月時点で65名の患者がいたが、野球部に20名、農業部に20名、園芸部に10名所属していた。野球部は毎日午後野球をし、1週間に1、2回部対抗や五竜背部落の青年たちと試合がおこなわれ、患者は原則として全員見学して応援することになっていた<sup>166</sup>。

陸軍病院では日中戦争以前からスポーツがおこなわれていた。1934年11月、福知山衛戍病院は「還送患者慰安並娛樂設備ノ為メ」受理した恤兵金でキャッチボール、ベビーゴルフ一式等の購入を申請した。1935年4月、新京衛戍病院は、「職員以下並ニ患者ノ健康増進、治療促進ノ為メ」、テニスコート2面の新設(費用は600円)を申請、新站衛戍病院は1936年4月に野球用具一式、同年10月にスケートとピンポン球の購入を申請した<sup>167</sup>。このように国内外の陸軍病院(衛戍病院は旧称)では、テニス、野球、卓球、バスケットボール、バレーボール、スケート等の用具が設置され、とくに卓球は「戦傷勇士の外科的療法に偉大な効果を表はしてゐる」と言われていた<sup>168</sup>。

患者だけではない。軍医や衛生兵も野球に加わった。

〇〇病院長として傷病兵の収容治療に寧日のない三宅幹部隊長は白衣の勇士の看護にあたる衛生部隊の将兵の身体が虚弱では申訳ないといふ見地から、戦場にあ

163 『東京朝日新聞』1939年3月11日。

164 『東京朝日新聞』1939年3月10日。

165 『東京朝日新聞』1941年4月16日。

166 大津喜一『軍隊末期の初年兵と戦争』改訂版、編者刊、1970年、78頁。

167 JACAR: C04012043300 (4画像目)、C04012132700 (3画像目)、C04012330500 (5画像目)、C04012423000 (5画像目)。

168 遠藤喜美治「祭儀と競技」『学校体錬』1巻9号、1941年9月。

つても絶えず部下の体位向上を奨励してゐるが、その一例として、有志をもつて野球チームを組織し多忙な軍務の中、昼食後の一と時を割いて毎日野球の試合だ、院内における試合はひとり体位向上のみならず、入院中の白衣の勇士の慰安にもなり一石二鳥の名案である、けふも暖かい新春の陽ざしがさん／＼とはね返る広い病院の芝生で試合が初まつた、味方の不振に気をいらいらさせてゐた部隊長が「ようし、俺がホームランを飛ばすから見とれ……」と勢ひよくバッターボックスに立つたまではよかつたが三振で惜しくもアウト<sup>169</sup>。

軍医に体力が必要なことは言うまでもない。しかしここでは体位向上の理由として、白衣の勇士に対して「申訳ない」ことが挙げられている。これはどういうことだろうか。軍医や衛生兵は軍人としては亜流の存在である。つまり、軍人のなかでは男らしさに欠ける存在である。しかし、傷痍軍人に対してであれば、彼らは引け目を感じずにすんだ。傷痍軍人の前で野球をしてみせることで、彼らは男らしさをいくらかでも回復できたように感じ、自信を持って本来の業務に励むことができたのではないか。

小仲正道は1年間戦地にあつたが、病気のため後送され、満洲国新京の北支派遣軍岡田訓練隊（満 145 部隊）で敗戦までの約2年間を過ごした。

岡田隊ほど凡ゆるスポーツに長じた部隊は他に比を見ない。精鋭な訓練隊だった。数々のスポーツの内ラグビーほど敏捷、果敢、旺盛な気力で終始流動する激しいスポーツはないであろう。隊では、当時既に二チームが編制され、寺田、望月両班長殿が両チームの主将として練習が積まれていた。千代田公園のグラウンドで前後列に分れ両チームを応援したものだ。甲子園球場のようになっていたグラウンドの観覧席に陣取り、両応援団は団長指揮のもと軍歌北支派遣軍の歌を駆足軍歌調で盛んに声援した。隊長殿自ら上半身裸体、半袴下姿で陣頭に立ち、一個のボールを中心にスクラム戦から試合が開始される。楕円形のボールを小脇に抱え、敵陣地に突入するが、これを阻止せんと争奪戦が繰返される。歓声が湧く時、既にボールはリレーされて、これを追う熱戦が展開されトライされる寸前、最高潮に達す。その間入り乱れてボールを追う、運ぶ、激しい流動は正に<sup>ママ</sup>壮歎で男性的な

169 『大阪毎日新聞』1939年1月9日。

超人スポーツだ。斯くして練習に練習を積み、在満各地のチームとの試合にも幾度か遠征して実力を磨き、ついに満洲国最強チームとして令名、その名も高き隣接する満洲医大チームと対戦の日が来た。この日は暑い日差しのグラウンドで開始され、善戦よく健斗したが一勝二敗で涙をのんだが、短時日の間に最強チームと対戦できるまでに成長した。影には隊長殿の卒先陣頭指揮と旺盛な軍人精神の発露であった。選手の五体には何時も赤チンの跡が痛々しく、激しい練習を物語っていた<sup>170</sup>。

小仲は繰り返し岡田隊の男らしさを強調する。だが、「精鋭な訓練隊」という表現自体、すでに自己矛盾を含んでいる。というのも、精鋭な部隊であればただちに前線に送られるはずだからである。病気や怪我で前線に立てないからこそ、訓練隊に編入されたのだ。傷ついたプライドを取り戻すために、岡田隊は最も男らしいスポーツに全力で取り組んだ。それは傷ついた身体にはかえってマイナスであったかもしれない。しかしそうすることで、自らの男らしさを確かめることができたのだ。

次に工廠関係を見ていこう。1938年11月に開かれた第1回日本厚生大会で陸軍省整備局の石光荣主計少佐は、陸軍作業庁の状況を次のように報告した。

野球とか蹴球とか庭球とかバスケット、バレーボール、これ等は何れも結構でありまして、私の方の工場に於きましても中々盛んにやつて居るのでありますが……陸軍の工場と致しましては事変後設備拡張をやつて居りまして、従来これ等慰楽に使つて居りました場所迄も取り上げて設備を拡張すると云ふ結果になつて居るのであります<sup>171</sup>。

「従来」娯楽に使っていた場所がなくなったことを受け、石光はあまり場所をとらない「ガーデンテニス」なるものを考案したと述べている。昭和15年度の『陸軍兵器廠歴史』は、「体力ノ維持増進」のため、作業時間中に体操や武道の修練を実施するとともに、休憩時間に各自が卓球、庭球、野球、排球、弓術をおこなっていると記す<sup>172</sup>。

1944年春から学徒の勤労働員が本格化するが、彼らのなかにもスポーツを楽しん

170 小仲正道編『思い出：岡田隊とともに』後編、岡田戦友会、1973年、46-47頁。

171 日本厚生協会編『第一回日本厚生大会報告書』編者刊、1939年、118頁。

172 陸軍兵器本部『陸軍兵器廠歴史』昭和15年度（防衛研究所蔵）、144頁。

だ経験を持つものがある。北野中学校野球部の鈴木浩は、在学中の1943年5月に野球部が廃部になるという憂き目を見たが、1944年春から1945年6月まで勤労働員で過ごした大阪桜島の陸軍兵器補給廠で、若い大尉が「体を鍛えよう」といって毎日昼に軍人対学生の野球試合をした。用具も一通り揃っていた。投手だった鈴木は「いたいどれだけ投げたのか。補給廠にいる一年以上の間、毎日、投げまくった」と証言している<sup>173</sup>。

以上、陸軍内部のスポーツの状況を見てきた。陸軍はスポーツを鍛錬の道具ではなく娯楽の手段と見なしていた。スポーツを通して軍人を養成することはできないのであり、実際に軍隊教育のなかにスポーツの痕跡を見いだすことは難しい。スポーツの男らしさと陸軍軍人の男らしさは両立しない。それゆえ、スポーツを許されたのは、軍人とは一線を画す人びとであった。病院や工場は説明するまでもないだろう。陸軍幼年学校は将校の卵を養成する学校ではあったが、前稿で論じたように、軍人としての男らしさはまだ強く要求されなかった。ただ、いずれの場合も、たんなる娯楽というよりは、生産能率の向上、不満のはけ口、精神的肉体的リハビリ、発育期の生徒に対する配慮などの目的が伴っていた。戦時には、楽しみのためだけの娯楽は許されていなかった。しかし、同じ軍人でも、国外で実戦に参加している軍人には娯楽が許されていた。それは士気の維持のためにも必要不可欠な措置であったし、国外であったがゆえに国内の士気に影響を与える心配が少なかった。一方、航空関係の軍人には、まったく異なる男らしさが求められた。それは航空戦の性格によるものであり、スポーツに寛容だった海軍でも、とくに航空部門はスポーツをきわめて重視した。

#### 第4節 民間スポーツ界との関係

##### A. 大日本体育協会とその周辺

1936年5月、陸軍省医務局長小泉親彦は徴兵検査の結果に基づき、壮丁の体位が低下しているという衝撃的な「事実」を発表した。これが事実ではなく、統計処理上のフィクションであったことは高岡裕之が指摘するとおりである<sup>174</sup>。一方で壮丁体

173 山室寛之『野球と戦争』172-173頁。

174 高岡裕之「大日本体育会の成立：総力戦体制とスポーツ界」坂上康博・高岡裕之編『幻の東

位低下問題を契機に、陸軍が民間の体育・スポーツ界との関わりを強めていったことも事実である。

1936年12月、大島又彦陸軍中將が体協会長に選出された。体協の会長職は1933年10月に岸清一会長が死去してから空白が続いており、近衛文麿や松平頼寿（全日本馬術競技連盟会長）の名が挙がることはあったが、なかなか決まらなかった。1936年12月15日の理事会で会長に推薦されたのは日本ヨット協会会長竹下勇海軍大将であった。しかし、竹下が固辞し、副会長の平沼亮三も固辞したため、大島専務理事が「昇格」した<sup>175</sup>。こうした経緯からわかるように、予備役であった大島中將の会長就任は、陸軍によるスポーツ界への干渉と見ることはできず、また体協側に陸軍と関係を強化しようという積極的な意図があったわけでもない。ただ、結果として、両者の関係が深まる契機になったとはいえるかもしれない。

1937年6月19日に体協は体育振興調査委員会（原案では「国民体位向上委員会」）を設置して、国民体育振興の具体策を検討しはじめる。じつはその前日、体協は小泉親彦を迎えて、国民体位向上とスポーツに関する座談会を開いており、体協の「国民体育」が陸軍の支持のもとでなされたことが推測される<sup>176</sup>。ちょうどこの頃、東京朝日新聞社は「国民体力向上座談会」を開催し、軍からは小泉のほか、陸軍戸山学校長鷺津鋦平少將、海軍医務局長高杉新一郎軍医中將が出席した。座談会の模様は6月24日から7月10日まで連載された。日中戦争がはじまったまさにその時期に、国民体育をめぐる軍とスポーツ界の関係は強まりつつあったのである。そして戦争の勃発が両者の関係をさらに強化していくことになる。

日中戦争が勃発し、娯楽一般が自粛されるなか、スポーツ界は積極的に戦争協力の姿勢を示し、その存在意義を主張するようになる。1937年7月18日、大日本職業野球連盟は国防費献金東西対抗野球戦を挙行了した<sup>177</sup>。日本陸上競技連盟は競技会の収益332円余を陸軍に献金、日本水上競技連盟は日本選手権大会のプログラム売上金か

京オリンピックとその時代：戦時期のスポーツ・都市・身体』青弓社、2009年。

175 『東京朝日新聞』1935年7月9日、1936年10月16日、12月16日。

176 高岡裕之「大日本体育会の成立」、『東京朝日新聞』1937年6月19日、『読売新聞』1937年6月20日。

177 『東京朝日新聞』1937年7月19日。

ら陸海軍にそれぞれ 500 円を献金した<sup>178</sup>。東京六大学リーグは、リーグ戦開始時に「事変宣言」をおこない、陸海軍に 1 万円、さらにシーズンの純益の 1 割を献金することになった<sup>179</sup>。翌年 10 月、この献金は重機関銃「愛国野球号」に姿をかえ、「暴支膺懲のために猛打ならぬ猛射を発揮する」ことになった<sup>180</sup>。

「国防競技」の誕生は、このような軍とスポーツの新しい関係の産物である。織田幹雄によれば、織田がドイツの新聞や雑誌に載っていた国防競技のことを大島鎌吉(大阪毎日新聞)に紹介し、中沢米太郎(大阪商業大学)を加え 3 人でお茶を飲みながら、これをやろうということになった<sup>181</sup>。ヨーロッパ各国の国防訓練、陸軍戸山学校の体操教範、青年訓練所の教練などを参考にして草案を作成し、1937 年 10 月 20 日に大阪府立青年学校教員養成所主催の大阪府下青年学校「国防スポーツ」大会が披露された。草案作成には、第 4 師団司令部附の北条藤吉中佐も加わった。翌 11 月 23 日には大阪毎日新聞社の主催で、大阪府下青年学校国防スポーツ第 1 回競技会を西宮球場で開き、106 校から約 1000 名が参加した。翌年は第 1 回関西青年国防体育大会として、134 校から 1903 名の参加をえて開かれ、陸軍戸山学校からは外園進と高園繁が参観に訪れた。東京では北沢清が中心となって、1938 年 5 月 15 日に東京日日新聞主催で第 1 回関東地方青年学校国防体育運動大会が開かれた。6 月 19 日に国防体育訓練の要目を制定するための委員会が開かれ、軍からは海軍省人事局第一課の浮田信家、陸軍戸山学校教官の河野省介、第 1 師団司令部附の重松大佐、陸軍省人事局徴募課の土井元武が出席した。最終的に国防体育訓練は「国防競技」という名に改められ、1939 年の明治神宮大会から正式種目として実施された<sup>182</sup>。

また国民体位の向上と国防の充実を図るべく、1939 年 8 月に体力章検定が制定された。同検定は「大日本連合青年団、陸軍戸山学校、全日本体操連盟等の検査標準を

178 『東京朝日新聞』1937 年 7 月 26 日、8 月 8 日。

179 『東京朝日新聞』1937 年 9 月 4 日。

180 『読売新聞』1938 年 10 月 5 日。

181 「座談会」北沢清追想録刊行会『北沢清追想録』編者刊、1982 年、209 頁。中沢は東京オリンピック返上が決まったあと、大島とジンギスカン鍋をつつきながら話し合ったとするが、時期的に合わない(中沢米太郎『国防体育訓練指針：戦場運動・海洋訓練・自転車訓練』青年教育普及会、1943 年、4-5 頁)。

182 中沢米太郎『国防体育訓練指針』4-11 頁、拙著『帝国日本とスポーツ』136 頁。

基礎として」、厚生省体力局の栗本義彦が中心となって作成した。北沢清の回想によれば、栗本は「前年〔1938年〕からひたすらこの仕事に打込み、陸軍戸山学校の意見を聴いたり、母校東京高師体育科の協力を得たりして案画し」という。1943年に厚生省鍛錬課長宮脇倫はある座談会で体力章検定制定のころを振り返り、「あれを決める時は相当軍の方との連絡が多かつたのです」と語っている。そもそも体力章検定が青年男子のみを対象とし、初級合格が徴兵検査の甲種合格者を標準としていた点からも、また体力章検定の内容が陸軍戸山学校の運動能力テストの系譜に連なることから、陸軍の意向がかなり反映されているとみて間違いなからう<sup>183</sup>。

国防競技の生みの親のひとりで、東京日日新聞運動部副部長であった北沢清は、1939年のスポーツ界を振り返って次のように述べる。

国防競技は今年のスポーツ界に鋭角的な存在を明瞭にしたと同時にスポーツ観衆量の多寡は必ずしもスポーツの普及を測る物指とならないことを示唆したものといへよう。軍部方面ではかゝる視角からスポーツ界に向つて積極的な関心を払ひ出したが、単に国防競技に止まらず、国防能力増強に必要なスポーツを、一言にしていへば戦力増強に直接的に効果の多い銃剣術を初め射撃、馬術、水泳、スキー、自転車等の運動競技を重視すると共にスポーツ界に対して軍部が直接間接に示したこの一年間の指導協力振りは従来にみられないほど熱が籠つてゐた<sup>184</sup>。

北沢はもともと国家主義的なスポーツに共感しており、極東大会満洲国参加問題では岡部平太とともに反体協の先鋒となった。また日本自転車連盟専務理事でもあった北沢はいち早く明治神宮大会の自転車競技を軍事化していた。1941年5月、北沢は文部省体育局運動課長に抜擢され、学生スポーツ界をよりいっそう戦争協力へと導いていく。機を見るに敏な北沢は、陸軍に行くときは陸軍の服装で陸軍式の敬礼をし、海軍に行くときは海軍の服装で海軍式の敬礼をするなどして、軍と良好な関係を維持し

183 北沢清「体力章検定とその前後」、『基礎体力の養成座談会』『新武道』3巻11号、1943年11・12月、木下秀明「いわゆる「運動能力テスト」に関する陸軍戸山学校の系譜と体力章検定」『研究紀要：日本大学文理学部人文科学研究』51号、1996年、『東京朝日新聞』1938年9月7日、栗本義彦「体力章検定に就て」『東京朝日新聞』1939年2月16日-2月26日。海軍は水泳を体力章検定に入れることを要望しており、1942年7月に実現した。

184 北沢清「スポーツ界この一年（完）」『東京日日新聞』1939年12月26日。

ていた。銀輪部隊の提言をしたのも北沢だった<sup>185</sup>。

1941年4月以降、健兵対策が問題となるなかで、壮丁の供給源となる民間社会、とりわけ学校の体育に陸軍は強い関心を持つようになる。陸軍のこうした変化については、同年7月に開かれたある座談会で「最近、所謂健兵対策といふことがはつきりして来たから、軍が民間のやることに力も借してくれ、乗出してもくれるやうになったのですが、従来はもう絶対に、軍は軍、民間は民間で、総力戦ではなかつたのです」と指摘されている<sup>186</sup>。陸軍省兵務課長の児玉久蔵が体協参事に選出されたのは、まさにこのような時であり、スポーツ批判を繰り返りひろげる児玉の圧力で、体協は根本的な変革を迫られることになる。

1941年秋からスポーツ界再編へ向けた動きが加速し、体協にかわる総合的体育団体設立にむけ、厚生省主催で官民懇談会が開かれた。その席上、田中隆吉兵務局長は「従来の複雑にして弊害続出の各種団体を刷新、整理統合し、その組織に当つては所属団体を国家目的に強力に統制し得るとともにその指導理念を確立し国民必須の重要種目を十分に普及発達せしめること、また新団体は命令二途に出で実行機関がその方途に迷ふことのないやう、また所属団体は従来の性格のまゝ放置することなく精神、内容ともに大刷新すること」という要望を提出した<sup>187</sup>。厚生省人口局長武井群嗣によれば、この懇談会は権限縮小を恐れる文部省と、「武道団体をも併せて統合すべし」と主張していた陸軍省との間にあった厚生省が主導性を発揮すべく開いたもので、文部省に対して協力を、陸軍省に対して主張の撤回を要請したという。また、スポーツ団体側は軍の監督下に移るのを恐れていたとも証言している<sup>188</sup>。

陸軍は学校の教練や体育にも改革を迫っていた。1941年8月29日に陸軍現役将校学校配属令が改正され、大学学部における教練が必修となり、その成績は進級、卒業に影響を及ぼすこととなった。また軍司令官、師団長が学校教練の細部に関して輔導

185 「座談会」北沢清追想録刊行会『北沢清追想録』208、218-219頁、拙著『帝国日本とスポーツ』139-140頁。

186 「現代武道を語る座談会」『新武道』1巻5号、1941年8月。

187 『東京朝日新聞』1941年10月24日。

188 武井群嗣『厚生省小史：私の在勤録から』厚生問題研究会、1952年、79-80頁。大日本体育会の設立経緯については高岡裕之「大日本体育会の成立」に詳しい。

できるようになった。この改正をうけて文部省では11月に学校教練教授要目を改正した。陸軍省兵務局は学徒体育組織の改革にも関与しており、田中は学徒体育を一元化すべく大日本学徒体育振興会を設立しようとしていた文部省の懇談会のメンバーであった<sup>189</sup>。

一連の改革の結果、まず1941年12月に大日本学徒体育振興会が成立した。ついで1942年3月に大日本武徳会が改組され、新しい大日本武徳会が結成された。さらに同年4月に大日本体育会が誕生し、大日本学徒体育振興会をその下部組織とした。陸軍はこれら一連の改革のなかで、体育・スポーツ・武道界に干渉した。大日本武徳会剣道部会長に就任した木村篤太郎は、人事をめぐって田中兵務局長と激論を交わし、軍の要求を退けた。今回、大日本銃剣道振興会が武徳会に入らなかったのは、藤沼庄平によれば、「武道の本山は陸軍だというので審査は陸軍です。会はその称号の証書を出せと、兵務課長児玉大佐を通じて申し込んできた。会はこれを拒絶しました。横暴にして非常識極まるものだった」と証言している。坂上康博が指摘するように、新団体設立にあたって軍の要求がすべて採用されたわけではなかった<sup>190</sup>。

とはいえ、スポーツ界の立場は武道界に比べると圧倒的に弱かった。軍の要求にどこまで抵抗できたかは疑問である。全日本陸上競技連盟は1942年10月に大日本体育会陸上戦技部に改組され、国防技能の充実と綜合体力の錬成を二大目標とし、従来のオリンピック主義と決別した。新役員には理事として兵務課の河野省介、陸軍戸山学校の村岡安、そして師尾源蔵らを迎えることになった<sup>191</sup>。戦場運動連盟の役員として理事入りした師尾は、高度国防国家完成のためには軍政をしなくては、武道体育行政は陸海軍が掌握すべきだと、軍よりも過激な主張を持つ人物であった<sup>192</sup>。日本山岳連盟は1941年8月の理事会で人事を刷新し、参与・参事は陸軍軍人と官僚で占められることになった。さらに12月には同会は大日本体育会行軍山岳部に改編され、部会長に鈴木春松中将、副部会長に大野宜明少将が就任、このほか陸軍戸山学校の野

189 『東京朝日新聞』1941年10月29日。

190 坂上康博「武道界の戦時体制化」坂上康博・高岡裕之編『幻の東京オリンピックとその時代』。

191 『東京朝日新聞』1942年10月7日。

192 「戦局と指導者の覚悟を語る座談会」『新武道』3巻8号、1943年8月。

地嘉平、森村経太郎、兵務課の児玉久蔵、情報局の井上司朗らが準備委員として新部会の設立に関わり、「半軍事組織化」した<sup>193</sup>。

陸軍戸山学校の温品博水が「学徒体育のみならず一般体育も国運急なる傾向にあり漸次総力戦は軍事訓練に近い型のものに変わりつゝあり自分も御茶の水にある日本体育協会に少くとも一月に一回は招かれ体育界の会合に色々と話合ふ機会が増して忙しかった」と証言していることからわかる。スポーツに理解のあった温品だが、スポーツの軍事化に手を貸したのであろう。戦後の回想で「段々軍事訓練に近い型のものには残り其他は衰亡して行ったことは已むを得ないと思われる」と述べているように、1943年までに陸軍とスポーツ界の関係は緊密化していった<sup>194</sup>。

ちなみに、海軍も1941年ころから民間スポーツ界の「指導」に乗り出したようで、1941年7月2日付の官房第3619号で、海軍省軍務局第4課（海軍軍事関係団体ノ指導ニ関スルコト）が漕艇協会、ヨット協会を、教育局第1課（体育）が「大日本青少年団、大日本海洋少年団、海洋学生団、学校報国団、部外学校学徒関係団体、大日本体育協会、銃剣術振興会、武徳会、講道館、其ノ他体育団体」を指導することが確認されている<sup>195</sup>。

## B. 明治神宮大会

陸軍は海軍とともに1924年の明治神宮大会創設に、企画段階から関与していた。同大会の報告書によれば、最初の協議会にホッケー代表として陸軍戸山学校教官の大井浩が出席していた。海軍の代表は第2回、陸軍の代表は第3回協議会から出席した。会議でのやりとりを見ると、民間スポーツ界が陸海軍の積極的な参加を要望したのに対して、陸海軍側は受け身の態度に終始した<sup>196</sup>。結局、陸軍は相撲、剣道、ホッケーに、海軍は相撲、剣道、柔道、ボートに参加した。その後の大会で、陸海軍はマスメーム、水泳、スキーに参加し、射撃や馬術では施設などの面で協力をした。歴代の大会

193 西本武志『十五年戦争下の登山：研究ノート』本の泉社、2010年。

194 温品博水「我が体育歴考」。

195 『海軍公報』4227号、1941年7月3日。

196 内務省衛生局編『第一回明治神宮競技大会報告書』編者刊、1925年、13-89頁。大井については拙稿「菊と星と五輪」を参照。

役員には陸軍戸山学校長が顧問として名を連ねたほか、第6回大会以降、陸軍省軍務局、海軍省教育局、陸軍戸山学校から評議員や参与（前大会の総務委員・評議員）が出されていたことが確認できるが、積極的に関与したわけではなかった。

日中戦争開始後まもない時期に開催された1937年の第9回明治神宮大会では、騎兵第16連隊長の賀陽宮恒憲王が総裁をつとめた。賀陽宮は「現下ノ時局ニ思ヒテ致シ銃後国民トシテノ決意ヲ鞏ウシ尽忠報国ヲ神明ニ誓ヒ恒ニ其ノ覚悟ヲ以テ各人ノ職分ニ一層恪洵センコトヲ切望ス」という言葉で令旨を結んだが、明治神宮大会で戦時色や軍事色が強まったわけではなく、大会はこれまでとほぼ同じ形式で開催された<sup>197</sup>。1938年2月に挙行された冬季大会では番外競技として軍隊競走がおこなわれたものの、出場したのは予備役のものばかりで、陸軍が直接関与した形跡はない<sup>198</sup>。

1939年の第10回大会から、主催者が明治神宮体育会から厚生省に変わった。陸軍は「本務ニ支障ナキ限り勉メテ之ニ協力シ国民体位ノ向上ニ資スルコト」という姿勢に転じ、陸軍省兵務局と陸軍戸山学校は図3のような体制で明治神宮大会に臨んだ<sup>199</sup>。このほか、大会顧問に陸海軍大臣、そして新たに設置された参与に、陸軍省兵務局長、同医務局長、陸軍戸山学校、海軍省教育局長、同医務局長、海軍砲術学校長が名を連ねた。新たに大会に採用された国防競技、銃剣術には多くの陸海軍人が関わった。冬季大会のスキーも、今回は現役軍人が参加した。皇紀2600年の記念大会でもある1940年の第11回大会は、空前の規模で実施されたが、軍人の参加という点でも空前の規模であった。多数の軍人選手が参加しただけでなく、大会委員として多くの軍人が関わった。

陸海軍、とりわけ陸軍が明治神宮大会のあり方にまで口を挟むようになるのは、1941年の第12回大会からである。同年9月13日に秋季大会の実施種目が発表され、卓球、ハンドボール、重量挙げ、ホッケーが大会種目から外され、滑空訓練と行軍訓練が加わえられた。じつはこの発表の3日前に参与会が開かれ、①基礎的体力の練成

197 明治神宮体育会編『第九回明治神宮体育大会報告書』編者刊、1938年、8頁。賀陽宮が総裁就任を受諾したのは、日中戦争勃発前のことであった。

198 ホッケーには加藤真一や陸軍戸山学校の河野省介らが関わっていたが、これは日中戦争以前からそうであった。

199 JACAR: C01001779200 (2-5 画像目)。

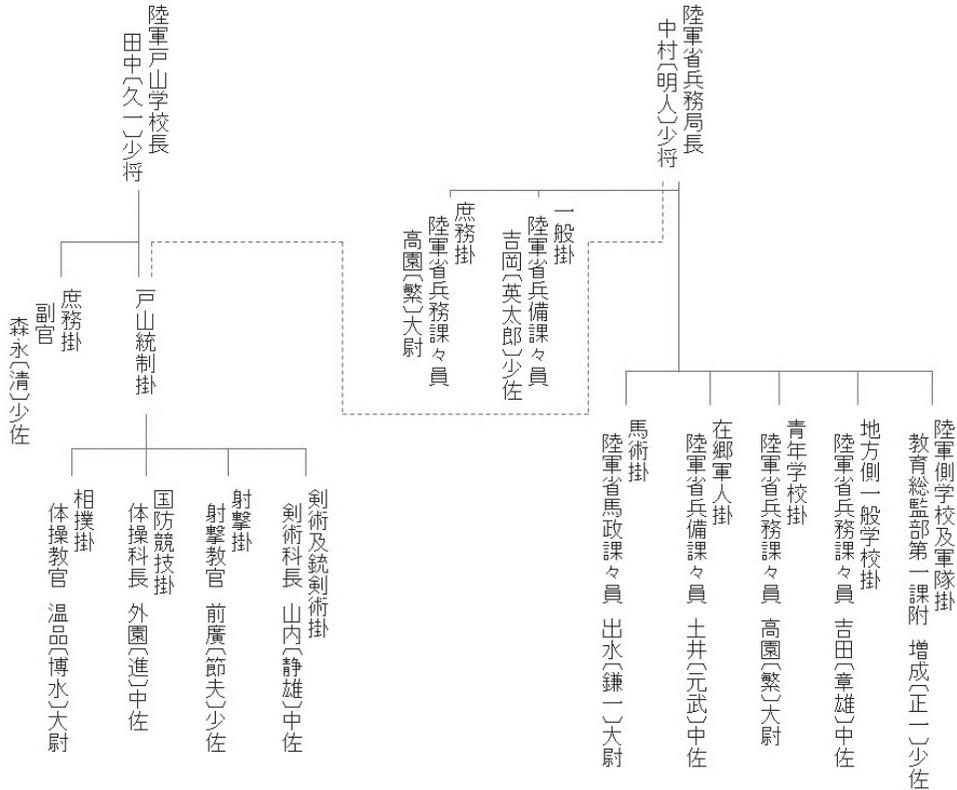


図3 明治神宮大会組織図（出典：JACAR: C01001779200）

を計ると共に国防的、訓練的種目に重点をおくこと、②広く国民各方面の体育を実施し、性、年齢、職業等の別に対し国家が奨励する体育を範示すること、③国民の間に広く普及性のあるものを考慮すること、④時局に鑑み大会期間を努めて短縮すること、⑤以上の趣旨により種目の選択は特に厳選すること、という運営方針が定められていた。これは従来からの明治神宮大会からの大きな転換であった。参与会には陸軍省兵務局長田中隆吉、海軍省教育局長徳永栄が出席しており、陸軍の意向を汲んだうえでの決定であったと推察される<sup>200</sup>。さらに今大会では、従来の顧問、参与だけでなく大会委員として陸軍報道部長、陸軍省兵務課長、同交通課長、海軍省軍務局第四課長、同教育局第一課長が加わり、より実質的に大会運営に関与するようになった<sup>201</sup>。

1943年には、東条英機首相が大東亜共栄圏をスペクタクル化するために明治神宮

200 『東京朝日新聞』1941年9月11日、9月14日。

201 厚生省編『第十二回明治神宮国民体育大会報告書』編者刊、1942年、23-26頁。

大会を利用した。東条は大東亜会議にあわせるべく、厚生省に日程をずらして開催するよう指示した。明治天皇の誕生日である11月3日を外すことに対して、大会企画担当者であった厚生省健民局の加藤橋夫が「根本精神の破壊だ」と強く反対したように、政府と軍による干渉は明治神宮大会の性格を根本から変えてしまった<sup>202</sup>。大会の企画係の名簿を見ると、加藤橋夫以下、角田市朗、森永清、村岡安、鬼束鉄夫、大迫隼夫……と陸海軍の軍人がずらりと並んでいる<sup>203</sup>。加藤自身はスポーツが独自の意義を持つと考えていたが<sup>204</sup>、森永、村岡ら陸軍の軍人はスポーツに批判的だった（後述）。結果として、この大会が武道、体操、訓練に終始し、スポーツが完全に排除されたことから、陸軍の影響力を見てとることができよう。加藤はこうした干渉に堪えられず、辞職を決意、文部省体育局訓練科長北沢清の斡旋で、東京帝大の学生主事に転出した<sup>205</sup>。

### C. ホッケー

ホッケーは陸軍戸山学校が中心となって普及したスポーツで、同校は1930年代半ばまでホッケー界をリードし続けた<sup>206</sup>。たとえば同校の関係者で組織された戸山倶楽部（大和倶楽部）は、1933年度の関東予選決勝（事実上の全日本選手権決勝であった）に進出している（慶大に0-4で敗れる）。この時のメンバーには、大寺三郎、村岡安、温品博水らがいた。1935年度は関東選手権のリーグ戦で7勝1敗1分けでクラブチーム2位の成績を収めている。同年度の大日本ホッケー協会役員は、副会長に加藤真一、名誉理事に後藤十郎、小野原誠一、野地嘉平、理事に外園進、幹事に大寺三郎と、16

202 拙著『帝国日本とスポーツ』223-230頁。

203 厚生省編『第十四回明治神宮国民錬成大会報告書』編者刊、1944年、8頁。大迫は海軍省教育局で体育を担当していた。1933年から翌年にかけて砲艦鳥羽機関長として揚子江の警備に当たっていた大迫は、あるとき長沙で岳麗大学の女子テニス部員と混合ダブルスの試合を楽しんだ。大迫はのちにこの出来事を「可愛いざかりの女の子ばかりでスポーツに国境はなくおまけに日支の感情が殊の外い、時だったのでとても好い思い出になっている」と振り返っている（『海軍同期生回想録：海軍兵学校第55期・海軍機関学校第36期・海軍経理学校第16期』二洋社、1974年、97頁）。

204 加藤橋夫「運動競技の再出発」『野球界』30巻20号、1940年10月15日。

205 加藤橋夫「文部・厚生の中」北沢清追想録刊行会『北沢清追想録』。

206 拙稿「菊と星と五輪」。

人中6人が陸軍戸山学校関係者で占められた<sup>207</sup>。

1939年春、元陸軍戸山学校教官外園進は、大日本ホッケー協会にあてて次のような便りを送った。

今次聖戦に当初より参加の光栄に浴し……ホッケーに依つて鍛へ上げし私の心身は一年有八ヶ月の間何の障もなく益々頑健御奉公に邁進致し居候へば何卒御放念下され度候、ホッケーは実に非常時日本の青壮年に最も相応しき心身鍛練の競技にして、それによつて養ひ得たる堅忍持久の心身こそ真に現下の長期戦に堪へ得るものと確信致し居候<sup>208</sup>。

外園は実戦のなかでホッケーの有用性を確認した。ホッケーを重視した陸軍戸山学校の方針は正しかったわけである。外園の便りが紹介されたのと同じ誌面で、「国防と体育」座談会の模様が報じられた。そのなかで、末弘巖太郎からホッケーについて尋ねられた陸軍戸山学校の河野毅は「あれは研究的に一つの方法と致しまして、軍隊で適当な団体競技はないかと云ふやうなことで色々やつたのですがホッケーあたりが大分よささうであると云ふので、研究的にやつたものです」と答えた<sup>209</sup>。「研究的」を繰り返す河野の口調には、外園のようなホッケーに対する確信はうかがえない。

陸軍戸山学校関係者のホッケーに対する態度の変化は、陸軍ホッケーの創始者である加藤真一の足跡をたどることで明らかになる。加藤は陸軍戸山学校を離れたあと、1928年に札幌連隊区司令部に移った。翌年には加藤の尽力で北海道ホッケー連盟が成立し、加藤は会長に就任する。春秋トーナメントの優勝チームには加藤が寄贈した「加藤旆」が贈られた<sup>210</sup>。このほか加藤は一般人に対しても「手拭体操」を推奨するなど、同地で体育の振興に尽した(図4)。加藤は1934年8月1日付で待命となり、1936年にはベルリン・オリンピックのホッケー日本代表総監督をつとめた。兵

207 廣堅太郎『日本ホッケー七十五年』編者刊、1978年、204、212頁、大日本体育協会編『大日本体育協会史』下、編者刊、1937年、1130頁。

208 『体育日本』17巻4号、1939年4月、13頁。

209 「国防と体育座談会」『体育日本』17巻4号、1939年4月。河野毅は歩兵第77旅団長としてフィリピンで終戦を迎えた。河野はカンルバン捕虜収容所で他の将校と野球を楽しんだが、マニラ軍事裁判で死刑判決を受け、日本に帰ることができなかった(山本正道『フィリピン戦の回想：一当番兵の記録』著者刊、1991年、506-510頁)。

210 北海道大学ホッケー部OB会編『北海道大学ホッケー部五十年史』編者刊、1977年、17頁。

器本廠附、地元名古屋の師団兵務部附を経て、1941年11月に教育総監部附となり、加藤は陸軍戸山学校教官に復歸した。この間、大日本ホッケー協会副会長、明治神宮大会ホッケー部顧問などをつとめ、一貫してホッケーとの関係を維持してきた加藤であったが、陸軍戸山学校に

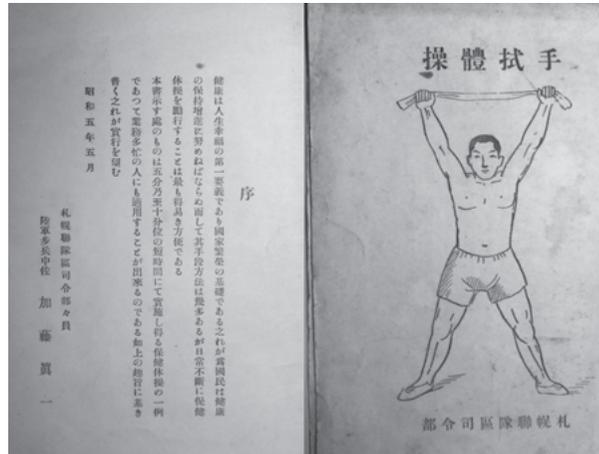


図4 手拭体操（著者所蔵）

復歸してまもなく、ある座談会で次のような発言をしている。

兎に角勝たなければ駄目だ……丈夫な兵が入つて来て、直ちに軍の要求する所謂訓練が出来たらこんな結構なことはない……従来の錬成方法では駄目だと思ふ……本当の戦は皆さんの想像以上だ……日本の強いのは統帥、軍の運用が一番<sup>ぬき</sup>抽んでゐる。その次には迫兵力、迫兵力といふのは銃剣術です。この二つしかない……一般国民として銃剣術をしつかり研究してこれで敵を圧倒する力をウントつけて戴きたい。これが世界一卓越してゐる。最近非常に銃剣術を奨励されてゐることは洵に力強いが、全面的に<sup>ママ</sup>眺るめるとこんなことではいかん。もつともつと発達させなければならん<sup>211</sup>。

ここにはホッケー推進者であった加藤の面影はない。このとき加藤が重視したのは銃剣術であった。「本当の戦」について語る加藤だが、日露戦争の直後に陸軍士官学校を卒業した加藤はおそらく実戦経験を持たない。加藤が銃剣道に打込んだのは、実戦経験がないというコンプレックスをはねのけるためだったのではなかろうか。陸軍戸山学校剣術科長であった大藪直市郎によれば、

加藤真一先生は賀陽宮校長の下、学校附大佐で勤務していられたが、元々体操専門家の大佐が、森永教官、振興会の蒲池大佐とタイアップして専ら銃剣道振興会に協力し銃剣道の振興に心魂を傾倒せられていた<sup>212</sup>。

211 「興亜教育に於ける体育文化の位置 座談会」『興亜教育』1巻12号、1941年12月。

212 大藪直市郎「回想録」鶴沢尚信編『陸軍戸山学校略史』編者刊、1969年。

皮肉なことに、「スポーツの宮様」と言われた賀陽宮恒憲王の校長在任中（1942年3月-1943年3月）、陸軍戸山学校にホッケーは存在しなかった。そして、かつてホッケー選手だった同校教官たちが、スポーツ批判を繰りひろげていたのだ。

加藤がホッケーとの関係を断ち切ったのは、ちょうどホッケーが卓球、ハンドボール、重量挙げともども明治神宮大会の実施種目から外されたのとほぼ同じ時期である。前述のとおり、この決定には陸軍の意向が反映されていた。なぜ陸軍は、これまで最も推奨してきたスポーツを外すよう要求したのだろうか。「国民の間に広く普及性のあるものを考慮すること」という基準に合致しなかっただけなのか。ホッケーだけではない。ハンドボールも陸軍と関係の深いスポーツで、『体操教範』の球戦はハンドボールをモデルとしている<sup>213</sup>。ドイツ軍がハンドボールを活用していることもよく知られていた。こうした状況を考慮するならば、陸軍がホッケーの除外を要求したのは、それによって陸軍がスポーツ全体の価値を否定していることを示そうとしたのではないか。軍隊に役立つとされてきたホッケーですら戦時中にする価値がないとするなら、他のスポーツは言わずもがなである。ホッケー除外に託された陸軍のメッセージをスポーツ界がどのように受けとめたのかはわからない。明治神宮大会から除外されたとはいえ、ホッケーそのものは存続していた。陸軍はより明瞭な形でスポーツ界に戦争への協力を求めていく。

#### D. 野球

1930年、陸軍戸山学校の外園進は、野球が1839年にダブルデー少将により考案され、複雑で変化が多く、頭脳を要し感情に富み、「投手打者の対戦は古武士の一騎打勝負を髣髴せしめ、弾丸の如き熱球は男性的痛快味を喚起」すると述べ、軍人により考案された野球の男らしさを評価した。一方で外園は、日本では多くの観衆が野球に魅了され、その感化力は非常に大きく、国家的に重視すべきものであるが、実際には競技者は虚栄心に駆られ、観衆は勝敗にとらわれ興奮に溺れており、野球の本質は見失われ、墮落するに至っている、と野球の負の側面も指摘している<sup>214</sup>。

213 拙稿「菊と星と五輪」。

214 外園進「極東選手権競技大会に就て」『偕行社記事』669号、1930年6月。

1941年7月14日、配属将校を集めて「学校教練を語る」と題する座談会が開かれた。日々学生と接する陸軍将校の野球観は次のようなものであった。

野間少佐：野球と国防競技の問題であります。野球は非常に熱中してやつてをります……悪いことをした者は必ず野球部の生徒だといふことになつてをる。それから反対に国防競技の方は、体操の先生も、兵役に関係の方は歓迎されますけれども、さうでない者は、あゝいふ無趣味のものはやれといつてもやらんわけだ、といふやうなことをいつて、生徒の好きな野球部の方に何となしに靡いてゐるやうな形で、それに賛同しない……日本がもつと国防体制を完全にとらうとするならば、野球部なんといふものは廃してしまつて、もつと権威あるところで、国防競技に専念してしまふやうな施設を設けたらどうだといふことを、私は非常に強く感ずるのであります。

森本大佐：それについては戸山学校で調査した結果を申し上げますが、われ〜はヤンキーの国技としてゐるものを何も修練する必要はないだらう、といふのが戸山学校の方針です。われ〜も野球をやつたことがあります。大体あれをやつてゐる者の体格を調査して見ますと、ピッチャーなんかでも脊柱は側彎です。みな曲つてゐる。曲がらぬ奴は有名なピッチャーではない……あれだけの人間をファンに持つて、観る者の血を沸かす、外のくだらぬものを見るよりは、心臓を昂奮させるだけの体育的効果はありますが、実際体育的な価値はあまりないとわれ〜は断定するね<sup>215</sup>。

野間秀吉少佐は足立中学校、森本辨太郎大佐は東京帝大の配属将校である。森本は1920年代前半、スポーツ全盛時代の陸軍戸山学校で教官をつとめていた。森本は手榴弾投擲に役立つ以外、野球は見るべきものはなく、より実戦的なラグビーやフットボールやホッケーに変えた方がよいとまで述べている。彼らの発言からは、野球の価値を客観的に評価しようという姿勢は感じられない。この座談会の2か月後に「より実戦的な」ホッケーが明治神宮大会の実施種目から外された。

米英との開戦後、野球の立場はいっそう悪化した。飛田穂洲によれば「学生野球に

215 「学校教練を語る配属将校座談会」『新武道』1巻6号、1941年9月。

対する弾圧の手が動き初めたのは昭和十七年の春頃だった<sup>216</sup>」陸軍戸山学校の村岡安は、1942年夏の「幻の甲子園」を観戦したときの経験を引つつ、野球についてこう論じた。

全く敵アメリカの謀略に掛つてゐるやうなものであります。銃後の生産拡充を大いにやらなければならん時に、何万人といふ人間が野球に酔つてヘタヘタに疲れて帰るといふやうな状態では生産拡充も何もあつたものでない。近頃何処の競技場に行つても出征軍人将士の武運長久の祈念、戦没英霊に対する黙祷をやつてをりますが、如何に祈念して貰つても、敵アメリカ人の発明した野球を内地で夢中になつてやつてゐる様を米鬼を相手に死闘をしてる第一線の兵隊が見たら何と思ふでありませう。又中には野球をやると手榴弾投が強くなるといふものもありますが、野球をやらん百姓出身の倅でも五六十メートルは投げるものもありませう。先般早稲田大学の野球の選手だけ集めて手榴弾を投げさせて見ましたが大概六七十メートル位です。大したことはありません<sup>217</sup>。

手榴弾投げで60-70メートルも投げれば大した記録である。また「野球をやらん百姓出身の倅」が50-60メートル投げるといふのもあまりありそうにない話である。体育の専門家であるにもかかわらず、村岡は客観的な評価をまったく放棄しているとしか思えない。このような反米を論拠とする野球廃止論は、対米戦勃発後すぐにはなく、太平洋戦線で日本軍が不利な立場に転じるなかで、徐々に高まっていった。

その端緒が、1943年1月21日の愛知県県政調査会内政部委員会による「米英撃滅体制を確立するには米国の国技とする野球のほか米英的な競技はこの際徹底的に排撃し日本古来の武道並に銃剣道を昂揚させよ」との決議、いわゆる野球排撃の決議であった<sup>218</sup>。この決議は愛知県内にとどまらず、また野球だけにとどまらず、日本における学生スポーツ終焉の烽火となった<sup>219</sup>。文部省体育局長の小笠原道生は「この際右とも左とも申したくない」と言葉を濁しつつ、種目整理は必要であり、米英的な

216 飛田穂洲『球道半世紀』博友社、1951年、148頁。

217 村岡中佐「戦力増強の体錬」『学徒体育』3巻12号、1943年12月。

218 『中部日本新聞』1944年1月22日。

219 拙著『帝国日本とスポーツ』217-223頁。

ものはやりたくなく、国民戦力培養の基礎となるべきものを選ぶのも当然の趨勢だと述べている<sup>220</sup>。決議の1週間前、愛知県内政部長山田武雄も参加した全国内政部長会議で、橋田邦彦文相は皇民錬成に主眼を置いた新学制に関する訓示をおこなった。同会議の議題には「戦時下学徒の体育訓練に関する件」「学徒体育振興団体に関する件」も挙がっていた<sup>221</sup>。このとき文部省は戦時学徒体育訓練実施要綱を作成中であり、3月末に通達された同要綱は学徒が重点を置くべき訓練種目を示し、球技に関しては「闘球其他適切ナルモノ」と規定し、ラグビー以外の球技を暗黙裡に否定した<sup>222</sup>。こうした状況を考えると、山田内政部長は文部省の意向を汲み、それを先取りする形で野球排撃の決議をしたのであろう<sup>223</sup>。のちに文部省体育局振興課長北沢清が愛知県に赴いたさい、山田内政部長に真意を尋ねたところ、報道されているように米国で生まれたから野球を排撃するというのではなく、「野球をやつてゐる者も戦力増強といふ見地、また米英撃滅といふ建前から、この際自発的に野球は遠慮をするやうに考へるべきだ」ということで、北沢も「全く同感」としている<sup>224</sup>。山田内政部長と文部省の見解に違いはなかった。愛知県の決議がなかったとしても、野球排撃はもはや避けられない趨勢だった。一県の内政部長委員会による決議がかくも大々的に取り上げられたのも、いよいよ来るべきものがきたと感じられたからであろう。『高松宮日記』によれば、この決議にはスポーツ界と関係の深い陸軍軍人が関与していた。

愛知県で、野球、蹴球等々と米英の「スポーツ」を学校から閉め出して今後やらぬことに決めたと新聞に出てゐた。聞けば加藤真一少将が連隊区司令官とかになつて行つて云ひ出して、山田〔武雄〕内政部長とかがすぐ賛成する「たち」の人なれば、そのためだらう。銃剣術、剣柔道で代へるのだとか。それにしても軽率なる記事である<sup>225</sup>。

220 『東京朝日新聞』1943年1月22日。

221 『東京朝日新聞』1943年1月16日。

222 拙著『帝国日本とスポーツ』217-219頁。

223 山田はかねてから銃剣道を提唱していた（『中部日本新聞』1943年1月16日）。

224 「『戦時学徒体育訓練実施要綱』を中心に文部当局に訊く（座談会）」『学徒体育』18巻6号、1944年6月。

225 高松宮宣仁親王『高松宮日記』6巻、中央公論社、1995年、63-64頁。

高松宮の情報源は不明であるが、この前後の加藤の言動と決議の内容をみれば、加藤が決議に関与したとしてもけっしておかしくはない。加藤は1942年12月1日付で名古屋連隊区司令官となるが、それまで陸軍戸山学校で銃剣道に傾倒していたことは先述したとおりである。陸軍でスポーツを最もよく理解したはずの人物が、スポーツを排撃する契機をつくることになったわけである。加藤は名古屋でも銃剣道振興に尽力し、「司令官就任以来ここに一年、郷軍名古屋支部長としても鮮やかな陣頭指揮ぶりを発揮して中京地方に銃剣道熱を燃えあがらせ民間体育の決戦調につくしたことは有名である」と評された<sup>226</sup>。この間、第43師団長として名古屋にやってきたのが、皮肉にも野球好きの賀陽宮恒憲王であった。

戦時学徒体育訓練実施要綱で学生のスポーツを大幅に制限した文部省は、ついで東京六大学野球リーグの解散を企てる。これに対して、東京大学野球連盟理事の飛田穂洲と藤田信男は、陸軍省兵務課長児玉久蔵に「軍部や文部省の野球に対する仕打ちは、多数の野球ファンに不快の念を与えている。反省して欲しい」と申し入れた。児玉は「軍は野球を排撃していないが、文部省のことは知らない」と矛先をかわし、「自分も少年時代に野球をやり、いわば同じ穴のむじなである。ただ、今は軍部に協力してほしい」と要請した<sup>227</sup>。もちろん、陸軍が文部省のことを知らないわけではない。ただ、大谷武一が「学校当事者は、この如き球技を以て、学校教育の破壊者と看做して内心これを嫌悪し、表面的には僅かにこれを敬遠する態度を持してゐるわけである」と指摘したように、学生スポーツの排除を求めたのは、陸軍や文部省だけではなかった<sup>228</sup>。1940年8月末に文部省が報国団体組織を指示するや、東北、北陸、信州、北関東の中学校で野球をはじめ運動競技を廃止するものが続出したという<sup>229</sup>。宇野庄治は学校当局が文部省の趣旨を曲解したのではないかと推測しているが、陸軍の「弾圧」や文部省の指示を待つまでもなく、学生スポーツはすでに存亡の危機に立たされていたのである。多くの野球部は1943年で活動を終えた。盛岡中学校の桜小路善治によれば、

226 『中部日本新聞』1944年1月8日。

227 飛田によれば、六大学リーグ解散にまつわる情報は1942年秋頃から耳に入り始めていたという（飛田穂洲『球道半世紀』151-152頁）

228 大谷武一「スポーツに日本の性格を与へよ」『学徒体育』2巻3号、1942年3月。

229 宇野庄治「体育暦」『新武道』1巻4号、1941年7月。

対外試合が禁止になったあとも、野球部はあったし、ボールも握っていた。桜小路が1944年3月に卒業したときにも、5年生7名が部員として登録されていた。1944年5月1日に文部省が「野球部とか庭球部とかの旧体制は依然として一部に残つてゐるのでこれらを一括清算」せよと通牒を發したのは、盛岡中学校のような事例がほかにも存在したからであろう<sup>230</sup>。

陸軍省兵務局が中心となったスポーツ界への干渉と違って、プロ野球への干渉は主として陸軍報道部を通してなされた。このことは、プロ野球が映画や音楽と同じく娯楽として統制の対象となったことを示している。プロ野球を統括する日本野球連盟の理事長であった鈴木龍二によれば、連盟は1940年に時局に対応するため自主的にプロ野球の日本化をおこなった。具体的には、引き分け試合の廃止、日本語の使用などである。陸軍の干渉は1942年ころから始まった。鈴木は陸軍報道部の山内一郎から、引き分け試合の廃止とアルファーツきの試合の廃止を「命令調で言われた<sup>231</sup>」。勝負がつくまで、そして負けるとわかった場合でも最後まで戦うこと、これが山内の求めた日本精神であった。さらに1943年にふたたび山内から呼び出しがあり、いまだ日本語化されていなかった「ストライク」「ボール」などの用語をすべて日本語化するように求められた。強制するわけではない、とのことであったが、鈴木によれば、「半ば命令と受け取れるニュアンス」であった<sup>232</sup>。その結果、ストライクを正球(審判は「ヨシー本」)、セーフを安全(審判は「よし」)などに変え、4月3日の公式戦から実施した。将来の幹部候補とみなされた学生と違い、プロ野球選手は陸軍にとってさほど重要な存在ではなかった。いきおい、プロ野球に対する圧力も、学生野球ほど強くはなかった。学生野球がほぼ消滅したあとも、プロ野球は細々と続けられた。高津勝が「プロ野球は、学生野球と異なり、最終的には、「弾圧」ではなく、兵役や軍需産業への徴用と思想統制、いわば戦時動員体制の強化にともなう「兵糧攻め」に屈した」と指摘

230 盛岡一高野球部創設百周年記念誌編集委員会編『白聖熱球譜：盛岡一高野球部創設百周年記念誌』盛岡一高野球部後援会、1999年、79頁、中村哲也『学生野球憲章となほにか：自治から見る日本野球史』青弓社、2010年、93-104頁、中村哲也・功刀俊雄「学生野球の国家統制と自治：戦時下の飛田穂洲」坂上康博・高岡裕之編『幻の東京オリンピックとその時代』。

231 鈴木龍二『鈴木龍二回顧録』124頁。

232 鈴木龍二『鈴木龍二回顧録』131-132頁。

するように、プロ野球はそれ自身に対する弾圧により消滅したのではなかった<sup>233</sup>。

## E. ラグビー

学生野球の父、飛田穂洲が「軍部を背景とした文部省は、海軍部内等で行われていた蹴球、ラグビー等にこそ干渉の手を拡げなかつたけれども、軍部に何等関係を持たぬ野球、庭球に対しては頗る強硬の態度を示しつつあつた」と語っているように、戦時下のスポーツでラグビーは特殊な地位にあった<sup>234</sup>。実際、戦時学徒体育訓練実施要綱で訓練種目として具体的に示された球技はラグビーだけだった（海軍への配慮だろう）。とはいえ、陸軍はけっしてラグビーに干渉しなかったわけではない。

1942年9月のこと、朝日新聞社運動部長のもとに、早大ラグビー部の後輩が相談に訪れ、ずいぶん迷った様子でこう尋ねた。

方々でいろんな話しを聞くが、どうもラグビーは英国の競技だから、国家として好んでゐないのではないか。殊に軍部あたりは非常に反対なのではないか、われわれが今やつてをすることは反国策的なことをやつてをるのではないか<sup>235</sup>。

ここには飛田の言うようなラグビーの特権的な地位は微塵も感じられない。こうした不安を耳にしてか、文部省体育局運動課長北沢清は、1943年1月におこなわれた文部省・大日本学徒体育振興会共催の全国中等ならびに専門学校ラグビー蹴球大会の開会式で、「現在いまだその一部において外来競技は、すべてこれを禁止すべしなどの意見は絶えないのにたいし、当局の方策を明確にした上、選手に堂々と、しかも自信をもつて競技を行へよ、さうすることこそ御国への御奉公でもあると激励」したのである<sup>236</sup>。この大会で準優勝した福岡中学の副将久羽博によれば「引率者は軍事教官の石蔵中尉、大会参加章は突撃する兵隊のメダルに“選士章”と書いた布がつけてあった<sup>237</sup>」。選士を兵士と、またラグビーの試合を戦争と重ねあわせることで、ようやく試合の存在意義を担保することができた。

233 高津勝『日本近代スポーツ史の底流』創文企画、1994年、329頁。

234 飛田穂洲編『早稲田大学野球部五十年史』早稲田大学野球部、1950年、463-464頁。

235 「報道の転換と学徒体育を語る」『学徒体育』3巻3号、1943年3月。

236 『東京朝日新聞』1943年1月13日。

237 池口康雄『近代ラグビー百年』ベースボール・マガジン社、1981年、203頁。

西野綱三が陸軍戸山学校に呼び出されたのは、ちょうどこのころと思われる。

突然陸軍戸山学校から、ラグビー協会〔正しくは大日本体育会ラグビー部会〕の規約書を持って出頭するよう電話があった。なにごとかといふかりながら指定の日時に出かけると、私を待っていた将校は、早速持参した規約書をバラバラとめくり、ラグビー協会の目的及びその事業の項を特に指差し、ラグビー協会は戦争に協力していると思えない。もしラグビーの存続を考えるなら、書き改めてもう一度出直すよう言い渡された<sup>238</sup>。

西野に対応した将校は村岡安ではなかったろうか。スポーツ界に顔の広い西野ゆえ、村岡を知らなかったはずはない。また2人はともに1月末に体育調査委員に就任している。ここではあえて名前を出さなかったのだろう。のちに村岡はラグビーについて「猛烈で敢闘精神を錬り好い運動であると云ふけれ共、之れに依つて錬磨せらるゝ体力精神力の錬成は他のもので出来ない訳ではありません」と述べている<sup>239</sup>。最も戦争に役立つスポーツとされたラグビーでさえ、この程度の評価でしかなかったのだ。

西野は大日本体育会理事長郷隆にも呼び出され、戦時下体育の第一着手としてラグビーの邦訳を考えてほしいと告げられた。そこで大日本体育会ラグビー部会は2月2日の役員会で「決戦下真に日本的な球技を創造するといつた建前から、従来のラグビー競技規則に根本的な再検討を加へ、ラグビーといふ名称を邦語化し、さらに団体的戦闘要素の錬成、滅私挺身、果敢即決などラグビーの持つ長所をあくまで生かす」という方針を決定した。ラグビーの邦語化については、ラグビー部会は「戦闘球」という訳語を提示した。これに対して郷は「戦時下のスポーツをラグビーが、ひとり占めするよなものだ」として、「闘球」に圧縮するよう意見した。「闘球」は土浦海軍航空隊がラグビーをもとに考案した新競技の名称としてすでに使っており、同隊の了承を得たうえでの決定だった<sup>240</sup>。さらにルールも改められた。前述したように、翌年には海軍機関学校で新ルールが使われていた。

4月11日、陸軍戸山学校に都下5大学の闘球部の最高学年選手約50名が集まり、

238 西野綱三「闘球の命名」郷隆追想録編集委員会編『郷隆』郷隆追想録刊行会、1975年。

239 村岡中佐「戦力増強の体錬」『学徒体育』18巻12号、1943年12月。

240 西野綱三「闘球の命名」、『東京朝日新聞』1943年2月4日、3月6日

銃剣術の訓練を受けた。彼らは9月まで、日曜ごとに射撃や総合戦技の訓練を受けることになっていた<sup>241</sup>。半年繰り上げで9月に卒業した慶大ラグビー部の選手のうち、7名が海軍、1名が陸軍に志願し、海軍の4名と陸軍の1名が飛行機乗りの道をめざした<sup>242</sup>。闘球は優遇されていた分、他の競技以上に軍への協力姿勢を明確にする必要があった。

1943年10月16日、早稲田の戸塚球場で最後の早慶戦がおこなわれていたちょうどそのとき、明治神宮外苑競技場で出陣学徒闘球錬成会が開かれていた。こちらには都下大学高専15校の選手約250名が参加し、文部省体育局の北沢清も出席した<sup>243</sup>。新聞記事としては野球の早慶戦に後塵を拝したが、文部省当局が期待を寄せたのは明らかに闘球であった。11月23日には闘球の早慶戦がおこなわれたが、明治神宮外苑球場が使用できたことから、優遇ぶりがうかがえる<sup>244</sup>。慶應の学徒出陣組は5名が海軍（うち3名が飛行予備学生）、1名が陸軍に進んだ<sup>245</sup>。しかし、スポーツ界の頼みの綱であった闘球も長くは続かなかった。

三高では1943年5月1日の記念祭で、蹴球部（ラグビー）以外のすべての球技部が閉部式をおこない、蹴球部は闘球班と名を変えて存続した。1943年度は春に京都帝大と大阪高等学校、秋に大高、浪速高等学校、同志社大と対戦した。12月24日に予定されていた伝統の対慶大戦は、文部省が許可しなかったため実現しなかった。1944年5月に3年生が引退、同月19日の同志社高商戦が最後の試合となり、22日から大阪兵器工廠で勤労働員に従事した。残る2年生も8月下旬から勤労働員で三高を離れるが、それまでの間、京都市立第一商業学校、京都府立第三中学校と練習試合をした。9月からは1年生がようやく確保したボールで練習を続けたが、もはや試合はできない状況であった<sup>246</sup>。

241 『東京朝日新聞』1943年4月12日。

242 慶應義塾体育会蹴球部黒黄会編『慶應義塾体育会蹴球部百年史』慶應義塾大学出版会、2000年、271頁。

243 『東京朝日新聞』1943年10月17日。

244 『読売新聞』1943年11月24日。

245 慶應義塾体育会蹴球部黒黄会編『慶應義塾体育会蹴球部百年史』271頁。

246 第三高等学校蹴球部史刊行会編『三高蹴球部史』編者刊、1984年、96-99頁。『東京朝日新聞』では出陣学徒闘球錬成大会を報じた10月17日、『読売新聞』では12月6日を最後にラグビー

浦和高等学校では、1943年1月にホッケー、バレーボール、卓球、陸上競技、庭球部が廃止された。「廃止」といっても、予算をなくし、新入生も入れさせないが、続けたければ続けてもよいということで、2年生は6月まで活動を続けた。一方、1年生は、新2年生になった4月に海洋班を組織した。海軍がバレーボールをやっているから、海洋を名乗ればなんとかバレーボールを続けられるのではないかと考えたからである。しかし実際にはそううまくはいかなかった。ラグビー部は「海軍がやっているから残った」ものの、1943年5月の第一高等学校との試合が最後の試合となった。7月に「闘球部」と名を改めるが、11月には廃止となり、部員は航空班と海洋班に入った。1944年4月に入学した山本精は海洋班に入ったが、そこでは月・水・金に水泳、火・木・土にラグビーがおこなわれていた。6月には航空班との試合がおこなわれた。12月には1、2年生送別ラグビー試合がおこなわれ、これが最後の試合となった。1945年3月には全員が勤労働員にかり出され、班活動は中止となった<sup>247</sup>。このほか、成蹊高等学校と成城高等学校が1944年12月にラグビーの試合をしており、『近代ラグビー百年』はこれを「戦時下最後のゲーム」とみなしている。

大学のラグビー部は高校よりも早く活動を停止していた。東京帝大は1943年10月19日の対京都帝大戦が最後の試合となった。翌年には部員は2、3名となり、「ユニフォームを着て、御殿下グラウンドで走り出したものだが、たちまち空襲警報で、そのままグラウンド脇の防空壕で解除迄待つ」というような状態だった。早稲田大学ラグビー蹴球部は1944年3月で活動を終えている<sup>248</sup>。

## 第5節 体育方針

日中戦争が勃発して1か月半後の1937年8月25日、陸軍は1940年に予定されて

---

の記事はなくなった。

247 旧制浦和高等学校ラグビー蹴球部瑤砂クラブラグビー部史編集委員会編『旧制浦和高等学校ラグビー蹴球部部史』編者刊、1978年、旧制浦和高等学校同窓会編『浦和高等学校史』旧制浦和高等学校創立七十周年記念事業、1992年、旧制浦和高等学校海洋班の集い海洋班史編集委員会編『旧制浦和高等学校海洋班史：その生い立ちと歩み』編者刊、2003年。

248 濱田博也「戦時下の二十五番教室で、「風と共に去りぬ」をみる」回想の東大ラグビー編集委員会編『回想の東大ラグビー』、池口康雄『近代ラグビー百年』203-204頁。

いた東京オリンピック馬術競技への参加準備を中止することを発表した。1938年3月7日の衆議院国家総動員法案委員会でオリンピックについて質問された杉山元陸相は、「事変がオリンピック開催までにすむことがあるかも知れぬしすまぬかも知れぬ、オリンピック開催決定当時考へているたやうな大規模に非ずして分相応のものならばやつてもよいと思ふ……重大な事変が勃発すれば直にやめる」と答えた<sup>249</sup>。この発言は海外で大きな反響を呼び、オリンピック準備委員会は火消しに奔走しなければならなかった。陸軍はオリンピックの開催を積極的に支持したわけではなかったが、さりとしてこれを中止するよう圧力を加えたわけでもなかった。戦時下の民間スポーツ界に圧力をかけたのは、むしろ軍以外の人たちであった。

1938年2月8日、衆議院に「文部省に武道局または武道課を新設する件」「明治神宮外苑に国費を以て武道殿を建設する件」を提出した藤生安太郎は、武道の改革を訴える一方で、激しいスポーツ批判を繰り返していた。藤生によれば、スポーツは語源からして娯楽、行楽、遊戯であつて、そこに附された精神的な価値も非国家的、個人主義的なものでしかない。国策で求められている精神鍛錬、体位向上という点からすれば、武道により多くの価値があり、「興味中心の個人主義的体育」から「修行本位の国家主義的体育」に全国民を動員すべきである。戦時下に対応すべく、スポーツを武道化せよとの声もあるが、それは

牽強付会の企図であつて、所詮は断髪ハイヒールの西洋陶酔婦人に剣舞を演ぜしめて、古武士の風格を偲ばんとする愚に過ぎない、と。若し夫れ、武道をスポーツ化せんとするに至つては誅滅に値する。スポーツの誇るフェアプレイなるもの、対象とする所は、衆人の歓声であり観客の拍手感激であり、又時に観覧婦人よりのキスの投与である……武士若くは兵と称呼する代りにスポーツマンを以て、武士道の代りにスポーツマンシップを以てして、果して国威の維持発揚が出来るであらうか<sup>250</sup>。

藤生にとって、武道とスポーツ、武士とスポーツマンはまったく相容れないものであった。ドイツはスポーツを奨励しているが、「戦敗国の汚名を持つドイツ」に学ぶ必要

249 『東京朝日新聞』1938年3月9日。

250 藤生安太郎『四股を踏んで国策へ』大日本清風会、1938年。

はなく、「寧ろドイツこそ吾を学ぶべき」なのである。日本の軍人はあくまで日本精神を持つ武士でなくてはならない。西洋婦人、断髪、ハイヒール、キス、そしてスポーツは、日本軍人の男らしさの対極に位置づけられた。モッセのいう「対抗的タイプ」である<sup>251</sup>。理想的な男らしさは、対抗的タイプと対照されることでしか成立しえない。スポーツは外来性、娯楽性という徴を附与され、日本軍人の男らしさを際立たせる道具でしかなかったわけである。

では当時の陸軍はスポーツに対してどのように考えていたのだろうか。1938年12月に『東京日日新聞』に掲載された「大寺少佐の陣中体験」は、日中戦争勃発後に陸軍軍人がスポーツについてまとめた考えを述べた事例としては、比較的早い部類に属する。この記事は東京日日新聞の記者が大寺三郎少佐に面談して書かれたものである。大寺は火野葦平『麦と兵隊』にも2度ばかり名前が出てくる軍人で、中国での戦闘で負傷し、日本の陸軍病院で療養中であった。大寺は1926年以来、陸軍戸山学校教官をつとめ、ホッケー選手としても活躍した人物である。大寺はまず「運動競技を経験したものが戦場に立つた場合、偉大なる能力を発揮しつゝある事実はいまさら事新しく取立て、強調する必要がないくらゐだ」と述べ、戦時におけるスポーツの価値を肯定したうえで、最も必要なのは持久力、そして運搬力、投擲力で、長距離の早駈や行軍、水泳、剣術、銃剣術が有効であると指摘した。また、運動競技では機敏持久と団体動作に重点を置く「ラグビー、蹴球、ホッケー、籠球」が重要だが、日本精神に基づく国内試合規則をつくってもよいではないかと提案する。さらに、中国の軍人の体力は侮るべからざるものがあり、国民全体が心身鍛練に励む必要があるとも述べている<sup>252</sup>。

1939年3月6日、体協と陸軍戸山学校、陸軍省兵備課の関係者が「国防と体育」をテーマに座談会を開いた<sup>253</sup>。スポーツは実戦に役立つかという点について、陸軍戸山学校の野副昌徳は、「何か特有の技能のある人は嘗て自分のやつて居つた事のある競技種目に類似の場面に於て、得意の働を為し得るといふ事は争はれぬ事実でありますか

251 ジョージ・L・モッセ『男のイメージ：男性性の創造と近代社会』作品社、2005年、20-21頁。

252 「大寺少佐の陣中体験」『東京日日新聞』1938年12月6、7日。

253 「国防と体育座談会」『体育日本』17巻4号、1939年4月。

ら成るべく体育運動を盛にやつた方が宜いと云ふことになります」とスポーツの価値を認めている。野副は歩兵第55連隊長として広東攻略戦に参加し、前年12月に帰国したばかりであり、実体験に基づいた発言と見なすことができよう。ついで指導精神が話題となり、陸軍省兵備課の友森清晴は「現在では直接時局に役立つ体育といふ事にならねばならぬ。時局について行くのではなくて時局に先行しなければならぬ」と時局との関係を強調した。さらにいかなる種目を実施すべきかという問題に関して、体協報道部幹事の北沢清は「従来からの陸上競技や水上競技其の他ボールを中心とする団体競技、若しくはスキー、スケートを初め陸軍体操教範にも採り上げられてゐるバスケットボール等があるわけです。従つてこれ等の運動種目のうち何が国防能力に資する点が多いか具体的に承はつて、不足の点は我々としても大いに補整し、長所は大いに助長して行きたいと思ひます」と陸軍側の意見を求めた。おそらくこれは今回の座談会でスポーツ界側が最も聞きたかった問題であろう。陸軍戸山学校の森桂は「ラグビーや蹴球、バスケット或はホッケー等精神的方面を良く考へて指導したならば、戦場に於て必要な企図心、独断専行或は協同連繫、敢為、犠牲等の大事な徳目や瞬間的の判断に伴ふ軽捷機敏な活動力を養成する上にいゝ団体競技と考へます。又手榴弾を投げる力をつくるために野球の投げる動作も結構と思ひます」と述べ、野球の価値をも肯定した。ここで興味深いのは、体協理事長の末弘巖太郎が陸軍が奨励する剣道について、「恐くもなし痛くもない剣道」で役に立つのかと疑問を投げかけていることで、陸軍戸山学校の河野毅は「余り痛いことをやると却つて精神が萎縮する」と、いささか苦しい弁明を強いられている。陸軍側からスポーツ界への改善要求として、兵備課の土井元武は個人本位、興味本位が多いことを挙げ、陸軍戸山学校の河野毅は種目の整理とルールの日本化を挙げた。ルールの問題は、大寺少佐も挙げていたように、陸軍にとってはスポーツの日本化の大きな指標であった。そして、実際に陸上競技や水泳はオリンピック主義との決別という形で、国防力増強のため独自の種目を採用することになる。しかし、複雑なルールで成立する球技の場合、事はそれほど簡単ではなく、用語の日本語化には応じたが、ルールの日本化は遅々として進まなかった。それが陸軍をいっそう苛立たせることになったのは言うまでもない。1943年になって陸軍がラグビーに圧力をかけたのは、土浦海軍航空隊の闘球という先例があったか

らであろうし、またラグビーだけがルールを変えてでも存続する価値があると認めていたからでもあっただろう。ルールに対する陸軍のこだわりは、『体操教範』にスポーツを取り入れるさいにも見られた。海軍が民間のルールを適用していたのに対して、陸軍は民間のスポーツをアレンジして、独自のスポーツを創案していた<sup>254</sup>。

とはいえ、日中戦争がはじまってまもない時期、陸軍はスポーツの価値を基本的には認めていた。こうした陸軍の姿勢に変化があらわれるのは、前節で論じたように1941年の春から夏にかけてであり、とりわけ陸軍省兵務課長児玉久蔵が体協参事に就任した1941年6月以降のことである。同年8月末、児玉は「青年の体力修練に就て」という論文を『東京朝日新聞』に発表した。児玉はスポーツ界の現況について、一部の選手が関わるだけで、体力の向上を必要とする大多数の青年は閑却されていると苦言を呈し、さらに種目について「取捨判別することなく世界各国の有ゆる運動を輸入し、然も外国人の性格そのまゝにて輸入し、日本人的性格の陶冶に缺くところあり……堂々たる青年男子にして恰も婦女子乃至は老人向きの運動を練習し得々たるものあるが如きは、尤も恥づべき所ならずや」と批判した。青年は国民皆兵の本義に則り、「軍事の要求に適應する基礎的体力の養成に邁進」すべきである。軍事の要求するものとは、体力章検定の種目であり、くわえて相撲、柔道、遊泳、銃剣道、射撃であった。野球などの運動競技は、たとえそれらに長じていても、「青年必須の能力に缺く所あらんか、国家の要望する青年といふを得ざる可」しと一蹴された。こうして児玉はスポーツ界が恐れていた種目整理に賛成し、しかも体協が管轄するほとんどのスポーツの価値を否定してしまったのだ。兵務局からすれば、入営前の青年に軍隊教育を受けるのに必要な最低限の体力、すなわち小泉親彦の定義に言う、体格、作業力、精神力をつけさせるのが最小限の要求であった。兵務局、そして兵務課は、直接戦争に役立つかどうかという基準で、スポーツ界の再編を要求していくことになる。

児玉は1942年8月15日にラジオ放送で「国防と国民体力の錬成」と題する講演をおこない、ふたたびスポーツを批判した<sup>255</sup>。児玉は、スポーツが「職業的一部の選手」に限られており、また「体力修練の目標は剛健なる心身を育成鍛練して各々分に応じて

254 拙稿「菊と星と五輪」。

255 『東京朝日新聞』1942年8月16日。

献身奉公の誠を致すにある」にもかかわらず、欧米の自由主義にかぶれてスポーツは個人の趣味から出発すべしとか、スポーツに国境はないとか言って興味的娯乐的になり、精神的に墮落していると批判した。兒玉によれば、体育運動そのものは「武的」な起源を持つが、近世米英のスポーツが興味娯楽から発達し、その結果スポーツ化されて墮落したのだ。日本人であれば、まず武道（銃剣道、射撃、相撲など）、游泳、戦場運動（1941年12月に大日本学徒体育振興会が設立されたとき、「国防競技」は「戦場運動」に改称）、登山、山野跋涉、スキーなどに取り組むべきで、「日本人必須の種目の演練を怠りこれらの娯乐的のものを重点として没頭してゐる如きに至つては本末転倒の甚しい」。兒玉はスポーツ＝娯楽とみなし、それでは日本精神を養成できないと考えていた。そうだとすれば、スポーツを日本化し、訓練として実施すればどうか。実際にスポーツ界はそのように主張するが、この点に関して陸軍はどう考えていたのか。

1940年11月28日、陸軍戸山学校は運動の一流選手を集めて、体力章検定種目をおこなわせた。『東京日日新聞』はその結果について、「流石は精鋭揃ひ」と評価した。級外甲が1名いたものの、のこり29名は全員初級以上であり、上級が3名（スキー、野球、体操）もいたからである。しかし当初から陸軍は不満であった。陸軍戸山学校の外園進は、一般の検定会に比べると申し分ないとしながらも、種目間のばらつきが大きい点、とくに手榴弾、重量運搬の不振を指摘していた<sup>256</sup>。実際、体験した選手たちも従来の訓練の偏りを痛感していた。たとえばテニスの選手は肩をこわすのを恐れて懸垂は一度もやったことがなかったし、スリ足ばかりやっている剣道の選手は2000m走で足があがらなかったという具合である<sup>257</sup>。

1943年になると、軍関係者はこの調査を取り上げてスポーツの有用性を問題にした。たとえば陸軍戸山学校の村岡安はこの調査をもとにして次のように論じる。

軍隊に於て、スポーツは盛んになつたが兵の体力は少しも向上しないではないか、寧ろ昔の兵隊より弱くなつたと云ふ事を、屢々耳にした。……兵の間に相当

256 『東京日日新聞』1940年11月29日。外園は『国防競技の話』日黒書店、1942年で、在来の運動競技は「自由主義であり、個人主義であつて、国防国家の建設といふことから考へると、甚だ物足りないものがある」と、時局下の運動競技は「皇道翼賛の精神に基き、国家の公器として我が身体を完成し、これを君国に献げ奉る皇道体育でなくてはならぬ」と述べている。

257 『東京日日新聞』1940年11月30日、12月2日。

スポーツは普及されては来たが、演習場裡に於ける状態から見て、体力は殆んど向上されたとは思はれない、寧ろ低下したと見られました。そうして体力優秀なる兵はいつの時代に於ても農村出身者でありました。稀には運動選手の中にも居りました<sup>258</sup>。

村岡は、特別優秀な身体的素質を持った者が数年かけて猛鍛錬を行った結果にしては貧弱な成績であるとして、スポーツは軍隊に必要な体力の向上にほとんど寄与せず、「今後は従来の各種運動の総合体力錬成上の価値を検討して無益な運動は整理する必要がある」との結論を導くのである。体力の低下は、スポーツの問題というよりも、むしろかつてであれば門前払いされていたような体格の持ち主まで軍隊に入るようになっていたことに主たる原因がある。それに、開戦以来、軍は武道を奨励してきたはずで、それでもやはり体力が向上しなかったということは、スポーツより武道に責任があると見るべきではないか。この点について、児玉兵務課長は同じく1940年の調査をもとにして次のように説明している。

先年戸山学校に於て行つた一流学生選手の体力検定に於て、その半数以上が初級以上にも達することが出来なかつた事実に顧みても、いかに錬成が永年に亘つても、一種目の訓練では体力の養成に十分でないことが理解されるのである。目下軍隊に於ては健兵対策上、入営兵中の虚弱者を集め、特別の教育を施してゐる部隊が多数ある。その某部隊に於ては虚弱者の約半数が、かつての選手の経歴を有するものであり、又某部隊に於ては選手の経歴を有するもの、中、二割強が虚弱者の中に入つてゐるのであつて、しかもその比率は中等学校以上の選手に多く、運動選手以外の虚弱者の約二倍に当る比率となつてゐるのである<sup>259</sup>。

児玉が挙げた数字がなにに依拠するのかは不明である。体力検定の結果も明らかに誤っている。だが、児玉が言わんとするところは明白である。スポーツは錬成の役に立たないのだ。ならば、青少年はなにをすべきか。児玉は体操と体力章検定、戦場運動、行軍、国防スキー、滑空機訓練、武道としては銃剣道と射撃を推奨する。前年夏のラジオ放送と比べてみると、あれほど軍が重視していた剣道がないことに気づく。

258 村岡安「戦争と体育」『体育日本』21巻1号、1943年1月。

259 児玉久蔵「戦時武道体育に対する要望」『新武道』3巻3号、1943年3月。

陸軍は板の間の剣道、畳の上の柔道を激しく批判し、より実戦に役立つ武道に改めることを要求していた。1941年に創刊された『新武道』は、高度国防国家という時代的要請のなか、武道の新体制を確立することをめざした。1943年3月号から同誌は兵務局の指導を受けることになり<sup>260</sup>、那須義雄ら兵務局関係者の論説が冒頭を飾るようになる。そこで主張されたことは、突き詰めて言えば、新武道とは軍事訓練にほかならず、より具体的には銃剣道、射撃、そして体力章検定種目であった。こうして従来の武道の中心であった剣道と柔道は後景に退くことになる。であれば、スポーツ界がどれだけスポーツ自体の有用性を強調しても、戦時の限られた時間と資源のなかで、直接戦争に役立つ銃剣道や射撃に優先されるということはある得なかった。戦況にまだ余裕がある間は、スポーツのもたらず間接的な効果に期待することができた。しかし、戦況が逼迫し、今日明日のことが最優先されねばならない状況にあって、陸軍はより直接的な効果に頼らざるをえなくなる。陸軍は戦時の要請という論理によって、スポーツへの干渉を正当化していった。1941年12月に陸軍戸山学校の森永清はこう論じた。

若し、戦争などあり得ない泰平無事な時代であれば、……野球、庭球、排球、卓球、柔道、その他竹刀をもつてする道場剣術等の各種運動競技等は、みなそれぞれ特徴があり、一概に排斥すべきものではなく、寧ろ各人の好みに委せ、暢然と思ふ存分に満足する迄精進させれば、その効果も多く、また国家的にも裨益するところも少ないであらう。……「戦争に勝つ為の一切の準備、一切の力」となるものが、即ち国の政治であり、外交であり、経済であり、事業であり、国民の日常生活でなければならない。従つて、戦争に勝つことを直接目的としない、見物本位、趣味本位、歓楽本位の体育や武道は、この際遠慮すべきである<sup>261</sup>。

森永はスポーツにも価値があることを認めてはいるが、戦時には「遠慮すべき」なのである。

一連の陸軍軍人によるスポーツ批判は、国民全体にはではなく、「堂々たる男子」「国家の要望する青年」、とりわけ学生に向けられたものであった。1943年10月、東京

260 「配属将校教練振興座談会」『新武道』3巻9号、1943年9月。

261 森永清「戦場と銃剣術」『新武道』1巻9号、1941年12月。

師団兵務部の高浪金治は学生の重要性をこう説明する。

国軍幹部の大部分は幹部候補生出身者であつて、中等学校以上に於いて配属将校の行ふ教練に合格したものの中から選抜補充するのである。……軍隊に於ける幹部候補生教育も亦其の期間著しく短縮してゐるので、これ等幹部の素<sup>マ</sup>要は、入隊前に於ける学校の武的訓練即ち教練の成果に絶大の期待をかけられ、殊に方今戦力の重点中の重点たる航空戦備に、陸海軍共に急速且多数の学<sup>マ</sup>驚の召募を見たのは、這般の消息を如実に物語るものである。学校教練を行ふ学校を予備士官学校の予備校とさへ目されてゐるのも、これがためなのである。今や一步進めて軍隊教育の極限——学校より直ちに戦場へを想定し、学校即ち戦場、教学即訓練——所謂兵学一如と叫ばれるに至つた次第である<sup>262</sup>。

陸軍では従来のように入隊後に十分な軍隊教育を施す余裕はなくなっていた。そこで幹部の養成を学校に期待することになる。しかし学校も年限の短縮、配属将校の応召、資材の欠乏などにより、陸軍が期待するような教育をおこなうことは困難な状態にあった。1944年2月に出された学徒軍事教育強化要綱は、北沢清によれば、「国民学校から大学に至るまでの一貫した軍事教練の教育体系を整へ、特に中等学校以上の軍教を実戦即応の訓練とすると共に、学校教練を単なる入営前に於ける軍事的予備教育として実施するといふ考へ方を一步飛躍せしめて、軍教育の一部を学校がその責任に於て分担することゝした」というものであった<sup>263</sup>。北沢はこれを「兵<sup>マ</sup>学一如の戦時教学」と呼んだが、そこに「学」の実態はなかった。

陸軍はあらゆる学生を幹部候補生とみなし、それゆえ最も厳格な軍人としての男性性を求めることになった。その背景には以下のような学生認識があった。

現在一番役に立つものは何かと言へば、体が丈夫で、学問があつて、気力旺盛な者である。そこへ行くと大学の卒業生は学問があるから、これが一番丈夫で働きがなくてはならん。その次に高等専門学校、中等学校、国民学校といふ順にです

262 高浪金治「学校教練に望む」『新武道』3巻10号、1943年10月。すでに同年6月に陸軍情報部長の谷萩那華雄が「今日の国民学校、青年学校は實質的に軍の予備校であり、中学校以上の諸学校は予備士官学校である」と述べていた（谷萩那華雄「決戦下の教育者に望む」『東京朝日新聞』1943年6月20日）。

263 北沢清「兵・学一如」『学徒体育』4巻5号、1944年5月。

ネ。ところがその体が逆なんです。これは非常な問題です。……こんなことでどうなります。われわれ軍の方から言つてもさういふ学問のある練れた者が結局戦をやつても強いので、さういふ人が欲しく、国家としてもさういふ能力のある人がやはり欲しい。ところがそれらの人が一番体が弱くて、肺病に罹つたりなんかで倒れて行つて役に立たんといふことは、国家としてこんな憂ふべきことはない<sup>264</sup>。

加藤真一は不甲斐ない学生の対極に農村の青年を置いた。陸軍戸山学校の村岡安も「体力優秀なる兵はいつの時代に於ても農村出身者でありました」と述べている。陸軍にとって理想的な兵士は農民であった。しかし、学生出身者から見れば、農民の体力にも問題があった。早大を卒業し、日立製作所につとめていた池田武一は、徴兵検査で第一乙種と判定され、1942年8月に善通寺の砲兵連隊に入隊した。1943年7月14日、体力検査がおこなわれた日の日記にこう記している。

農村出身者は見掛けはいい筋骨をしているのに、鉄棒の懸垂などもまるで駄目である。やはり補充兵だと思う。それに運動神経は、全然経験のない者と学生生活で多少でもスポーツをしたのとでは、まるで違って来るものだと痛感した<sup>265</sup>。

しかし、元学生のこうした見解に陸軍軍人が耳を貸すはずもなかった。学生とはそもそも皇軍兵士の男性性に合致しない存在であり、実際にどれだけ軍事的な能力を持つかという問題ではなかったからである。したがって、個々の学生、個々のスポーツマンがどれほど優秀であっても、総体としての学生、スポーツマン像は変わらなかった。

ところが、同じ学生であっても、敵国英米の学生は違った。陸軍報道部の杉本和朗はイギリスの学生と日本の学生を次のように比較した。

そこに行きますと、イギリスのケンブリッジ、オックスフォードなどの学生は、今度の大战ではもちろん、この前の大戦の時なんか、本当にみな志願してどん／＼学校から出て行つてしまつた。……そのくらゐに彼等の方は、普通の日本の青年学徒よりも挺身国家の難に赴くと云ふ精神に於て一段上ぢやないかと思ふ<sup>266</sup>。

264 「興亜教育に於ける体育文化の位置 座談会」。

265 池田武一『ある軍隊日誌』プレジデント社、1982年、221頁。

266 「戦局と指導者の覚悟を語る座談会」『新武道』3巻8号、1943年8月。

第二次世界大戦においても、欧米各国では早い時期から多くの学生が武器をとって戦線に立っていた。キャンパスの軍事化という点では、むしろアメリカのほうが日本よりも先行し、太平洋戦争勃発後数か月で「学校を全く軍隊化又は生産要員の養成所」にしてしまい、学生たちは「朝から晩までスポーツとダンスに遊び暮らす生活に区切りを打ったのだ<sup>267</sup>。これに対して日本では、学生は徴兵猶予の特権を手放そうとせず、「果して戦争意識があるかどうか、敵愾心があるかどうか考へてみました時、殆んど敵愾心の愾の字も見当らんものがある。敵愾心のなきところ戦争意識の昂揚といふことは到底望まれない」というありさまであった<sup>268</sup>。スポーツ界はスポーツの軍事的有用性を主張していたが、立派な体格を持つ学生運動家たちはスポーツを母国のために積極的に活用しようとはしなかったのである。それゆえ、陸軍は学生に最も厳格な男らしさを要求したのだ。

陸軍は学生のスポーツを問題視したが、スポーツそのものを否定したわけではない。児玉自身、「学徒の体育訓練と、厚生を主目標とした一般産業人の体育との間には、儼然たる相違がある」と述べているように、陸軍は、産業青年に対しては健全な娯楽の必要性を認め、野球やテニスですら否定しなかった<sup>269</sup>。

厚生省と内務省は1943年5月より部落会や町内会に健民部を、職場に健民会を設置して健民運動を展開するが、これと連動して大日本体育会は「勤労人の士気を昂揚し活力を培ふため構成的体育」を奨励することとなる。

学徒の訓練的立場から否定された野球、庭球のごときものも一般勤労人の厚生体育の点から、むしろ「軟球」に限って奨励する、また籠球、排球の如きも徒らに競技本位や形式本位に墮しないやう人員の編成や演技方法を改良し誰でも参加し勤労の余暇を楽しみ明日の生産活力を培ふやう指導する<sup>270</sup>。

1944年6月、戦況が悪化の一途をたどるなかで厚生省は「勤労体育の徹底普及と職

267 伊藤安二『日米学徒決戦論』越後屋書房、1944年、65、77-78頁。当時の大学がいかに軍事化していたかについてはV. R. Cardozier, *Colleges and Universities in World War II*, Praeger: Westport, Connecticut, 1993を参照。

268 「学徒決戦態勢座談会」『新武道』3巻4号、1943年4月。

269 児玉久蔵「戦時学徒体育訓練に望む」『新武道』3巻7号、1943年7月。

270 『東京朝日新聞』1943年12月20日。

場明朗化運動の一助として籠球、排球、避球等慰楽球技の普及指導」を図り、大日本体育会に大小各1万個のボールを生産して産業戦士に配給するよう指示した。さらに学童用にフィリピン方面の前線勇士から贈られた牛皮を使って数万個の避球（ドッジボール）を製作させていた<sup>271</sup>。これは陸軍の協力なしでは不可能なことであり、陸軍がけっしてスポーツを全否定したわけではないことを示している。

最後に、陸軍の体育・スポーツの方針に大きな影響を与えた陸軍戸山学校の戦時中の状況に触れておきたい。日中戦争が勃発すると、多数の学生が原隊に復帰し、教官の動員も相次ぎ、陸軍戸山学校は一時教育の停止を余儀なくされた。1939年に教育が再開されるが、この間校庭内のいたる所に陸軍病院の病棟が設置された。教育内容は、障害物突破、城壁攻撃（攀登を含む）、トーチカ攻撃（手榴弾投擲を含む）、対熱行軍、水泳など、より実戦的なものが増加した。スキーの研究も盛んだった。第7師団、第8師団、陸軍被服廠との合同研究の成果として、『スキー教育の参考』が刊行された。1939年に陸軍戸山学校に着任した温品博水はスキー研究に深く携わり、民間スキー界の協力もえて、実験を重ねた。1940年に外園にかわって体操科長となった温品は「学生教育の統轄の外、各隊の出張教育や文部、厚生、地方よりの時勢に応ずる指導で多忙な日を送った」。秋からは落下傘降下の研究にも携わった。1942年末から高山岳の突破に関する研究がおこなわれ、『山岳通過の参考』を作成した。1944年には南方密林戦や夜間視力増強訓練の研究が実施され、『夜間視力増進訓練の参考』を完成させた。しかし同年秋までにほとんどの教官助教が転出し、陸軍戸山学校は教育研究を停止した。研究内容が多様化複雑化するいっぽう、教育期間は当初5か月だったのが、1942年に3か月、1944年には2か月に短縮されていた<sup>272</sup>。

戦闘に関わる特殊技術の研究とならんで、陸軍戸山学校がこの時期に重点を置いたのは、健兵対策である。健兵対策は、1941年4月11日に東条英機陸相が師団長会議における訓示でその徹底を訴えたことで、本格的にはじまった。この背景には「現下ノ軍隊ノ実情ハ教育時間ノ短少、諸行事ノ繁雑、転出入ノ頻繁、幹部ノ能力低下、教育資材ノ不足及び徴集人員ノ増加ニ伴ヒ兵ノ体力低下ヲ予想セラルル等悪条件ガ多イ

271 『読売新聞』1944年6月21日。

272 鶴沢尚信編『陸軍戸山学校略史』32-36、75、222頁、温品博水「我が体育歴考」。

ニモ拘ラズ時局ノ要望スル所ハ益々累加シツツアル」という認識であった<sup>273</sup>。そこで「身体虚弱兵を以て特別教育班を編成し体操を主とし体力を漸進合理的に養成訓練するとともに軍隊内務との連繋を適切ならしめ訓練と休養と給養との調和を図」ったのが、健兵対策であった<sup>274</sup>。健兵を強兵にすることを前提とした従来の軍隊教育を見直し、各兵士の体力に応じた「漸進合理的」な手段を考慮しなければならないほど、兵士の素質は低下していたのだ。弱兵を健兵化する手段としては体操が重視された。体操は訓練的な軍隊体操と保育的な保健体操に分けられ、前者は基本体操、応用体操、団体競技から構成されていた。ただし、団体競技が具体的にどのようなものをさすのか、ここではまったく説明がなされていない（基本体操、応用体操は具体的な指示がある）。一方、保健体操は一般兵、病後衰弱者、工務兵等に分けて説明がなされる。工務兵に求められるのは「心気転換シ精神ヲ爽快ナラシムル運動」で、「基本体操、小競技等ヲ主体トシ一部応用体操ヲ加」えるよう指示している<sup>275</sup>。温品が編纂した『小競技』の改訂版が1942年11月に出版されたのは、この方針に基づいたものと思われる。

温品によれば、このころ陸軍戸山学校では『体操教範』の改正に取り組んでいた。新しい『体錬教範』は1944年に教育総監に提出されたが、審議中に終戦となってしまふ。

温品によれば、基準科目を数値化し、団体競技を多く採用したのが新教範の特徴であった。防衛研究所に所蔵される『体錬教範』がおそらく温品のいう新教範であろう。現存する『体錬教範』は1945年4月に教育総監部が作成したもので、第一部のみ、しかも附表の類も添付されていない。以下の表に第一部の内容を示しておく。

第1篇 基本運動	走力、懸垂力、運搬力
第2篇 戦場運動	行進、攀登・降下、重量物運搬、跳躍、手榴弾投擲、障碍通過、総合鍛錬
第3篇 補助運動	基礎運動、準備運動、調整運動、軽運動
第4篇 応用運動	徒手運動、器械運動

273 陸軍戸山学校編『健兵対策の参考』陸軍戸山学校将校集会所、1942年、22頁。

274 鶴沢尚信編『陸軍戸山学校略史』70頁。

275 陸軍戸山学校編『健兵対策の参考』88-89頁。

第5篇 競技	個人競技、団体競技
附録	相撲、団体競技（籠球、投球戦、球戦）、眩暈対性運動

従来の教範と比べて顕著な違いは、補助運動と競技が主たる項目として独立したことである。これらが兵士一般の体位低下に対応するものであったことは言うまでもない。なお、温品のいう団体競技はおそらく第5篇の団体競技であろう。これはバスケットボールのようなスポーツではなく、「通常基本運動並ニ戦場運動ヲ団体ヲ以テ実施セシムルモノ」である。現在の『体錬教範』と温品の証言を併せて考えると、新教範は軍隊教育を精兵の養成から健兵の養成へと後退させたものと位置づけることができる。軍人はもはや最高の男性性を体現する存在ではなくなった。軍事的男性性の破綻は大日本帝国の崩壊を予示するものであった。

おわりに

はじめにで提起した男性性、および鍛錬と娯楽の観点から、本稿の議論を整理してみよう。まず指摘さるべきは、海軍と陸軍の違いである。海軍の男性性はスポーツと矛盾することなく、スポーツは鍛錬として、また娯楽として、敗戦にいたるまで広く実施されていた。

これに対して陸軍では、1930年代に男性性が大きく変化し、1920年代に一時盛んだったスポーツは衰退していった。そして戦争が始まると、陸軍は総力戦の要請からスポーツ界、とりわけ学生スポー

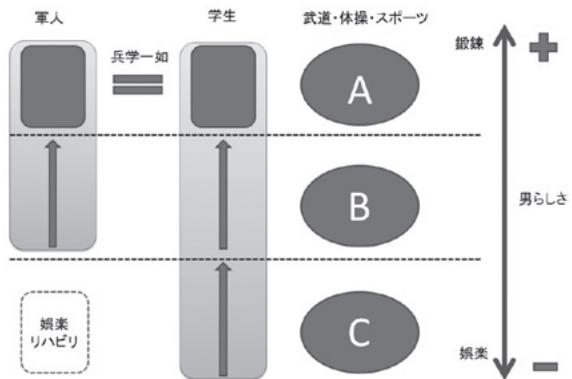


図5 男性性から見た軍隊とスポーツ

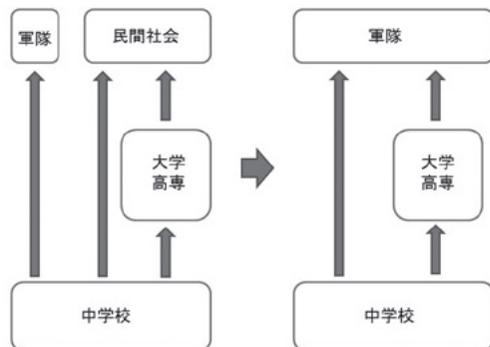


図6 兵学一如への変化

ツ界への干渉を強めていった。いわゆるスポーツの弾圧を理解するために作成したのが図5～図7である。図5の縦軸は男らしさの度合いを示し、上に行くほど男らしく、下に行くほど男らしくないことを表している。男らしさの度合いは、鍛錬（錬成）の度合いにも対応する。鍛錬の対極には娯楽が置かれる。この両極は、国家主義と個人主義、修行と興味、国民と非国民といった言葉に置きかえることもできよう。

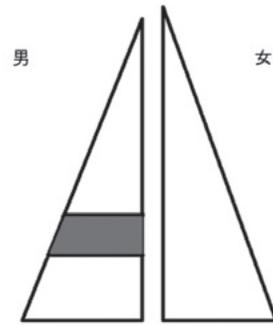


図7 青年男子の位置

A、B、Cは武道、体操、スポーツをグループ化し、男らしさに対応させたものである。A群は最も男らしく、陸軍が最も重視したものである。ここには銃剣道、射撃、水泳、馬術、グライダー、行軍（登山）、戦場運動（陸上）、剣道、柔道、弓道、相撲、体力章検定種目、体操などが入る。C群はその対極で、最も男らしくなく、陸軍が最も重視しなかったもので、バレーボール、テニス、野球、卓球などが入る。B群はその中間で、『体操教範』で採用されたバスケットボール、投球戦（ハンドボール）、球戦（サッカー）と、陸軍戸山学校でおこなわれていたホッケー、そしてラグビーから構成される。これらは軍人にふさわしいスポーツと見なされていたが、やがて軍人にふさわしいものでなくなっていく。1941年秋に明治神宮大会の種目からホッケーとハンドボールが除外されたことが、まさにこの変化を示している。最終的には、戦争に直接役立つと陸軍が考えたA群だけが軍人にふさわしいものと見なされた。また、A、B、C各群のなかでも序列が存在し、たとえばA群では銃剣道、射撃が最上位に、弓道や相撲は最下位に位置した。ただし、これも時期によって若干の推移があり、剣道と柔道は徐々に序列が下がっていった。

スポーツの価値と男らしさが結びつけられていたことは、次のような証言にうかがうことができる。

一体、卓球は女性的スポーツだから、練習だといって屋内でポンポンやっているとか何かサボって遊んでいるみたいで気がひける。舎外では泥だらけになってラグビーやったり、汗みどろでサッカーやっているのに。卓球選手一同、口では「分隊を代表して。」とか「分隊の名誉のために。」等と大きな事を言っているが、内

心では「もっと男性的スポーツの方が面白いだろうなあ。」と思っているに違いない。流石は日本男子である<sup>276</sup>。

これは海軍の予備学生の言葉であるが、陸軍の場合も事情は同じである。バレーボールやテニス、卓球は男らしくない、婦女子の遊戯だという言説は、すでになん度も見てきた。それは堂々たる男子のすべきことではないのだ。もっとも、軍人にも序列があり、一般の軍人は、傷痍軍人や軍属よりも男らしい存在とみなされていた。軍人のなかでも、歩兵は輜重兵や看護兵よりも男らしい存在だった。より男らしい軍人には、より男らしい武道、体操、軍事訓練が求められ、より男らしくない軍人・軍属はスポーツをしてもさほど問題とされなかった。学生の男らしさにはA、B、C群いずれも含まれたが、陸軍から見れば、A群を実践する学生はより男らしい学生であり、C群を実践する学生はより男らしくない学生であった。戦争がはじまり、B群とC群、すなわち外来スポーツへの圧力が高まるなかで、スポーツ界はスポーツをより鍛錬化する（＝男らしさを高める）ことで存続を図ろうとした。

蓋し皮相の見方をすると庭球は動作優柔なるが如く恰も婦女子の遊戯であるかの如き外観を呈するが故に大なる誤解を招き易いと云ふ点はあるが所謂「運動」として行はれる庭球と「練成」として行はれる庭球との間には形こそ趣を同ふするが其の練成の方法なり精神に於ては全然その趣を異にして居るのである。……庭球は外来のスポーツに相違なきも已に換骨奪胎して最も日本的最も古武士的に育成されつゝある日本独特のスポーツとなつて居ると云つて過言でない<sup>277</sup>。

古武士は軍人とともに最も男らしいとされた存在であった（剣道の重視もここに由来する）。外来の、婦女子の遊戯でなく、日本独特の、古武士的な錬成であると主張することで、テニスの男らしさを高めようとしたわけだが、こうした努力は報われなかった。1943年春、戦時学徒体育訓練実施要綱は学生スポーツの範囲を大幅に制限し、A群とラグビーだけが許されることになった。そのラグビーも1943年秋以降、ほぼ活動を停止した。ここに、軍人に求められた男らしさと、学生に求められた男らしさは一致することになった。「兵学一如」である。

276 片岡幸三郎『海軍予備学生の手記』片岡英幸、1998年、230-231頁。

277 岡田四郎「誤れり矣庭球抹殺論」『日本庭球』2巻4号、1943年4月。

図6はライフコースの視点から「兵学一如」への変化を図式化したものである。従来、中学校の卒業生には、さらに上級の学校に進学する、軍学校に入学する、社会人になるといった選択肢があった。陸軍からすれば、中学生の一部が陸軍士官学校に入学し、また兵役に就くことから、中学校にある程度の軍事的な男らしさの養成を求めないわけにはいかない。学校教練はその代表であろう。ところが、戦況が悪化するなかで、中学校は軍学校化し、軍人を養成することが教育の第一義となった。中学生は、なかには上級学校に進学するものがあるものの、いずれはみな軍隊に入ることが想定された。このため、軍は軍人としての男らしさを中学生にも求め、スポーツよりも軍事訓練を優先した。一般の中学校に相当する陸軍幼年学校でスポーツが許されていたことを考えると、陸軍は軍学校以上に、一般の中学生に軍人としての男らしさを要求したのだ。また中学校以上の学校については、岡部長景文相が「今日の上級学校は皇軍の幹部養成所たる実情」にあると訓示したように、よりいっそう軍人としての男らしさが要請された。

一方で陸軍は戦場の部隊にスポーツを許した。戦闘や警備に従事する兵士たちは、つねにストレスにさらされ、鍛錬ばかりを要求するわけにはいかない。

当地は北満〇〇鉄道の〇〇駅より約〇〇里……国境の村落だ……天気の良い日には前方に少し出れば露兵が、バスケットボールらしい球技に戯れたりスケートで馬鹿に図体の大きな奴が転倒したりなどしてゐる中々朗らかな風景に接したりなどする事もある。こんな処は国民性の差異と言はふか……夜にもなれば、バラライカでロシヤ舞踏を踊つて、ウオッカーでも舐めてやがるに違ひないと思ふと些か羨望の念を禁ぜざるを得ぬ次第である。上御一人を中心とする吾々の精神的優越に反し彼等の压制又压制に基く精神的貧困に対して、其の鬱噴<sup>ママ</sup>を斯る形而下に延ばして、ふざけてみやがる位に独善的に考へて済ませば夫れ迄の話だが、こうして只管日夜軍務に精励する処に皇軍の無類の頑固さがあるのかも知れない<sup>278</sup>。

東京帝大排球部出身のこの兵士は、スポーツや舞踏に興じるソ連軍兵士を見て、羨

278 坂本稔「国境漫筆」東京大学バレーボール部五十年史編集委員会編『東京大学バレーボール部五十年史』編者刊、1975年。

望の念を抱きながらも、精神的優越を想起することで、必死に自分を納得させようとしている。娯楽を罪悪視し、鍛錬を至上のものとする皇軍の価値観を内面化しようとする努力しつつも、自分の置かれた惨めな状況を顧みたとき、やはり「羨望」を抑えきれないのだ。士気を維持するにも娯楽は必要であった。国内の学生たちの娯楽と違って、兵士の娯楽は兵士自身の男らしさを損なうとは考えられなかった。戦場のスポーツは治安回復や余裕の証と受けとめられた。これに対して、陸軍は国内でのスポーツは、娯楽として徹底的に抑制した。

学生スポーツの弾圧とは、学生の軍人化、より正確に言えば青年男子の軍人化の一側面だった。青年男子とは、おおよそ15歳から25歳までの男性で、体力章検定の対象者でもあった。彼らは陸軍が士官・兵士（の候補）と見なしていた層である。図7は1940年の人口ピラミッドを図式化したもので、網掛け部分が青年男子にあたる。青年男子は全人口からすれば一部にすぎない。その他の人びとは、スポーツなどによって心身を鍛錬し、産業人や軍人の妻、軍人の母、あるいは防空の指導者として、前線の軍人を支える役割を果すことが求められていた。女らしさも軍事や鍛錬によって定義されるようになったのだ。

「ジェンダーの軍事化」は、青年男子のスポーツを排除する方向に働いたが、それ以外のスポーツを排除することはなかった。戦後、スポーツ界では軍部によるスポーツ弾圧というイメージが形成されるが、実際には戦争末期ほど陸軍や政府が国民全体の体育を重視したときはなかった。このときスポーツ界自身も国民体育を推進し、男子学生を戦場へと送りこむ手助けをしていた。スポーツの弾圧とは、男子学生によるエリート・スポーツに局限した、そして多分に戦争責任の転嫁を含んだ戦時下スポーツの一解釈でしかない。

航空隊はスポーツと相性が良かった。飛行機乗りには運動神経が求められ、飛行機での戦闘にはチーム・スポーツと共通する点が多いと考えられていた。陸軍の少年飛行兵や海軍の予科練習生はしばしばスポーツマンとして描かれた。さらに、岡部文相がアメリカの飛行機搭乗員の8割が学生出身であることを念頭におきつつ、「飛行機の精密性とその戦闘の智能性から見て、これが操縦整備に当る者特に幹部指揮者たる者には、高等教育を受けた者が最も適当であることは論を俟たない」と述べたごと

く、飛行機には学生が適していると考えられていた。したがって、学生のスポーツマンは二重の意味で理想的な航空要員だった。

航空戦の重要性が認識されるにつれ、陸海軍やメディアは少年たちに空への夢を煽った。「空だ、男の行くところ」——少年飛行兵募集のポスターはこう呼びかける。しかしそれだけでは飛行兵は集らない。陸軍情報部長の谷萩那華雄が「少年兵募集の主力は航空関係にあるが、志願者の母や姉が航空を危険視し、又子弟を溺愛するあまりこれに賛成同意せぬといふことがよくある、これらの女性をしてよく航空を理解せしめ進んで子弟を大空に活躍せしむる適任者はやはり学校の先生である」と語るように、女性への働きかけも重要であった<sup>279</sup>。小説家古川真治は東京陸軍少年飛行兵学校を訪問したさい、10名の少年飛行兵に話を聞いたところ、母親が入学を許可したのは1名だけで、母親のいない3名をのぞく残りの6名全員が、入学通知を受け取ってはじめて母親が諦めて許してくれたと語った。かつて古川は熊谷陸軍飛行学校を題材にした小説「空だ、男子の行くところ」で、飛行機好きの母親を登場させていた。この母親は生前、息子に少年飛行兵になるよう勧めており、息子は母の死後、見事に試験に合格するという設定だった。古川は現実との違いに愕然としたに違いない。「母のともすれば盲目的な愛にひきかへ、父の愛は一と廻り大きい」——それが古川のコメントだった<sup>280</sup>。

少年たちの空への「熱狂」は強制される場合もあった。1943年7月5日、加藤真一の母校愛知県第一中学校で3年生以上の生徒大会が開かれ、700名全員が海軍甲種飛行予科練習生に志願するという「快挙」があった。当時愛知一中の学生だった江藤千秋は戦後にこの事件の真相に迫る書物『積乱雲の彼方に』を書いた。同書によれば、この快挙は校長をはじめとする一部の教師や上級生の強い誘導のもと、生徒大会の熱狂的な雰囲気の中かでなされたものであった。多くの生徒にとってそれが本意でなかったことは、実際の入隊者が56名しかいなかったことからわかる。当時、名古屋で連隊区司令官をしていた加藤真一も遠望訓練を推奨するなどして、視力不足で

279 谷萩情報部長「決戦下の教育者に望む」『東京朝日新聞』1943年6月20日。

280 古川真治『僕らの航空読本』玉川学園出版部、1944年、61-69頁、古川真治「空だ、男子の行くところ」『小学四年生』19巻6号、1941年9月。

空への夢を断念した生徒たちを空へ駆り立てようとしていた<sup>281</sup>。総決起事件は、まさしく内田雅克が論じたウィークネス・フォビア（「弱」に対する嫌悪と、「弱」と判定されてはならないという強迫観念）の産物であった<sup>282</sup>。

前稿では、男性性、鍛錬／娯楽、皇室に焦点をあてた。本稿で第三の問題、すなわち皇室についてほとんど言及しなかったのは、本稿で扱った時期、とりわけ日中戦争以降、皇室に積極的な役割を見いだすことができなかつたためである。たしかに、明治神宮大会では皇室が総裁をつとめたし（第9回：賀陽宮、第10・11回：秩父宮、第12・14回：高松宮、第13回三笠宮）、1940年6月の東亜大会でも秩父宮が総裁をつとめた。しかし、明治神宮大会そのものが軍事化し、スポーツは排除されていった。明治神宮大会と東亜大会を除けば、皇室とスポーツ界の関係はかつてほど密接ではなくなっていた。1920年代、自らスポーツを実践していた昭和天皇、秩父宮、高松宮もこのときは40歳前後になっており、皇室として軍人として多忙な日々を送っていた。スポーツの宮様、秩父宮は東亜大会のころから体調を崩し、肺結核と診断されて療養生活に入った（同年秋の第11回明治神宮大会も欠席）。野球好きの賀陽宮も野球の禁令に口を挟むことはなく、スポーツ界の側も軍部の圧力をかわすために皇室の力に期待することはなかった。1920年代の平民的な皇室が媒介となって結びついた軍隊とスポーツは、天皇が神格化されるなかで繋がりを失い、「皇軍」とスポーツは対極の男性性をなすにいたった。菊と星と五輪のトライアングルは、星と五輪の間で切断されてしまったのだ。

281 江藤千秋『積乱雲の彼方に：愛知一中予科練総決起事件の記録』法政大学出版局、1981年。

282 内田雅克『大日本帝国の「少年」と「男性性」：少年少女雑誌に見る「ウィークネス・フォビア」』明石書店、2010年、13頁。